榛原町内埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1991年度

榛原町文化財調査概要　7

1 9 9 2

榛 原 町 教 育 委 員 会

榛原町内埋蔵文化財発掘調査概要報告書　1991年度

榛原町文化財調査概要　7

1 9 9 2

榛 原 町 教 育 委 員 会

序

大和の東方、宇陀地方には、多くの文化財が存在しています。なかでも埋蔵文化財は、毎年、各所で発掘調査等が行われ、貴重な成果をあげています。当町では平成３年度に７件の発掘調査と１件の測量調査を実施し、新しい知見を得ることができました。

本書は、これらの成果を集録し、『榛原町文化財調査概要７』として刊行するものです。本書が僅かながらも今後の調査・研究の一助となれば幸いです。

これらの調査を実施するにあたっては、奈良県教育委員会、各事業者の方々をはじめ、関係機関ならびに関係各位のご協力を賜り謹んで厚くお礼申し上げます。

平成４年３月

榛原町教育委員会

教育長　山　尾　正　弘

例　　言

1　本書は、1991年度（平成３年度）に榛原町教育委員会が実施した榛原町内埋蔵文化財発掘調査の概要を集録したものである。

2　各遺跡の所在地等は図２、表２・３に詳しい。

3　現地調査は、奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所の指導のもと榛原町教育委員会技師　柳澤一宏が担当した。

4　調査組織および関係者は、各本文中に詳しい。

5　各遺跡の調査記録、遺物等は榛原町教育委員会において保管している。

6　本書は、柳澤が執筆・編集を行い、一部を本村充保が補佐した。

目　　次

Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要…… 1
Ⅱ　位置と環境…… 3
Ⅲ　萩原西高田遺跡発掘調査概要…… 9
Ⅳ　萩原前川遺跡発掘調査概要…… 23
Ⅴ　八滝長坂遺跡発掘調査概要…… 29
Ⅵ　萩原狐ヅカ遺跡発掘調査概要…… 37
Ⅶ　下井足カワタ遺跡発掘調査概要…… 45
Ⅷ　戒場遺跡発掘調査概要…… 53
Ⅸ　下井足城山古墳群発掘調査概要…… 55
Ⅹ　行者山古墳群測量調査概要…… 83
付載１　榛原町八滝採集の須恵器…… 89
付載２　伝　山部赤人墓五輪塔実測調査概要…… 91

Ⅰ　埋蔵文化財発掘調査の概要

榛原町では、1968年（昭和43年）以降、土木工事等の開発行為にともなう埋蔵文化財の発掘調査が本格的に行われており、その件数は年々増加傾向にある。今後も町内各所で多くの開発行為が計画されており、埋蔵文化財の取り扱い等について協議を重ねているところである。

当委員会が扱った1991年度（平成３年度）の発掘届・通知、発掘調査等は表１・２のとおりである。

表１　発掘届・発掘調査件数等一覧表

摘要＼年度	1987	1988	1989	1990	1991
発掘調査届　（民間）	3	2	0	4	4
発掘調査通知（公共）	6	13	6	9	4
遺跡踏査願	1	4	3	4	2
発掘調査（町教委担当）	4	4	3	7	7
立会調査（町教委担当）	2	3	1	0	0

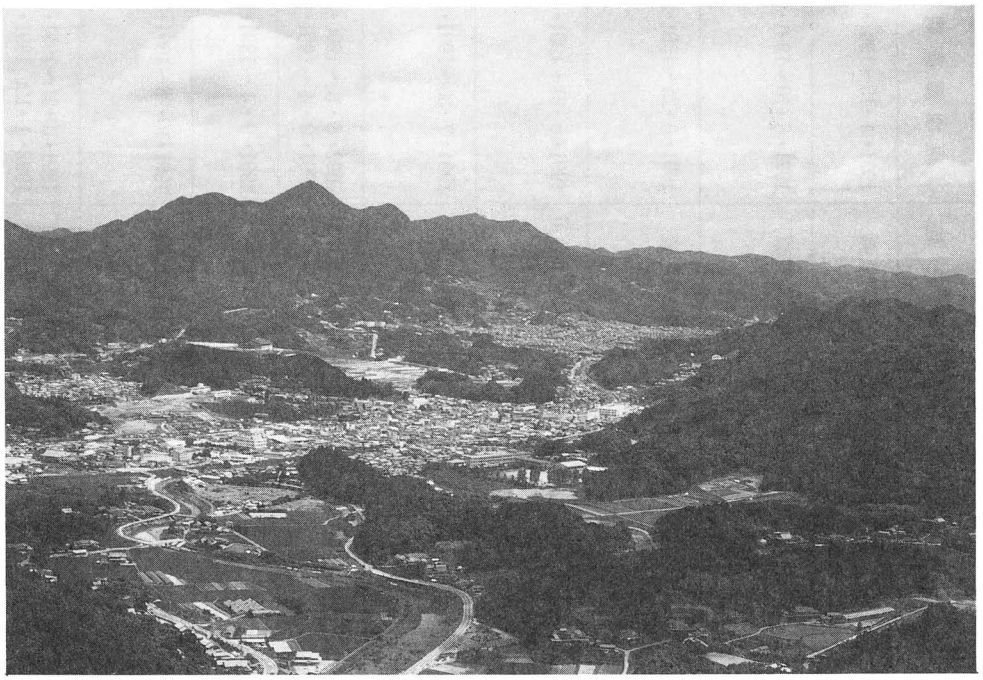


写真１　開発が進む近鉄榛原駅周辺

表２　1991年度発掘調査等一覧表

番号	榛原町遺跡番号	遺跡名	調査地	現地調査期間	調査原因（原因者）	調査概要		備考
						遺構	遺物	
1	1 - 113	萩原西高田遺跡（はぎはらにしたかだ）	榛原町萩原	1991・4・15～1991・5・10	宅地造成工事（三和相互㈱）	土坑（土壙）24	土師器、陶磁器、鉄釘、銭貨	本報告
2	1 - 24	萩原前川遺跡（はぎはらまえがわ）	榛原町萩原	1991・6・10～1991・6・12	共同住宅新築工事（松塚建設㈱）	なし	サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器	本報告
3	4 - 23	八滝長坂遺跡（やだきながさか）	榛原町八滝	1991・6・25～1991・7・2	農地造成工事（榛原町）	なし	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器	本報告
4	2 - 60	下井足城山古墳群（しもいだにしろやま）	榛原町下井足	1991・5・21～1991・8・13	町道拡幅工事（榛原町）	古墳、３基、土坑、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器、鉄鎌、鉄刀子、瓦器、銭貨	本報告
5	1 - 115	萩原狐ヅカ遺跡（はぎはらきつね）	榛原町萩原	1991・7・30～1991・8・23	宅地造成工事（三晃住宅㈱ほか）	なし	土師器、鉄釘、銭貨	本報告
6	1 - 100	下井足カワタ遺跡（しもいだに）	榛原町下井足	1990・8・8～1990・8・22 1991・9・4～1991・9・30	道路新設工事（榛原町）	溝	須恵器、土師器、鉄釘	本報告
				1991・9・4～1991・9・30	農地造成工事（個人）	土坑、溝、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器	榛原町文化財調査概要８
7	3 - 1・2	戒場遺跡（かいば）	榛原町戒場	1991・10・23～1991・12・6	農地造成工事（榛原町）	掘立柱建物跡、溝、土坑、ピット	サヌカイト片、須恵器、土師器、瓦器	一部本報告 榛原町文化財調査概要８
8	2 - 283～285	行者山古墳群（ぎょうじゃやま）	榛原町笠間	1991・10・21～1991・12・26 1992・1・12、1991・1・20	（測量調査）	前方後円墳１基、円墳２基		本報告

Ⅱ　位置と環境

1　地理的環境

奈良県の東方の山間部に宇陀と呼ばれている地域が広がっており、現在の行政区画では、大宇陀町、榛原町、菟田野町、室生村、曽爾村、御杖村からなっている。この宇陀地方は、地理的な状況から西半と東半に大別でき、一般に前者が「口宇陀」、後者が「奥宇陀」とも総称されている。口宇陀は標高300～400ｍの丘陵とこの間を縫って流れる中小河川が複雑に入り乱れ、これらが幾つもの小盆地や浅い谷地形を形成しており、口宇陀盆地とも称され、大宇陀町、榛原町、菟田野町の大半がここに含まれている。これに対し、東部の奥宇陀は室生山地、高見山系などの峻しい山々が連なっており、奥宇陀山地とも呼称されている。

口宇陀地域の主要河川は、西に宇陀川、東に芳野川があり、幾つもの小河川を合わせながら榛原町萩原で宇陀川本流となる。榛原を後にした宇陀川は三重県で名張川となり、木津川、淀川を経て遠く大阪湾へと至り、大和川流域とは水系を異にしている。

榛原町の四周は概ね標高約400～800ｍの山塊に囲まれ、東は高城岳、三郎岳、室生村へと通じる石割峠があり、北は大和高原とをわける額井岳、香酔山、鳥見山などの山々が屏風状に連なり、宇陀の地を見下ろしている。西は桜井市や大宇陀町、南は菟田野町となっており、丘陵をもってそれぞれの境界としている。地形的にみれば榛原町の西半は口宇陀、東半は奥宇陀的な様相を呈している。

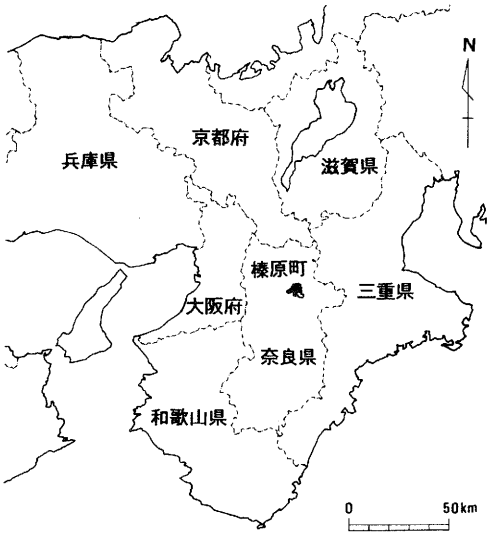


図１　榛原町位置図

2　歴史的環境

宇陀地方は、『古事記』、『日本書紀』をはじめとする多くの文献にも度々登場し、軍事・交通の要衝であったことを窺い知ることができ、今に残る地名、伝承等も多い。

榛原町を流れる宇陀川・芳野川・内牧川流域の各所には多くの遺跡が分布しており、発掘調査・分布調査を重ねるにしたがって、その数も増加している。

これまでに、町内では３点の有舌尖頭器が出土している。これらの時期は、旧石器時代末期から縄文時代草創期に求めることができ、この頃が宇陀の歴史の初源であろう。

縄文時代の遺跡の多くは、先述の河川流域の河岸段丘上、尾根上、谷部等に認められる。これら

の遺跡の多くは、採集遺物によっているため、その実態が必ずしも明らかとはいえない。また、発掘調査によって確認された場合でも、数点の遺物が出土しているのみで、遺跡の全容が明らかになったものは少ない。このような状況のもと高井遺跡では、早期から後期にわたる集落跡であることが発掘調査によって明らかとなっている。

弥生時代前期から中期の遺跡は数少ないが、後期に属するものは比較的多く確認している。これらは、地理的制約のためか、奈良盆地で見られるような大規模な集落ではないが、次代の古墳時代へと継続するものが多い。

弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓である方形台状墓は、これまでに野山遺跡群、能峠遺跡群、下井足遺跡群、大王山遺跡群、キトラ遺跡などで確認されている。この頃の集落としては、戸石・辰巳前遺跡、高田垣内遺跡、能峠中島遺跡、上井足北出遺跡、谷遺跡などを挙げることができ、谷部を流れる川跡や竪穴式住居跡などが確認されている。

古墳時代前期の古墳は谷畑古墳、中期の古墳としては高山１号墳、シメン坂１号墳などが発掘調査によって明らかにされている。後期となると古墳数は著しく増加し、ある程度の粗密があるものの、町内各所の尾根上には数基から十数基単位で分布している。５世紀後半から盛期を迎える古墳群は野山古墳群、沢古墳群、栗谷古墳群、大王山古墳群、丹切古墳群などが知られている。６世紀後半以降、今までの木棺直葬墳にかわって横穴式石室が築造されるようになり、丹切古墳群、能峠古墳群、石田古墳群、大貝古墳群、西谷古墳群をはじめ、多くの古墳が発掘調査によって状況が明らかになっている。

横穴式石室に変わる新しい葬法として火葬墓が登場してくるが、最も代表的なものが、壬申の乱で活躍した将軍の一人で渡来系民族でもある文祢麻呂の墳墓である。現在、墳墓は史跡、墓誌などの出土品は国宝となっている。

古代末には宇陀においても荘園の開発が急速に進み、このなかで台頭してきた在地武士団は、興福寺、春日社などの支配のもと各自が発展を続けた。この武士団は「宇陀三人衆」の秋山氏・沢氏・芳野氏に代表され、彼らは秋山城・沢城・芳野城をそれぞれの居城としていた。また、小規模な城館跡も各所に点在しており、城館の廃絶後、中世墓地と化したところもある。いわゆる中・近世墓地は、まとまったところでは、大王山遺跡、能峠遺跡群、八咫烏遺跡群、野山遺跡群などが知られている。

（参考文献等省略）

表３　榛原町遺跡分布図（図２）対照表

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
1	鳥見山中腹遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生	一部削平
2	岩尾火葬墓	榛原町萩原	火葬墓	奈良	
3	南山古墳	榛原町萩原	円墳（磚積石室）	古墳後	
4	清水谷遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生～古墳、中世	
5	天ノ森遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	縄文～弥生、中世	
6	西峠古墳	榛原町萩原	円墳（磚積石室）	古墳後	
7	萩原前川遺跡	榛原町萩原	遺物散布地	弥生、古墳、中世	**本報告**
8	萩原西高田遺跡	榛原町萩原	近世墓	江戸	**本報告**
9	萩原狐ヅカ遺跡	榛原町萩原	遺物散布地、近世墓？	江戸	**本報告**
10	キトラ遺跡	榛原町萩原	方形台状墓、中世墓	古墳前、中世	
11	谷畑中世墓地	榛原町萩原	中世墓地	室町	
12	谷畑古墳・神木坂古墳群	榛原町萩原	円墳（木棺）、方墳（横穴式石室、磚積石室）	古墳前・後	
13	奥ノ芝古墳群 福地城遺跡	榛原町福地	円墳（木棺、磚積石室） 住居跡、城跡	古墳前・後、中世	1･2号墳県史跡（1985年、1号墳は宅地造成工事で破壊）
14	長峰古墳群	榛原町長峰	円墳群	古墳	
15	北谷古墳群	榛原町福地	前方後円墳・円墳（横穴式石室）	古墳後	
16	不動堂古墳群	榛原町桧牧	円墳（横穴式石室）	古墳後	
17	石風呂古墳	榛原町桧牧	円墳（横穴式石室）	古墳後	
18	石風呂遺跡	榛原町桧牧	遺物散布地	縄文、古墳、中世	
19	丹切遺跡	榛原町萩原・下井足	遺物散布地	縄文～中世	
20	丹切古墳群	榛原町萩原・下井足	円墳(木棺直葬・横穴式石室)ほか	古墳後	
21	下井足カワタ遺跡	榛原町下井足	遺物散布地	弥生、古墳後、奈良、中世	**本報告**
22	下井足古墳群	榛原町下井足	方形台状墓、円墳ほか	古墳前～後	**本報告** （城山古墳群）
23	井足城跡	榛原町下井足	城跡	中世	
24	愛宕山遺跡	榛原町上井足	円墳（石室）	古墳後	谷支群
25	谷遺跡	榛原町上井足	集落跡	弥生～古墳	
26	能峠遺跡群	榛原町上井足	方形台状墓、円墳、小型横穴式石室、集落跡、城跡、中世墓地ほか	縄文～江戸	北山地区、南山地区、西山地区、中島地区
27	上井足ワラ田古墳	榛原町上井足	円墳、竪穴系横口式石室２、箱形木棺	古墳後	
28	前山１号墳	榛原町上井足	円墳（割竹形木棺）	古墳中	
29	上井足北出遺跡	榛原町上井足	集落跡	縄文～中世	
30	高田垣内遺跡群	榛原町上井足	集落跡、前方後円墳、円墳、方墳、墳墓ほか	縄文草、弥生～江戸	
31	大王山遺跡群	榛原町下井足・篠楽	住居跡、方形台状墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡他	弥生～江戸	
32	篠楽アサマ遺跡	榛原町篠楽	遺物散布地	弥生～古墳、中世	
33	ダケ古墳	榛原町雨師	前方後円墳（竪穴式石室）	古墳後	
34	澤ノ坊２号墳	榛原町笠間	前方後円墳	古墳前	
35	石榴垣内遺跡群	榛原町笠間	集落跡、古墳	古墳～鎌倉	
36	行者山古墳群	榛原町笠間	前方後円墳、円墳	古墳	
37	池上遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生後	
38	仮称　池上東遺跡	榛原町池上	遺物散布地	弥生中～後	
39	高山古墳群	榛原町池上	方墳（割竹形木棺）	古墳中	

番号	遺跡名	所在地	遺跡概要	時代	備考
40	灌頂寺跡	榛原町福西	寺跡、墓地	中世	八咫烏遺跡群
41	福西城跡	榛原町福西	城跡	中世	
42	高塚遺跡	榛原町高塚	遺物散布地（集落跡）	弥生～古墳、中世	
43	栗谷尾尻古墳群	榛原町栗谷	円墳（木棺直葬）	古墳後	
44	栗谷トノヤシキ遺跡群	榛原町栗谷	円墳(木棺直葬)、城館跡、中世墓	古墳後、中世	
45	三角遺跡	榛原町栗谷	遺物散布地（集落跡）	縄文～弥生、中世	
46	石田1号墳	榛原町石田	円墳？（横穴式石室）	古墳後	
47	鳥羽1号墳	榛原町石田	円墳　（小型横穴式石室）	古墳後	
48	澤城跡	榛原町大貝・澤	城跡	中世	
49	文祢麻呂墓	榛原町八滝	墳墓	奈良	国史跡
50	大貝ヒジキ山遺跡	榛原町大貝	遺物散布地（集落跡）	縄文晩～古墳後、中世	
51	大貝古墳群	榛原町大貝	円墳（横穴式石室）	古墳後	
52	澤古墳群	榛原町澤	円墳（割竹形木棺）	古墳中～後	
53	澤遺跡	榛原町澤	遺物散布地（集落跡）	縄文後～古墳後、中世	
54	下城・馬場遺跡	榛原町澤	遺物散布地（集落跡）	縄文後～古墳後、中世	
55	野山遺跡群 戸石・辰巳前遺	榛原町澤	方形台状墓、前方後円墳、円墳、中世墓、寺跡、遺物散布地（集落跡）ほか	古墳前～江戸	
56	戒場遺跡	榛原町戒場	遺物散布地、寺跡？	縄文、平安～室町	**本報告**
57	伝　山部赤人墓	榛原町山辺三	墳墓？（鎌倉時代の五輪塔）	鎌倉	
58	山辺城跡群	榛原町山辺三	城跡	中世	
59	篠畑神社前遺跡	榛原町山辺三	遺物散布地	縄文、中世	大半破壊
60	仮称　赤瀬古墳群	榛原町赤瀬	円墳（横穴式石室）	古墳後	
61	桧牧遺跡	榛原町桧牧	遺物散布地	縄文早、鎌倉	
62	西谷古墳群	榛原町桧牧	円墳（横穴式石室）	古墳後	
63	桧牧城跡	榛原町桧牧	城跡	中世	
64	高井遺跡	榛原町高井	集落跡	縄文早～後、奈良～中世	
65	赤埴下志明遺跡	榛原町赤埴	住居跡	縄文、中世	
66	赤埴上俵遺跡	榛原町赤埴	遺物散布地（集落跡）	縄文、平安～中世	
67	赤埴城跡	榛原町赤埴	城跡	中世	上城
68	諸木野城跡	榛原町諸木野	城跡	中世	
69	八滝長坂遺跡	榛原町八滝	遺物散布地	縄文、中世	**本報告**
70	内牧カラト遺跡	榛原町内牧	遺物散布地、祭祀遺跡？	縄文、奈良	
71	仮称　滝谷遺跡	榛原町内牧	（有舌尖頭器採集）	縄文草	
a	墨坂神社	榛原町萩原			
b	宇太水分神社	榛原町下井足	式内社		
c	椋下神社	榛原町福地	式内社		
d	丹生神社	榛原町雨師	式内社		
e	八咫烏神社	榛原町高塚	式内社		
f	都賀那岐神社	榛原町山路	式内社		
g	篠畑神社	榛原町山辺三			
h	御井神社	榛原町桧牧	式内社		
i	味坂比売命神社	榛原町荷坂	式内社		

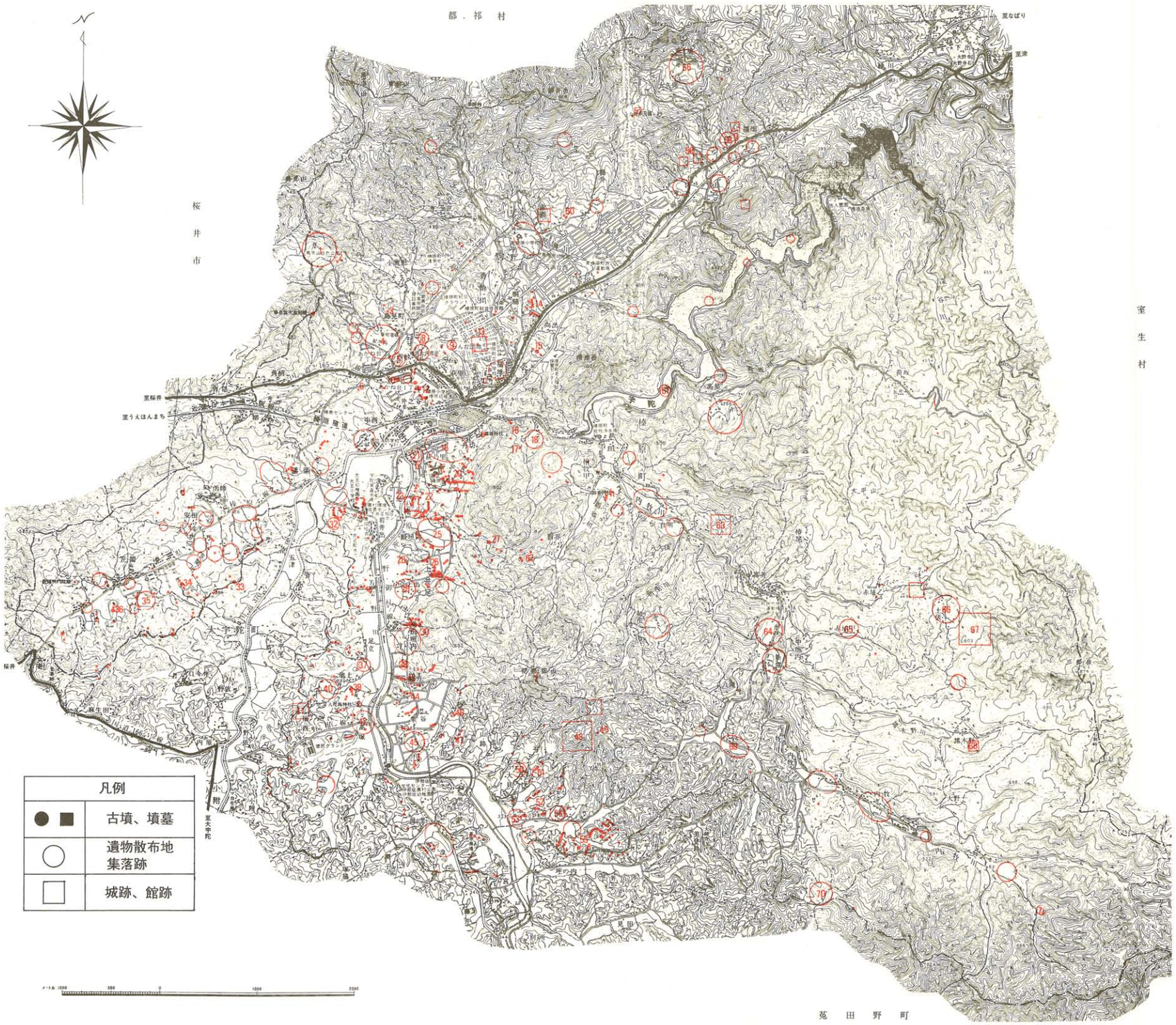

都．祁村
桜井市
室生村
菟田野町
至桜井
至うえほんまち
至なばり
至津
至大宇陀
凡例
古墳、墳墓
遺物散布地
集落跡
城跡、館跡

図２　榛原町遺跡分布図

Ⅲ　萩原西高田遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

榛原町萩原の北方において宅地造成工事が計画されたのに伴い、事業者から奈良県教育委員会に1990年７月５日付けで遺跡有無確認踏査願が提出され、この回答が「遺構が存在する平坦面を確認。発掘届を提出し、町教育委員会と協議のこと」とのことであった。その後、1990年11月20日付けで埋蔵文化財発掘届出書が提出され、関係機関等が調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は榛原町教育委員会が実施し、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いを協議することとなった。

発掘調査は事務手続きを経たのち、1991年４月15日から1991年５月10日にかけて現地調査を実施した。その後、報告書作成等の整理作業に入り、1992年３月31日に本事業を終えた。なお、遺跡名は大字名及び小字名から「萩原西高田（はぎはらにしたかだ）遺跡」とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、本村充保
調査作業員	池田圭子、高西綾子、棚田幸子、梶本弘子、半田百合子、藤村典子
調査指導	奈良県教育委員会
調査協力	三和相互株式会社、中井一夫

写真２　現地調査のひととき

（2） 現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

４月15日（月）
器材搬入。写真撮影。地形測量。掘り下げ開始。

４月16日（火）
地形測量。掘り下げ作業。

４月17日（水）
掘り下げ作業。

４月19日（金）
掘り下げ作業。土師器、陶磁器、鉄釘等出土。遺構面の一部を検出。

４月20日（土）
遺構検出作業。土坑検出、一部掘り下げ。調査範囲の拡張。

４月22日（月）
遺構検出作業。土坑検出、一部掘り下げ。調査範囲の拡張。

４月23日（火）
掘り下げ作業。遺構実測。

４月24日（水）
午前、掘り下げ作業。遺構検出作業。

４月25日（木）
遺構検出作業。

４月26日（金）
掘り下げ作業。遺構検出作業。

４月30日（火）
掘り下げ作業。遺構検出作業。遺構写真撮影。遺構実測。

５月１日（水）
遺構検出作業・掘り下げ。

５月２日（木）
土層断面図作成。遺構掘り下げ。

５月８日（水）
遺構写真撮影。遺構実測。

５月９日（木）
午後、遺構実測。調査後地形測量。

５月10日（金）
土層断面図作成。器材撤収。

2 位置と環境

調査地は、鳥見山・香酔山・額井岳などが屏風状に連なる裾野に位置する。榛原町の市街地の北方約800ｍには、標高約330～386ｍの山塊があり、ここから西方へのびる標高約366～368ｍの尾根上に今回の調査対象地となった平坦面が位置する（図３）。周辺は宅地造成工事等の開発行為によって、年々、その環境が変化しており、今後もその傾向が窺える地域である。周辺には、奥ノ芝古墳群、福地城遺跡、南山古墳、清水谷遺跡、天ノ森遺跡、キトラ遺跡、谷畑中世墓地、神木坂古墳群、谷畑古墳などの重要な遺跡が点在している（図２）。

3 遺跡の調査

（1） 現状と調査区

平坦面が位置する尾根周辺は、畑地または園芸栽培地となっており、この平坦面もかつては、畑地であったようである。平坦面は南北長35ｍ、東西幅10～16ｍを測り、その中央部はやや隆起する。調査前の状況では、墳墓の存在を示す顕著な盛土や配石・五輪塔などの外部表象は認められない（図４）。平坦面の中央部には、遺構の有無等を確認するトレンチを設定し、必要に応じて、拡張を重ねた。基本土層は、上から順に腐植土、淡茶色土、地山となっており、地表から地山検出面までの深さは約20～40㎝を測る（図６）。

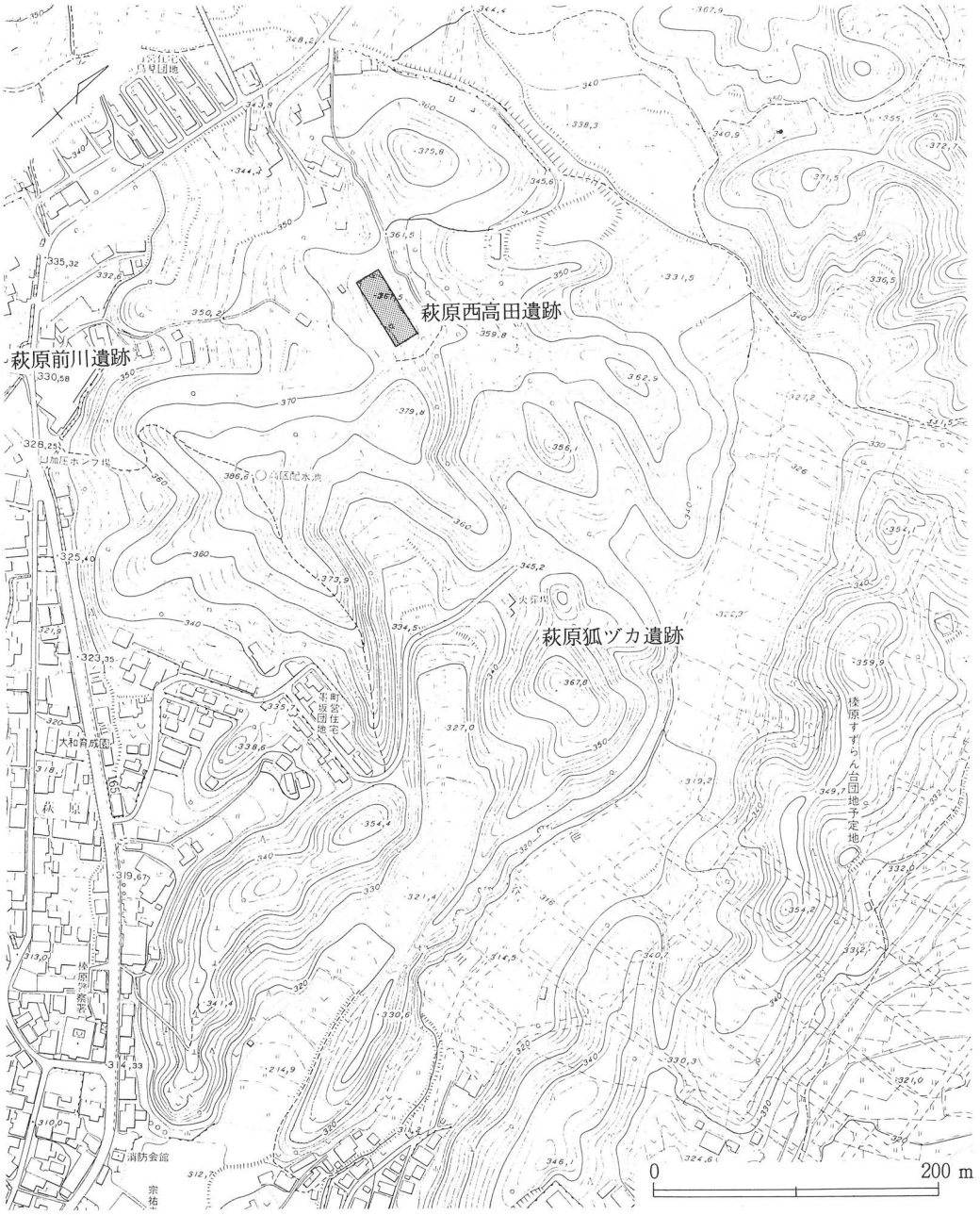


図3　萩原西高田遺跡位置図

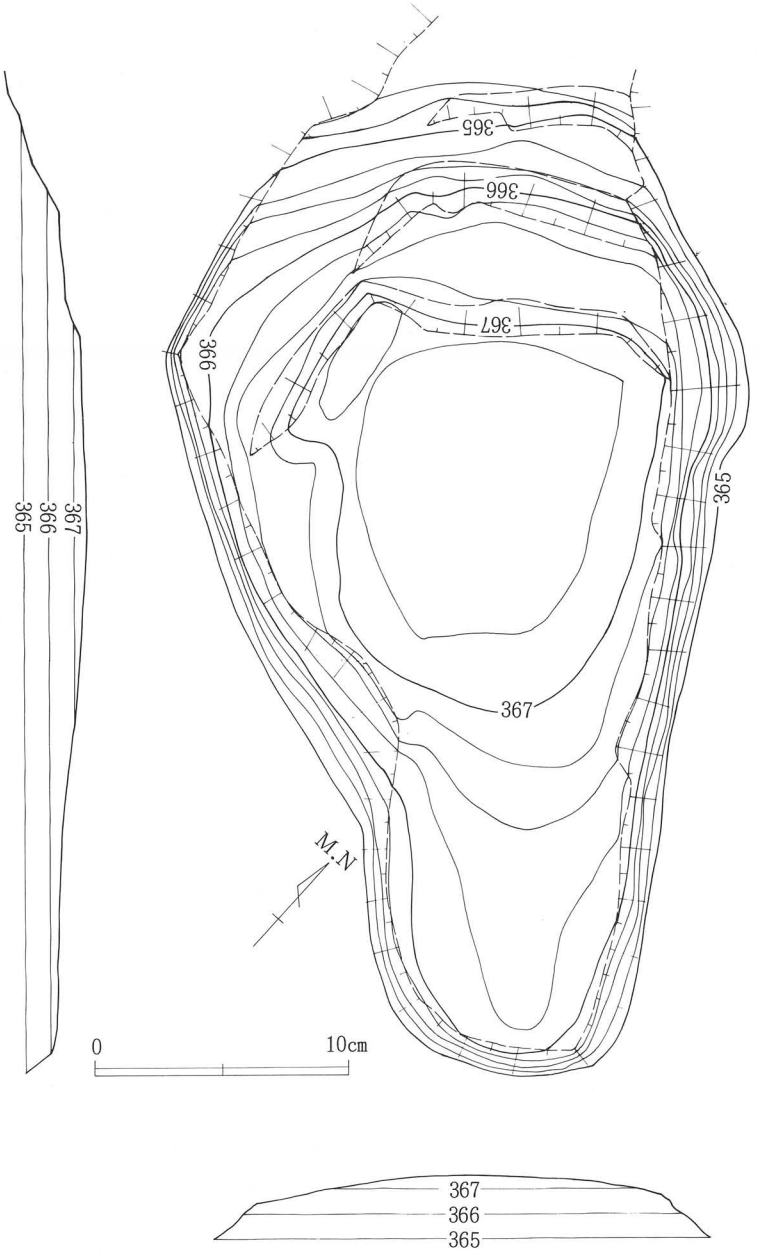


図４　萩原西高田遺跡地形測量図

（２）　検出遺構

調査地の南北両端で比較的まとまった土坑（土壙）を検出している。総数23基を数え、概ねＳＫ－01～10が北群、ＳＫ－11～23が南群となる。各遺構の規模等は表３にまとめている。これらのうち、ＳＫ－01・06・07・14・16・19・21・22が近世墓、ＳＫ－04・05・11～13・17がその可能性があるものである（図５、図７～11、表４、図版４～９）。

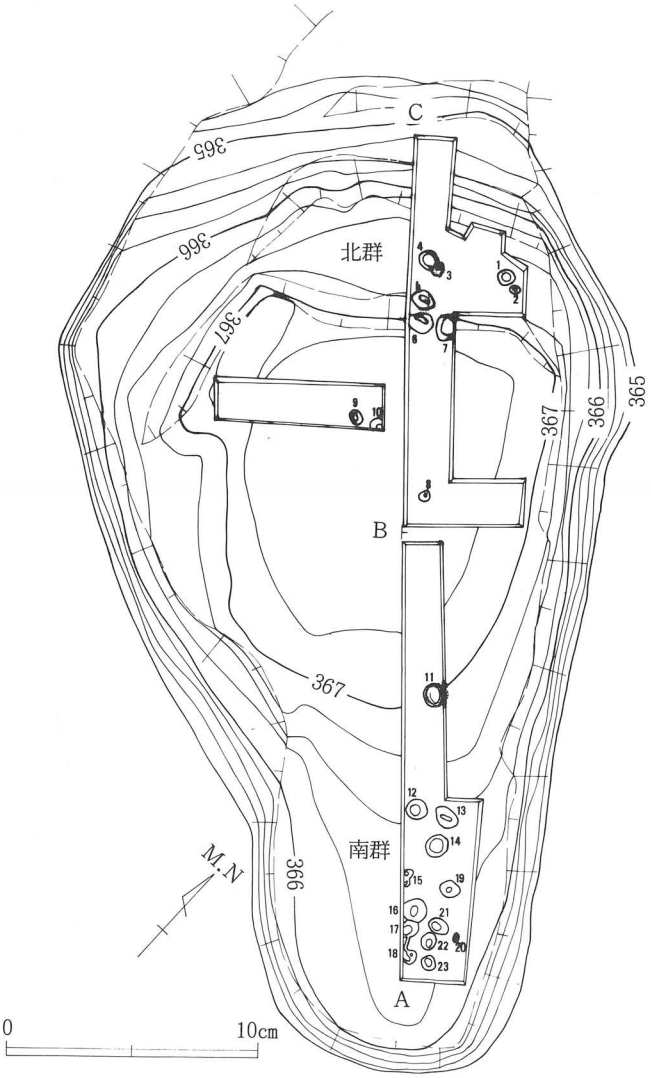


図５　萩原西高田遺跡遺構平面図（数字は遺構番号と同じ）

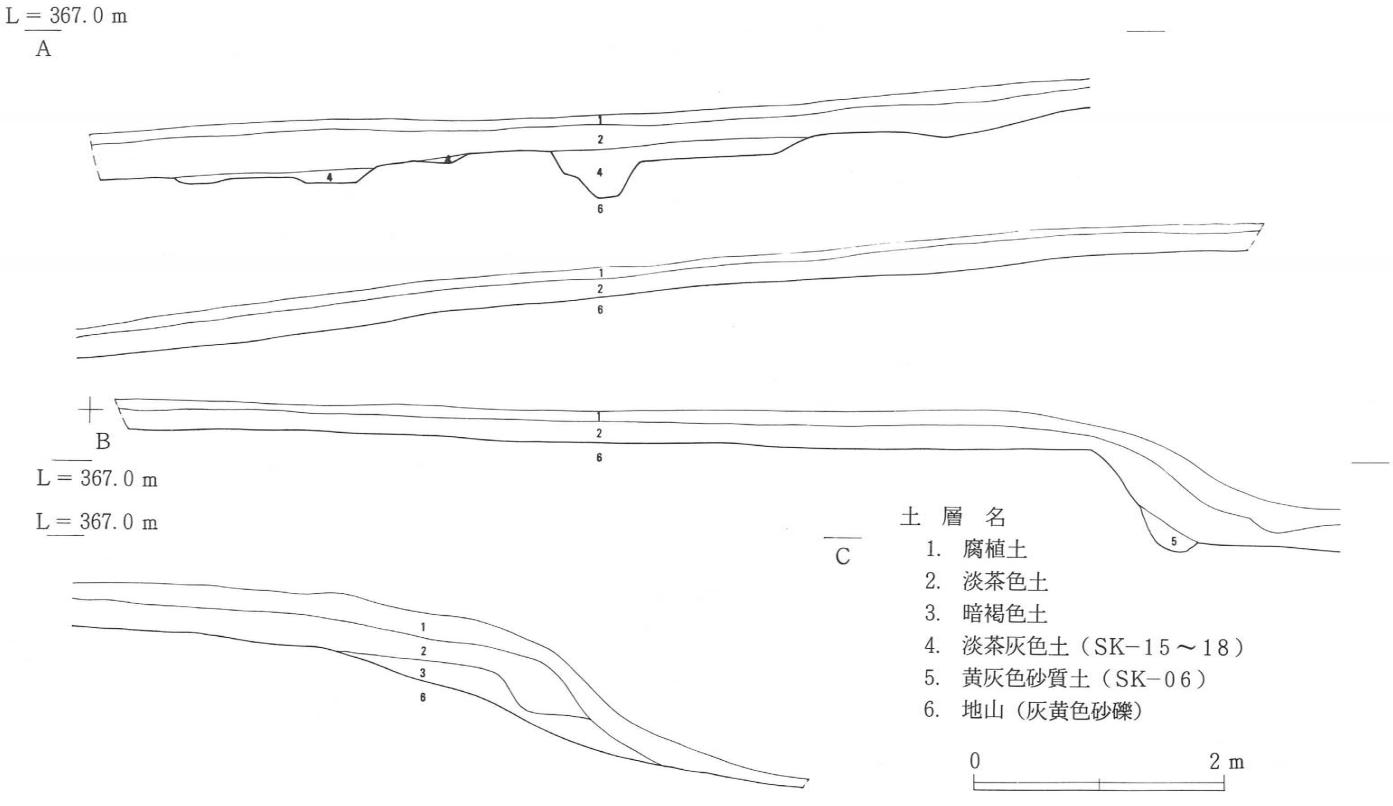


図6　萩原西高田遺跡土層断面図

表4　萩原西高田遺跡遺構一覧表

遺構名	規　模（単位 cm） 長径×短径×深さ	平面形態	出　土　遺　物	埋　　土	備　　考
ＳＫ－01	40 × 30 ×(12)	円　形	土師器（Ⅲ）、銭貨	淡茶灰色土	近世墓
ＳＫ－02	72 × 65 ×(29)	円　形		淡茶灰色土	
ＳＫ－03	55 × 53 ×(17)	円　形		淡褐色土	
ＳＫ－04	(80)× 66 ×(15)	楕円形		淡茶灰色土	近世墓？
ＳＫ－05	92 × 74 ×(13)	楕円形		灰黄色砂質土	近世墓？
ＳＫ－06	(90)× 87 ×(80)	楕円形		灰黄色砂質土	近世墓、北半削平
ＳＫ－07	104 ×(70)×(57)	楕円形		灰黄色砂質土	近世墓、北半削平
ＳＫ－08	47 × 40 ×(19)	円　形		淡茶色土	
ＳＫ－09	55 × 50 ×(8)	円　形		淡茶灰色砂質土	
ＳＫ－10	(30)×　　×(13)	円　形		淡茶灰色砂質土	
ＳＫ－11	90 × 77 ×(12)	楕円形	土師器（Ⅲ）、磁器	淡茶灰色土	近世墓？
ＳＫ－12	92 × 85 ×(19)	円　形		淡茶灰色土	近世墓？
ＳＫ－13	100 × 71 ×(22)	楕円形		淡茶灰色土	近世墓？
ＳＫ－14	89 × 84 ×(17)	円　形	土師器（Ⅲ）	淡茶灰色土	近世墓
ＳＫ－15	79 ×　　×(31)	？	土師器（Ⅲ）	淡茶灰色土	
ＳＫ－16	(95)× 93 ×(23)	円　形	土師器（Ⅲ）	淡茶灰色土	近世墓
ＳＫ－17	76 × 50 ×(10)	円　形		淡茶灰色土	近世墓？
ＳＫ－18	40 × 30 ×(16)	円　形	土師器（Ⅲ）	淡茶灰色土	
ＳＫ－19	80 × 67 ×(48)	楕円形	土師器（Ⅲ）	黄茶色土	近世墓
ＳＫ－20	55 × 38 ×(7)	楕円形		淡茶灰色土	
ＳＫ－21	88 × 65 ×(44)	楕円形	土師器（Ⅲ）、陶器、瓦質土器	淡茶灰色土	近世墓
ＳＫ－22	80 × 68 ×(13)	楕円形		淡茶灰色土	近世墓
ＳＫ－23	45 ×　　×(6)	円　形		淡茶灰色土	

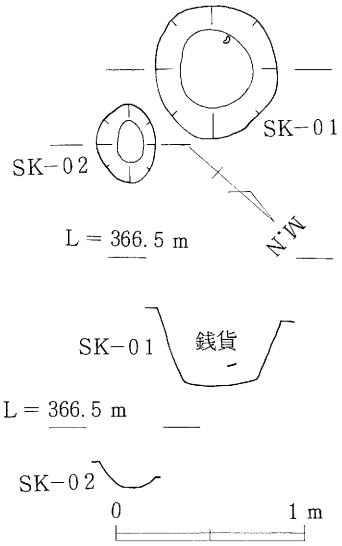


図７　萩原西高田遺跡ＳＫ－01・02実測図

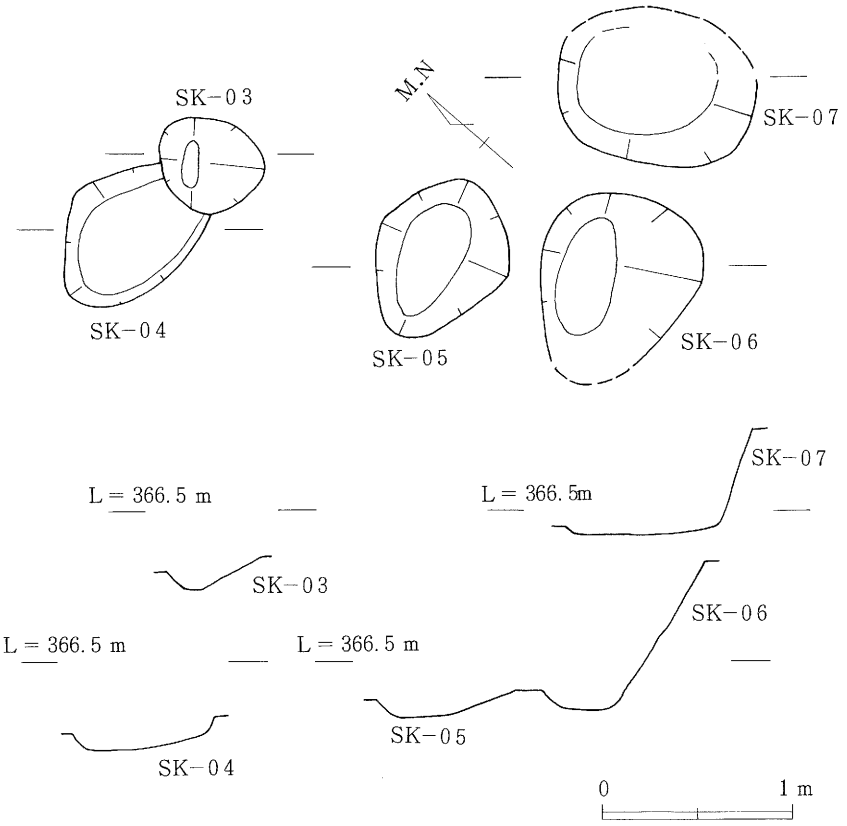


図８　萩原西高田遺跡ＳＫ－03～07実測図

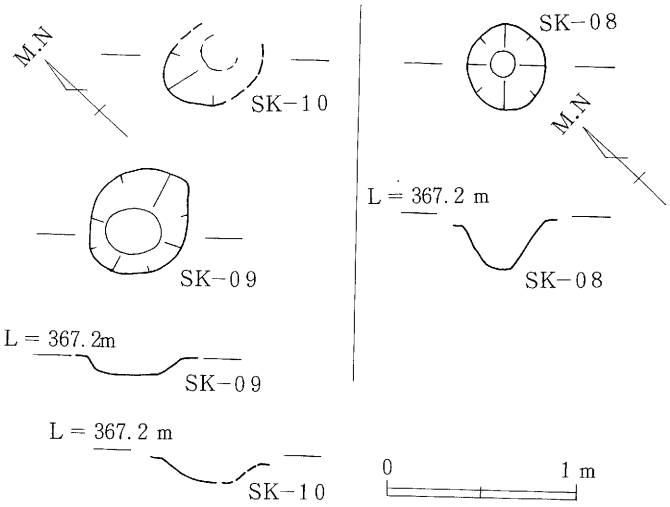


図９　萩原西高田遺跡ＳＫ－08～10実測図

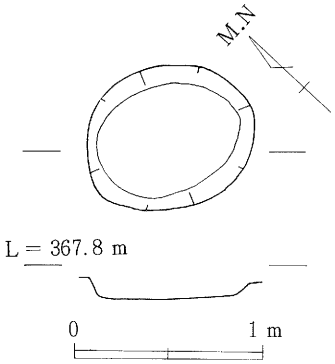


図10　萩原西高田遺跡ＳＫ－11実測図

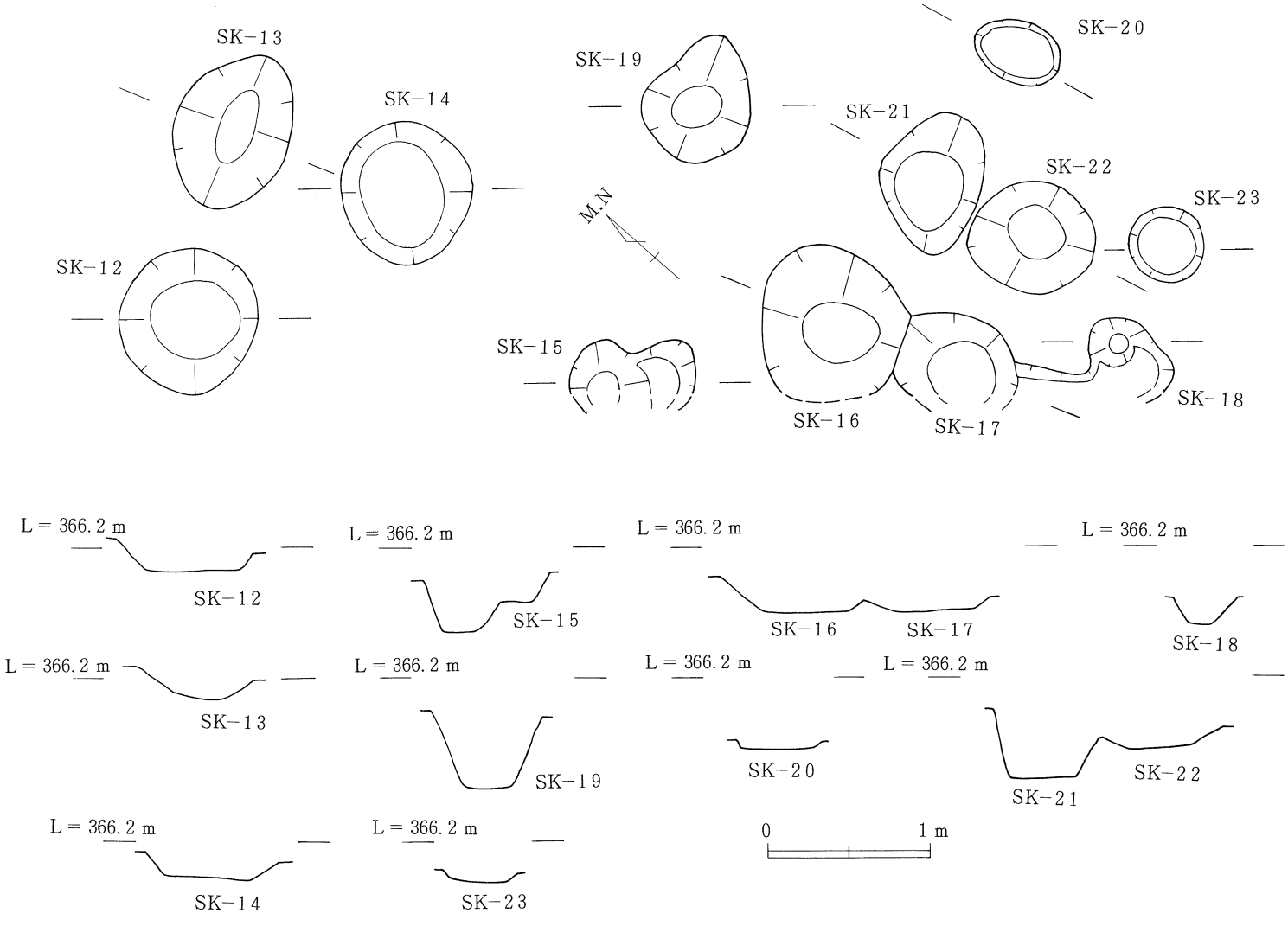


図11　萩原西高田遺跡ＳＫ－12～23実測図

（3）　出土遺物

2層からは土師器皿片、陶磁器片、銭貨（寛永通寶）などが出土している。また、8基の土坑（土壙）から土師器、陶磁器、瓦質土器、銭貨が出土しているが、ここからは鉄釘は認められない。これらの数量は、通有の整理箱1箱となる。

土　器（図12－1・2）

細片が多く、図示したのは、第2層より出土した土師器皿2点である（1）は復元口径7.7㎝、器高1.2㎝をはかる所謂ヘソ皿である。口縁部は斜め上方に立ち上がり、その端部を尖り気味に仕上げる。（2）は復元口径10.2㎝、現存高1.6㎝をはかり、口縁部はやや内湾して斜め上方に立ち上がり、端部を丸くおさめる。いずれも色調は乳白色、胎土は精良、焼成は良好である。

金属製品

鉄　釘（図13－1～5）

総数15点が調査地各所の第2層中より出土している。そのうち、その全容がほぼ明らかなのは2点にすぎない。なお、（15）は鋲の可能性がある。各遺物の詳細な数値等は表5に示している。

銭　貨（図14－1－8）

ＳＫ－01中より3点の鉄銭（1）～（3）が出土している。いずれも約1/2程度を欠損する。（4）・（5）は第2層中からの出土した鉄銭である。5点の鉄銭は錆化が著しく、種類等は明らかにできない。（1）～（3）は調査地内各所から出土した銅製の寛永通寶である。これらの法量等は表6に詳しい。

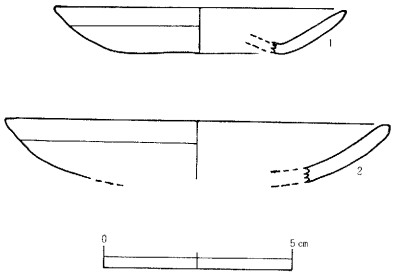


図12　萩原西高田遺跡出土土師器実測図

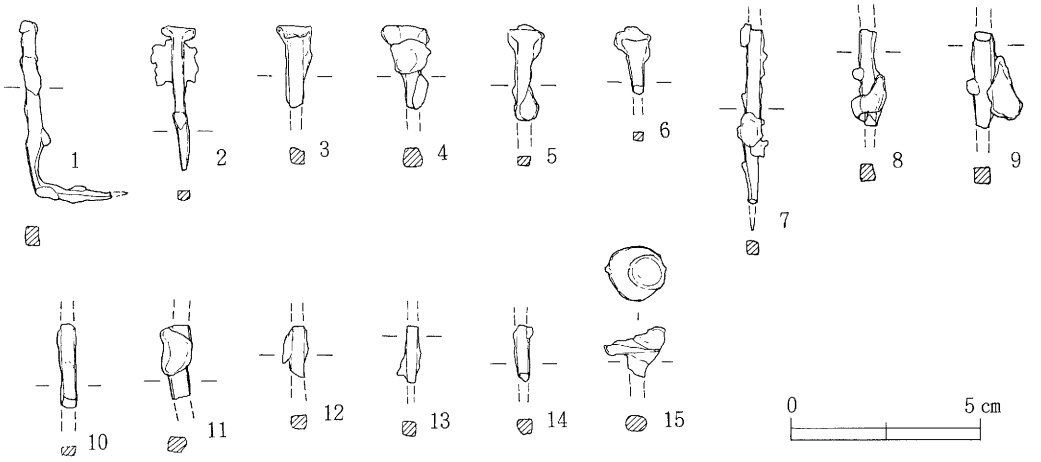


図13　萩原西高田遺跡出土鉄釘実測図

表５　萩原西高田遺跡出土鉄釘観察表

（単位：cm）

挿図番号	全長（現存長）	身　　部	頭部の形態	備　　考
13－1	(6.5)	0.5×0.4（角）	折り返し	Ｌ字形、ほぼ完形
13－2	3.8	0.2×0.3（角）	折り返し	完形
13－3	(2.2)	0.4×0.4（角）	折り返し	
13－4	(2.2)	0.5×0.5（角）	折り返し	
13－5	(2.6)	0.3×0.4（角）	折り返し	
13－6	(1.5)	0.2×0.3（角）	折り返し	
13－7	(4.6)	0.3×0.3（角）		
13－8	(2.5)	0.4×0.4（角）		
13－9	(2.2)	0.5×0.5（角）		
13－10	(12.5)	0.15×0.3（角）		
13－11	(2.0)	0.4×0.5（角）		
13－12	(1.3)	0.3×0.4（角）		
13－13	(1.6)	0.4×0.4（角）		
13－14	(1.5)	0.4×0.4（角）		
13－15	(1.2)	0.4×0.5（角）	円　　形	鋲の可能性

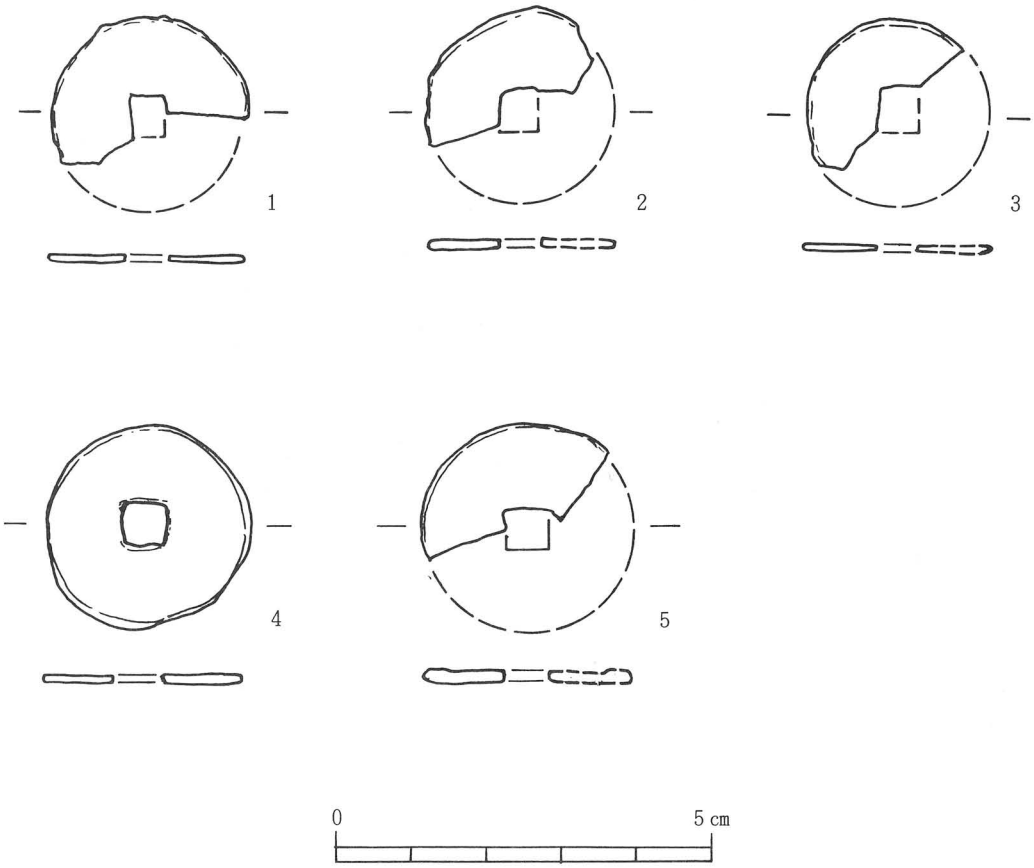


図14　萩原西高田遺跡出土銭貨実測図

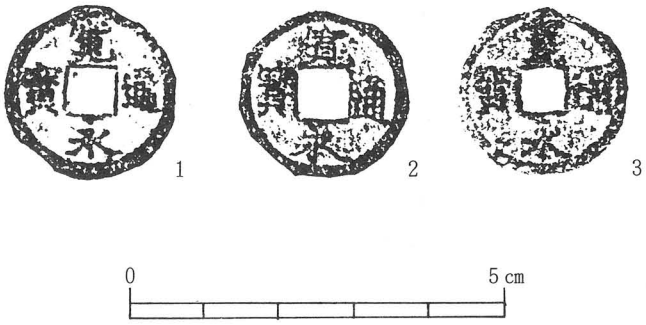


図15　萩原西高田遺跡出土銭貨拓影

表6　萩原西高田遺跡出土銭貨一覧表　（単位：cm）

挿図番号	種　類	銭　径		備　考
		外径	内径	
14－1	（不　明）	26	—	鉄銭、SK－01出土
14－2		（26）	—	
14－3		（25）	—	
14－4		27	—	鉄銭、北群第2層出土
14－5		（28）	（20）	鉄銭、南群第2層出土
14－6	寛永通寶	22.5	19	銅銭、北群第2層出土
14－7		22	19.5	銅銭、北群第2層出土
14－8		22	19.5	銅銭、北群第2層出土

4　まとめ

調査地の南北両端において、比較的まとまった土坑（土壙）を検出し、遺物の出土量と遺構の検出状況とは比例する様相を呈する。土壙上面には、配石、石造物などの外部表象等は認められず、また、内部からは、人骨・炭片・焼土等は検出されなかった。土壙規模・出土遺物等から平坦面は、近世墓群であったことが考えられる。後述の萩原狐ヅカ遺跡からも同様な遺物が出土しており、調査地周辺には、まだ、この頃の墳墓が点在していることが予想される。

5　抄　　録

遺　跡　名　萩原西高田遺跡（榛原町遺跡番号1－113）
調　査　地　奈良県宇陀郡榛原町大字萩原　元萩原1826番地
遺跡立地　標高約366～367mの尾根上
遺跡規模　南北約35m、東西：10～16m、面積：約450㎡
種別・時代　近世墓、古墳・中世～近世の遺物散布地
調　査　名　萩原西高田遺跡発掘調査事業
調査主体　榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因　宅地造成工事（事業者：三和相互株式会社）
現地調査期間　1991年4月15日～1991年5月10日
調査面積　約94㎡
検出遺構　土坑（土壙）　23基
検出遺物　土師器、陶磁器、鉄釘、銭貨　　整理箱1箱
資料等の保管　榛原町教育委員会（文化財整理室）

Ⅳ　萩原前川遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

本遺跡からは、昭和32年に弥生土器、古式土師器、土師器等が採集[註1)]され、弥生時代～古墳時代、中世の遺物散布地として奈良県遺跡地図[註2)]（遺跡番号12－D－11）、榛原町遺跡地図[註3)]（遺跡番号１－24）に登載しているところである。以前から遺跡内の多くに住宅、工場等が建設されているが、これまでに詳細な発掘調査等は実施されていない。

遺跡の南限と考えている工場跡地に鉄筋コンクリート造５階建の共同住宅が新築されることとなったため、事業者から1991年４月４日付けで埋蔵文化財発掘届出書が提出され、奈良県教育委員会、榛原町教育委員会、事業者がこの遺跡の取り扱い、調査の実施方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は榛原町教育委員会が実施することとし、重要な遺構等が発見されれば、その保存等について改めてその取り扱いを協議することとなった。

発掘調査は事務手続を経たのち、現地調査を1991年６月10日に着手し、同年６月12日に終了した。その後、報告書作成等の整理作業に入り、本事業を1992年３月30日に終了した。なお、遺跡名は大字名及び小字名をとって「萩原前川（はぎはらまえがわ）遺跡」と呼称する。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、本村充保
調査作業員	池田圭子、棚田幸子、高西綾子、中谷喜代子
調査指導	奈良県教育委員会
調査協力	松塚建設株式会社

（2）　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

６月10日（月）

器材搬入。写真撮影。重機による掘り下げ。

６月11日（火）

トレンチ内の掘り下げ・土層断面観察。

６月12日（水）

写真撮影。土層断面図・平板測量図作成。器材搬出。

2　位置と環境

調査地は、鳥見山・香酔山・額井岳などが屏風状に連なる裾野の標高約330～340m付近に位置する。周辺は宅地造成工事等の開発行為によって、その環境が著しく変化しており、旧地形の観察は困難になりつつある。遺跡は町並川を中心に形成された谷部に広がっているものの、その範囲は明確にはなっていない。現状では、南北約250m、東西約80mの範囲と考えているが、本来は東方の遺物散布地を含めた広大な遺跡の可能性が高い。周辺では南山古墳、清水谷遺跡、天ノ森遺跡、キトラ遺跡、谷畑中世墓地、神木坂古墳群、谷畑古墳などの重要な遺跡が密集している地域でもある(図2・16・22)。

3　遺跡の調査

(1)　調査区と基本土層

事業地の各所に以前の建物基礎が厚く残るため、調査場所が限定されたが、結果的には事業地のほぼ中央の南北長約16m、東西幅約12.5mのトレンチを設定することができた(図17・図版10)。

基本土層は、上から順に整地土(1層)、旧耕作土(2層)、黄灰色粘土(3層)、灰色砂礫(4層)、暗灰色粘土(5層)、淡灰色砂質土・砂礫(6層)、茶灰色粘質土(7層)となっており、現地表から掘削面までの深さは約1.8mである。2～5層は以前の水田区画整理工事に伴う土層、6層以下は未撹乱土層と考えられる(図18)。

(2)　検出遺構

調査範囲は限られたものであるが、明確な遺物は認められない。

(3)　出土遺物

2層～5層では、現代の廃棄物に混在してサヌカイト、弥生土器(壺、甕、高杯)、須恵器(甕)、中世の土師器(皿、土釜)、瓦器(椀)などが出土している。いずれも細片であり、図示したものは僅か2点である。また、第6層からも弥生土器片が出土している。

土師器皿は、復元口径10.8cm、器高1.8cmをはかり残存率は25%弱である。底部と口縁部との境界は段により明瞭となっている。口縁端部は短く、断面形態は三角形を呈する。内面および口縁部外面はナデ調整を施す。器壁は均一ではなく、本来は、かなりいびつなものであったと思われる(図19)。

サヌカイト片は、全長4.5cm、最大幅2.4cm、厚さ1.1cmを測り、断面形態は三角形となっている。2次調整が認められない剥片である(図20)。

(この項　本村充保)

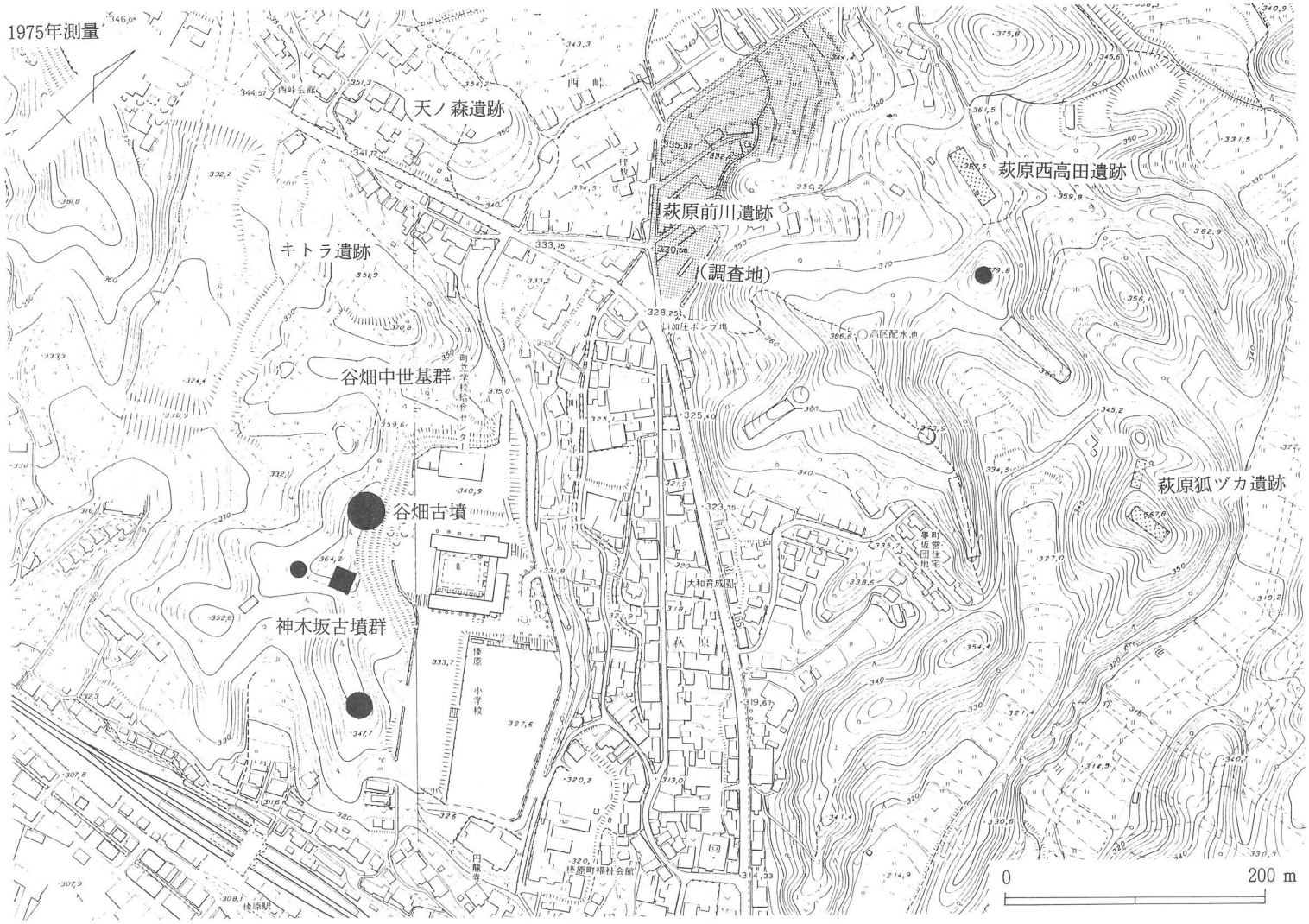


図16　萩原前川遺跡位置図

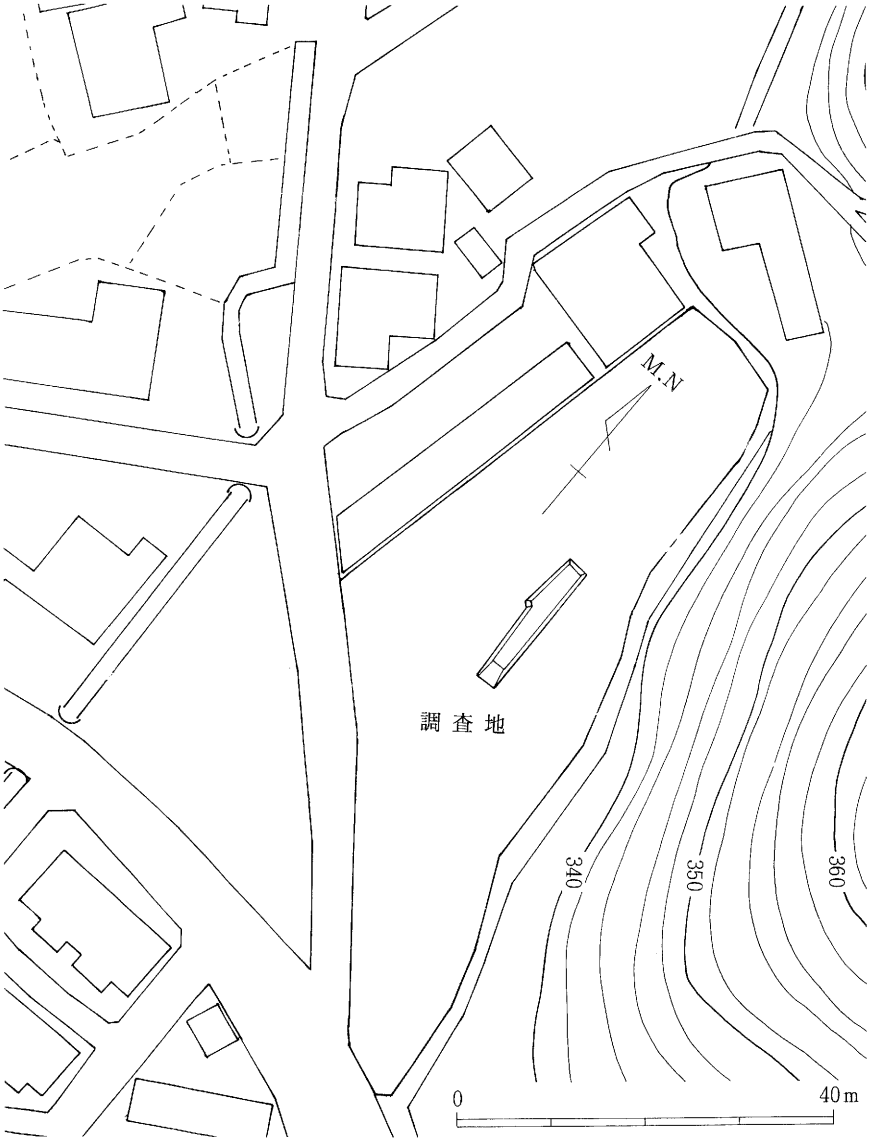


図17　萩原前川遺跡調査位置図

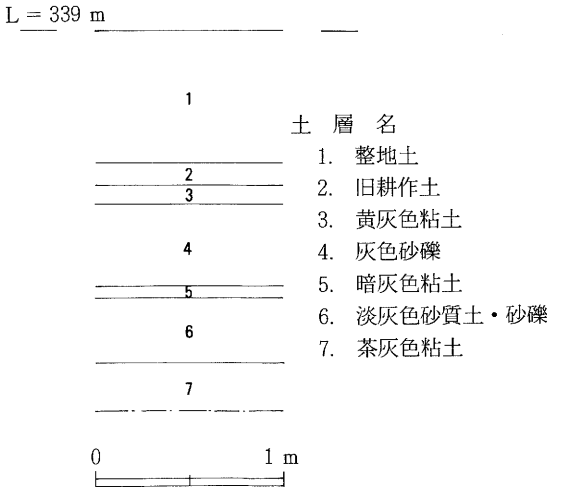


図18　萩原前川遺跡土層断面模式図

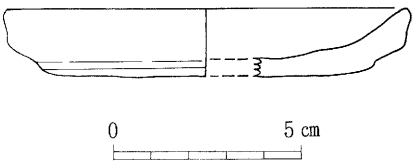


図19　萩原前川遺跡出土遺物実測図(1)

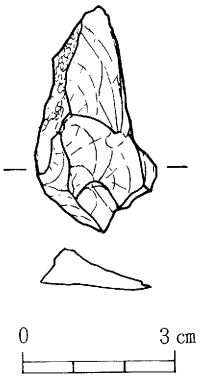


図20　萩原前川遺跡出土遺物実測図(2)

4 ま と め

再開発に伴う小規模な発掘調査ではあったが、以前の採集資料と同種の遺物も確認することができた。遺物の出土量は多くなく、また、摩滅したものが見うけられることから、これらの遺物は上流域（西方）より、もたらされたものと考えられるが、今回の出土遺物のみでは、遺跡の全体像の把握は困難である。生活域の中心を調査地の西方に推定でき、今後は周辺の遺物散布地とを総合した広域的な調査が必要と考える。

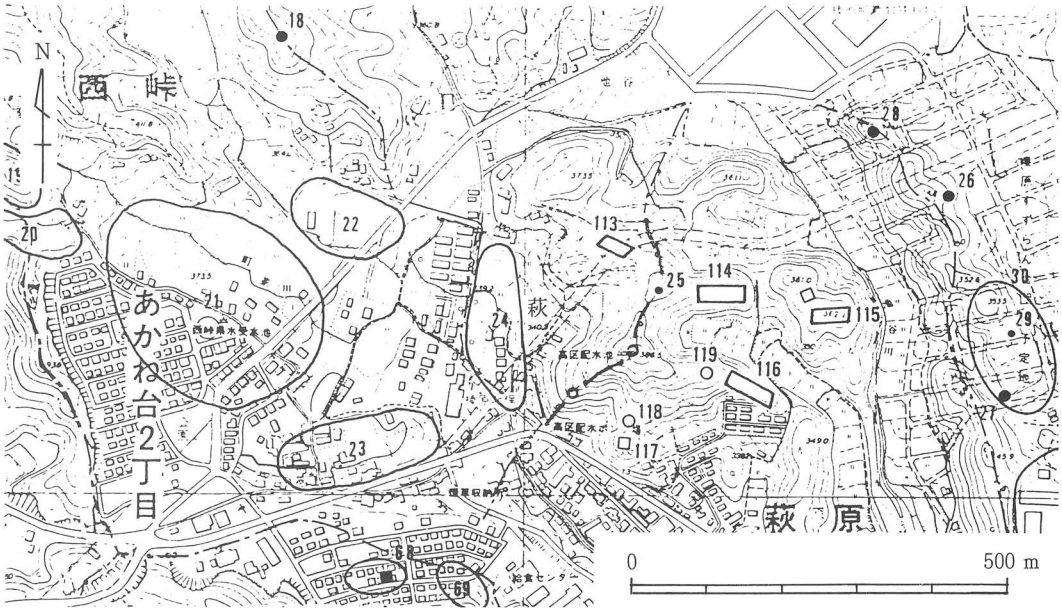


図２１　萩原前川遺跡（№24）と周辺遺跡

5　抄　　録

遺　跡　名	萩原前川（はぎはらまえがわ）遺跡（榛原町遺跡番号１－24）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字萩原　元萩原2021－１番地ほか
遺跡立地	標高約328～350ｍの谷縁辺部
遺跡規模	南北：約250ｍ、東西：約80ｍ、面積：約18000㎡
種別・時代	弥生時代～古墳時代・中世の遺物散布地
調　査　名	萩原前川遺跡発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	共同住宅新築工事（事業者：松塚建設株式会社）
現地調査期間	1991年６月10日～1991年６月12日
調査面積	約37.7㎡
検出遺構	明確な遺構なし
検出遺物	サヌカイト片、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器　　整理箱１箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註１）菅谷文則他『丹切古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊　奈良県教育委員会　1975
註２）白石太一郎他『奈良県遺跡地図』第２分冊　奈良県教育委員会　1971
註３）柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要２　榛原町教育委員会　1987

V　八滝長坂遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

本遺跡からは、中世の土師器片が採集され、中世の遺物散布地として奈良遺跡地図[註1)]（番号105－3）、榛原町遺跡地図[註2)]（番号4－23）に登載してきたところである。

遺物散布地としている谷部を中心とする地域で農地造成工事が計画され、事業者である榛原町役場（農地開拓課）から1986年5月9日付けで遺跡有無確認踏査願が提出された。遺物散布地の再確認と古墳状隆起の確認が回答されたのち、その後、一部の事業範囲が変更となり、1990年9月17日付けで埋蔵文化財発掘調査通知書が提出された。奈良県教育委員会、榛原町教育委員会、事業者が協議の結果、遺構・遺物の有無等を確認する試掘調査を実施し、その結果によっては本調査、場合によっては、その保存等について改めて協議することとなった。発掘調査は榛原町教育委員会において実施することとなり、事務手続を経たのち、現地調査を1991年6月25日から同年7月2日にかけて行った。なお、遺跡名は大字名及び垣内名をとって「八滝長坂（やだきながさか）遺跡」と呼称する。

（2）　現地調査日誌抄

1991年（平成3年）

6月25日（火）

写真撮影。重機による掘り下げ開始。

6月26日（水）

重機による掘り下げ。第1・2トレンチ精査。

6月27日（木）

第3トレンチ精査。

6月28日（水）

各トレンチ土層断面図作成。写真撮影。

7月2日（木）

各トレンチ平板測量。

写真3　作業風景(1)

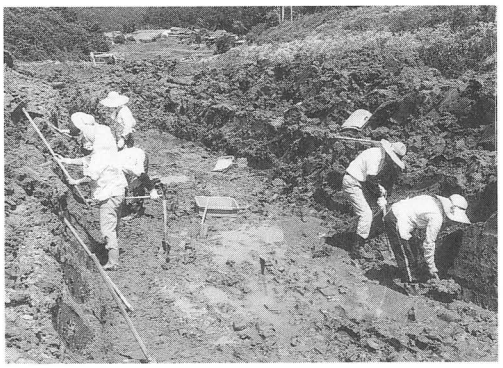


写真4　作業風景(2)

2　位置と環境

八滝長坂遺跡は、榛原町の南辺、菟田野町との境界付近に位置する。内牧川の小支流である阿曽川により形成された延長約600m、幅約70～80mの谷部のほぼ全域が遺物散布地となっており、発掘調査は、そのほぼ中央で行った。南東から北西へと延びる谷部は比較的緩やかとなっており、標高は上流部で約400m、下流部で394mを測る。散布地北方の丘陵斜面には、住宅が点在しており、八滝地区の長坂垣内を形成している。

遺跡の西方約1.3kmの山中には、壬申の乱の際、活躍した将軍の一人である文祢麻呂墓、下流（北方）約1.3kmには縄文・奈良時代・中世の集落跡である高井遺跡を確認している。遺跡の西隣には、中世の遺物散布地である八滝家ノ前遺跡が位置する（図2・22)。また、『続日本紀』には大倭國宇太郡での銅鐸の出土が記され、「波坂、長岡」などといった当時の地名から、ここ「長坂」をあてる説[註3)]もある。

3　遺跡の調査

（1）　調査区と基本土層

谷地形のほぼ中央に3箇所のトレンチを設定した。湧水が著しく、その掘り下げ作業が必ずしも十分とはいえない。阿曽川右岸（北方）の下流側から第1トレンチ、第2トレンチ、反対の左岸（南方）を第3トレンチとしている（図23)。

第1・2トレンチの基本土層は、上から順に耕作土（1層)、淡灰色粘土（2層)、灰色粘土（3層)、暗灰色粘土（4層）となっている。耕作面から掘削面までの深さは約1.2mである。第3トレンチの基本土層は、地点によって若干の相違があるものの、トレンチ南端より北へ14mの地点では、耕作土（1層)、灰茶色粘質土（2層)、灰色粘土（3層)、黄灰色粘質土（4層)、青灰色粘土（5層）となっている（図24)。

（2）　検出遺構

調査範囲は限られたものであるが、明確な遺物は認められない。ただ、第3トレンチでは、谷部の南岸を確認している。

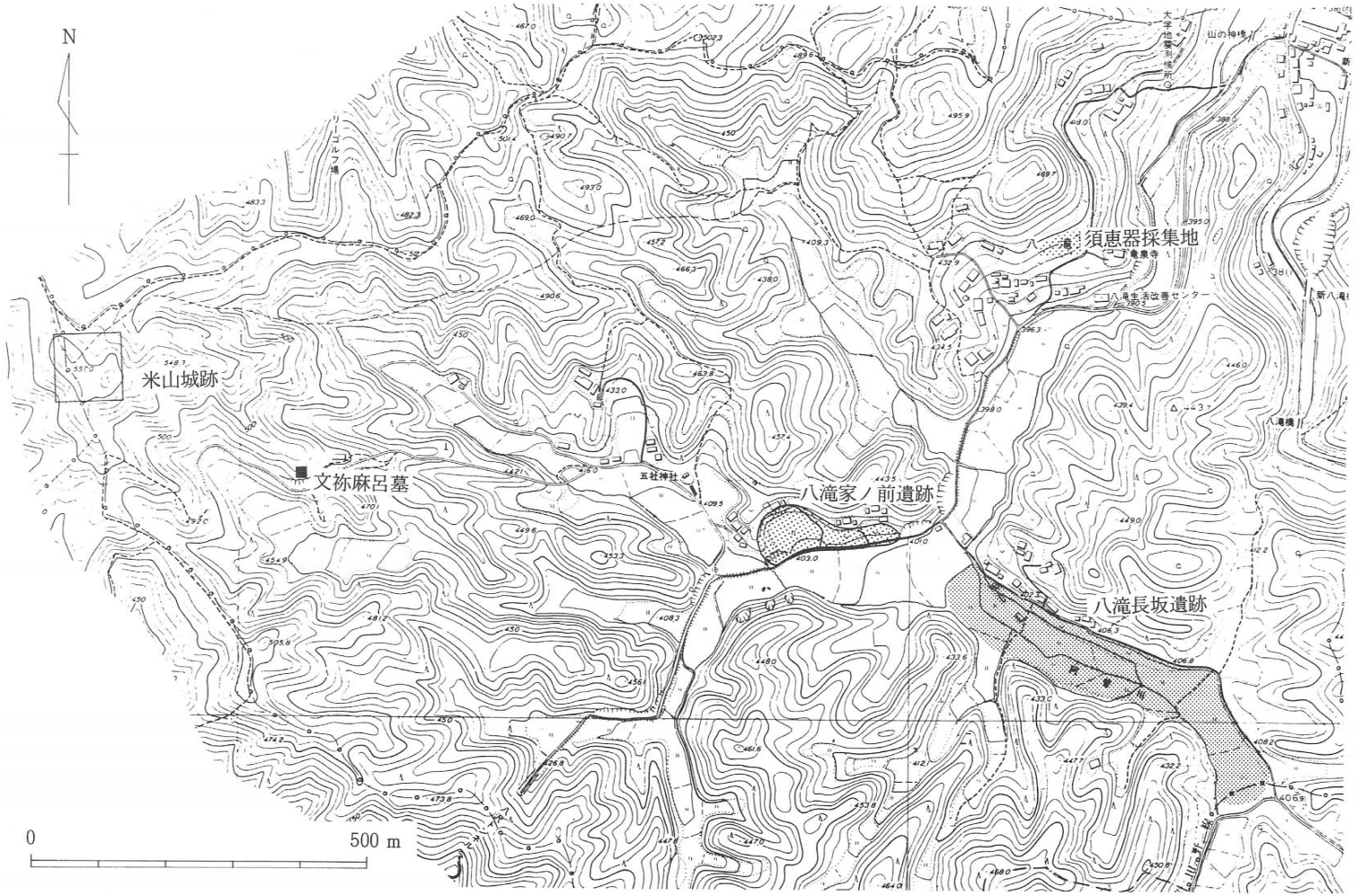


図22　八滝長坂遺跡位置図

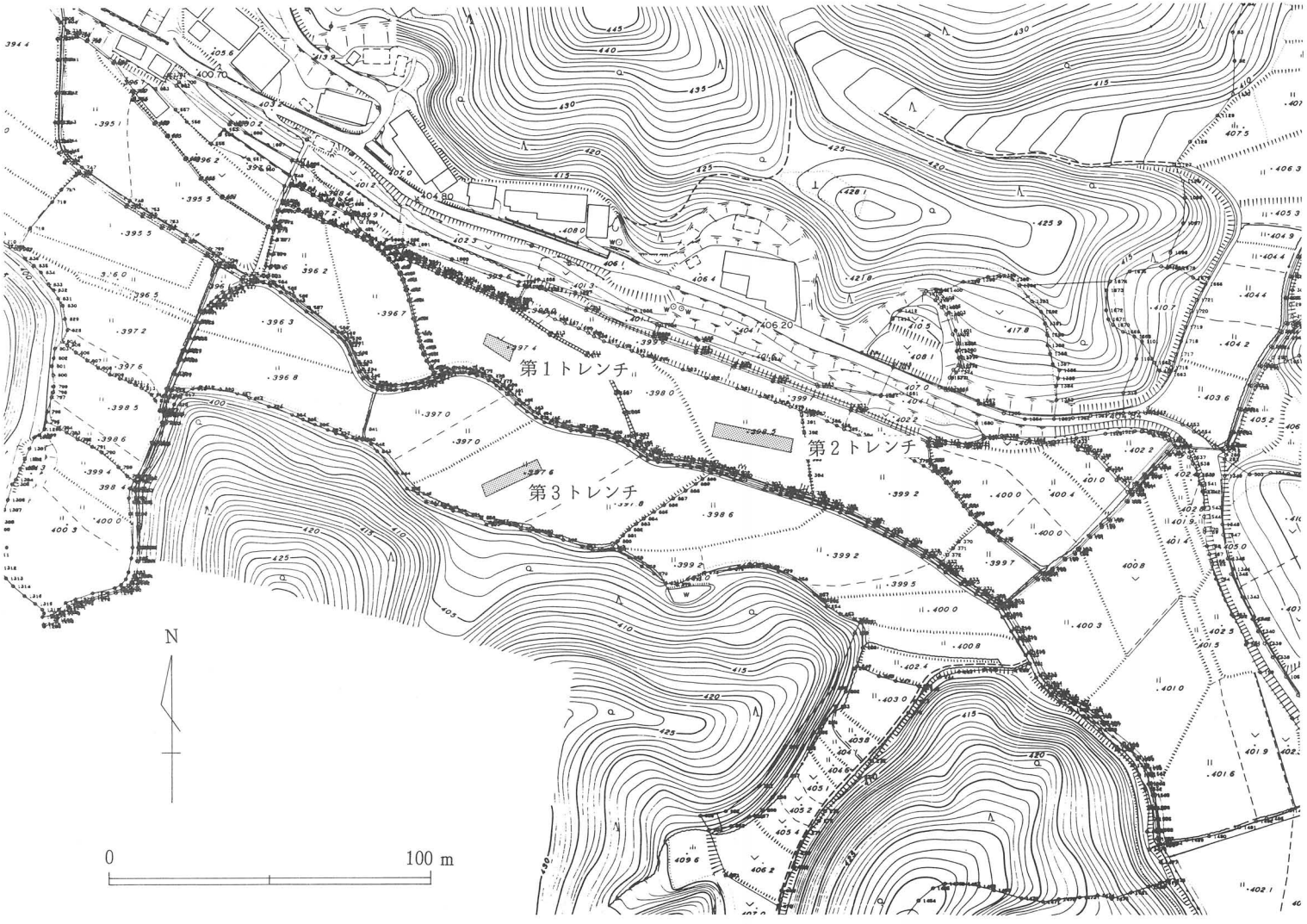


図23　八滝長坂遺跡調査位置図

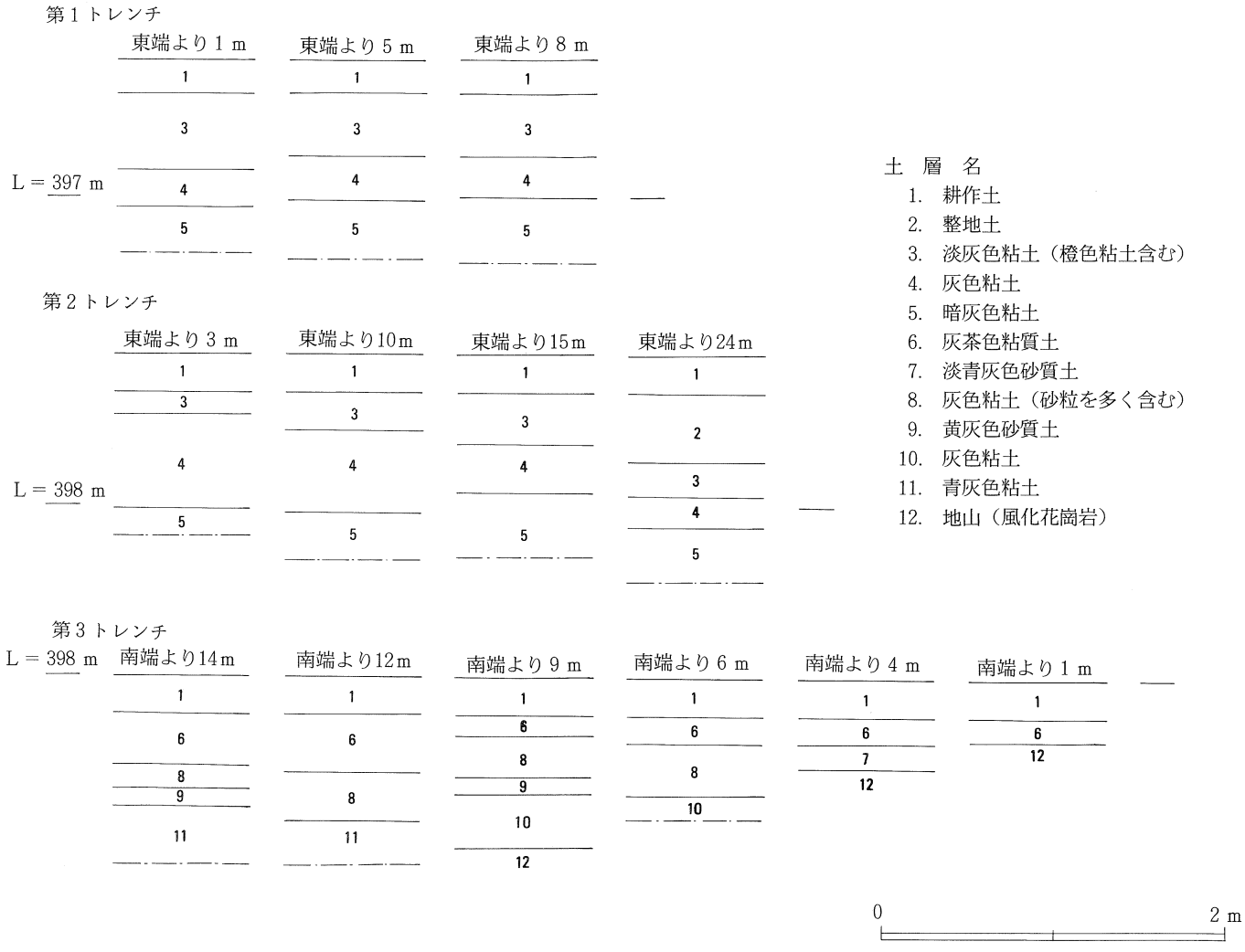


図24　八滝長坂遺跡土層断面模式図

（3）　出土遺物

第1・2トレンチの3層～4層で弥生土器（甕）、須恵器（杯身、杯蓋、甕）、土師器（皿、鉢）、瓦器（椀）、瓦質土器（甕）の各破片が数十点出土している。これらのうち、須恵器片がやや多く認められる。いずれも各遺物の全体像を把握できそうなものはないが、ここでは、2点の須恵器片を図示している。

須恵器　甕（図25）

(1)・(2)とも体部片で、全容を明確に把握するまでには至らない。(1)の外面は格子叩き目文、内面には同心円文または円弧文が認められ、いずれも半スリケシ調整が施されている。(2)の外面は平行叩き目文、内面は半スリケシ調整が施された同心円文が認められる。いずれも胎土は精良、焼成は堅緻、色調は灰白色ないし灰色を呈する。第2トレンチからの出土である。

（この項　本村充保）

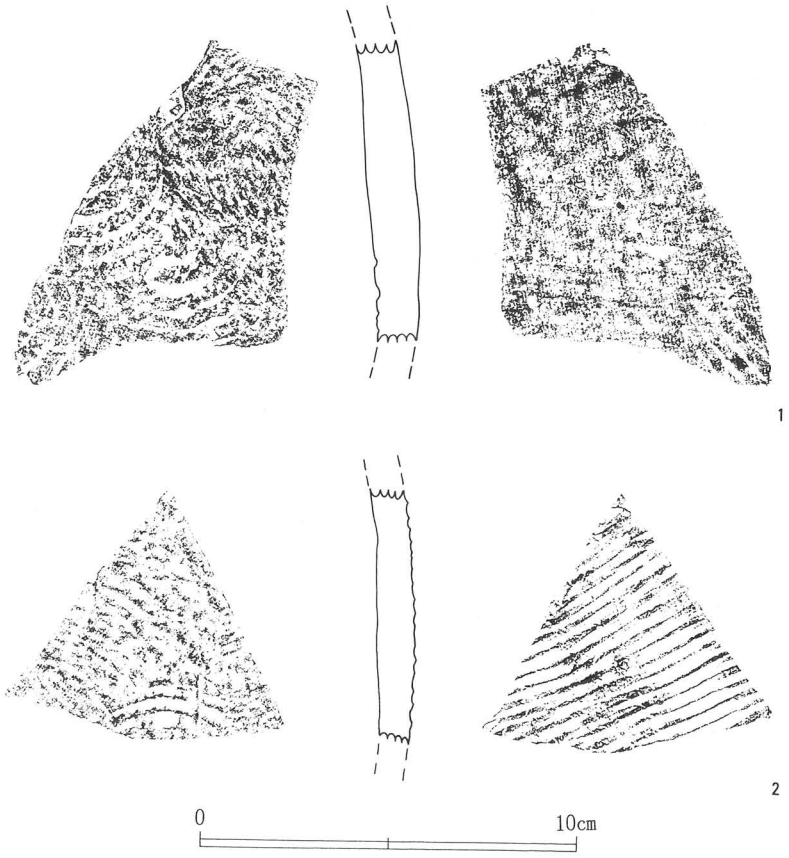


図25　八滝長坂遺跡出土遺物実測図

（4）　採集遺物

1991年12月16日、事業地東端の水田において榛原町天満台東一丁目在住の土口　啓氏が須恵器、土師器、自然木等を若干、採集された。谷部埋没土の暗青灰色粘土等からの出土と考えられる。これら採集遺物のうち、６点を図示し、当遺跡の参考遺物として概要を報告しておく。なお、採集遺物は土口氏のご厚意により、榛原町教育委員会において保管している。

須恵器　杯身（図26―１）

法量は復元口径11cm、復元受部径12.8cm、たちあがり高1.6cm、器高５cmとなっている。たちあがりは内傾し、口縁端部は丸い。受部は短く、断面形態は三角形を呈する。底部外面は回転ヘラ削りののち回転ナデ調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。

古式土師器　鉢（図26―２）

法量は復元口径13.8cm、残存高4.3cmである。底部は丸く、口縁部やや外方にのびる。口縁端部はやや尖り気味である。外面はヘラ削り調整、その他は内外面とも横方向のナデを施す。

古式土師器　高杯（図26―３・４）

(3)は杯部の破片で復元口径17.8cmである。杯部は外反し、口縁端部は丸い。内面には放射状のヘラ磨きが認められる。(4)は脚部の破片で残存高6.9cmである。内面はケズリ、その他はナデを施している。杯部と脚部とは充填法によっている。

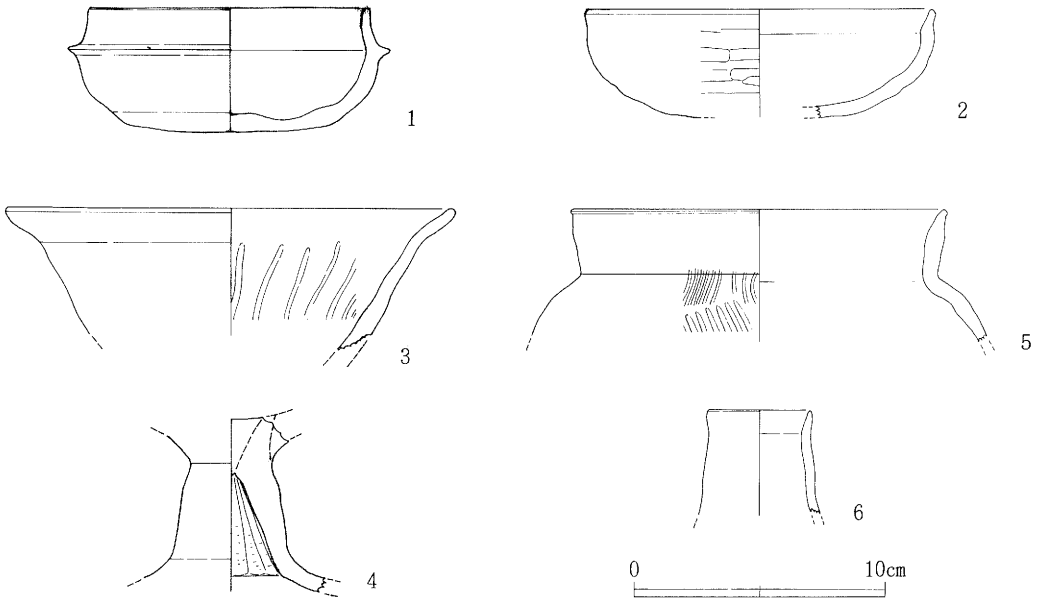


図26　八滝長坂遺跡採集遺物実測図

古式土師器　甕（図26―５）

復元口径15cmである。口縁部は外上方に直線的にのび、口縁端部は尖り気味である。体部には縦方向の叩き目、その他は内外面とも横ナデを施す。

製塩土器（図29―６）

復元口径４cm、残存高4.1cmをはかり、器壁は約0.2cmと薄い。体部は残存部分での径が4.8cmとなり、口径を上回る。内外面ともナデ、押さえが認められる。

4　ま　と　め

比高差が比較的少ない地域でのほ場整備という性格上、掘削等の開発行為が地中深くにまで及ばないため、発掘調査は一部にとどめている。遺物の出土量は多くないが、内牧川流域では数少ない古式土師器、須恵器の出土をみたことは、この地域の開発の歴史を知る上において非常に貴重なものである。なお、採集遺物は３世紀後葉から５世紀中葉にかけてのものであり、本遺跡の継続時期の一端が明らかにできる。この流域では縄文時代、奈良時代、中世の各遺跡を確認しているものの、弥生時代や古墳時代の遺跡は未確認に等しく、その類例増加が望まれていたところである。周辺遺跡の分布および地形から本遺跡は、内牧川本流域よりも現在の菟田野町域からの影響のもとに開発が開始された可能性が高い。遺物散布地としている水田部分は、古くから阿曽川の氾濫原・谷地形であり、明確な遺構は認められなかった。本来の居住域は丘陵部分や上流域に求めることができよう。

5　抄　　録

遺　跡　名	八滝長坂（やだきながさか）遺跡（榛原町遺跡番号４－23）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字八滝1101、1104、1148番地
遺跡立地	標高約400～394ｍの谷部
遺跡規模	南北：約70ｍ、東西：約600ｍ、面積：約40000㎡
種別・時代	古墳時代・中世の遺物散布地
調　査　名	八滝長坂遺跡発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	農地造成工事（事業者：榛原町役場農地開拓課）
現地調査期間	1991年６月25日～1991年７月２日
調査面積	約212㎡
検出遺構	明確な遺構なし
検出遺物	弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器　　整理箱１箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註１）白石太一郎他『奈良県遺跡地図』第２分冊　奈良県教育委員会　1971
註２）柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要２　榛原町教育委員会　1987
註３）『榛原町史』　榛原町役場　1959

Ⅵ　萩原狐ヅカ遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

本遺跡は、1987年の踏査によって確認したもので、現在は、榛原町遺跡番号１－115として登載(註)している２箇所の平坦面からなる。踏査では、明確な遺構・遺物等を確認していなかったものの、城館跡または中世墓地等の可能性を考えていた遺跡である。

平坦面を含む一帯の尾根の宅地造成工事計画に伴い、1991年３月７日付けで、事業者から埋蔵文化財発掘届出書が提出され、その後、奈良県教育委員会、榛原町教育委員会、事業者が発掘調査の方法等について協議を行った。この結果、発掘調査は榛原町教育委員会において実施することとなり、重要な遺構等が発見された場合、改めて、その保存方法等について協議することとなった。

事務手続きを経たのち、現地調査は1991年７月30日に着手し、同年８月23日に終了した。その後、遺物整理・報告書刊行等の整理作業を行い、1992年３月31日に事業を終えた。なお、遺跡名は大字名と小字名を用いて「萩原(はぎはら)狐(きつね)ヅカ遺跡」とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、山本美恵子、本村充保、梶本剛司
調査作業員	池田圭子、棚田幸子、中谷喜代子、柳沢雅子
調査指導	奈良県教育委員会
調査協力	三晃住宅株式会社、サンハウジング株式会社

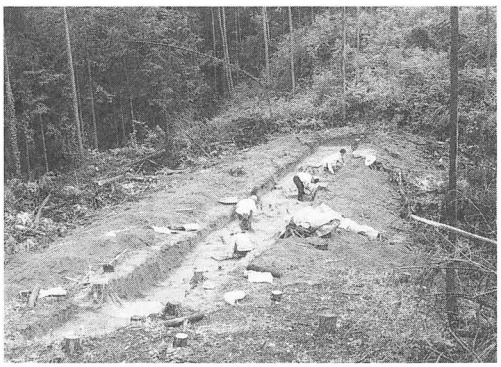


写真５　作業風景

（2）　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

７月29日（月）～７月31日（水）
　器材搬入、作業道設営、Ａ区倒木整理

８月１日（木）～８月３日（土）
　測量杭設置、地形測量

８月５日（月）
　Ａ区写真撮影、Ｂ区倒木整理

８月６日（火）
　Ｂ区倒木整理

８月７日（水）
　Ａ区掘り下げ開始、Ｂ区測量杭設置

８月８日（木）
　Ａ区掘り下げ、Ｂ区形測量

８月９日（金）
　Ａ区精査・土層断面図作成、Ｂ区掘り下げ

８月10日（土）
　Ｂ区第２～３層掘り下げ・精査

８月12日（月）
　Ｂ区写真撮影

８月13日（月）
　Ｂ区精査

８月19日（火）
　Ｂ区土層断面図作成

８月22日（木）
　Ａ区精査・写真撮影

８月23日（金）
　Ｂ区精査、器材撤収

2　位置と環境

調査地は、鳥見山・香酔山・額井岳などが屏風状に連なる裾野に位置する。周辺は宅地造成工事等の開発行為によって、年々、その環境が変化している地域でもある。尾根頂部に位置する平坦面は、標高約366～368ｍ、その規模は長さ約33ｍ、幅約７ｍを測る。また、尾根鞍部の平坦面は標高約360～362ｍ、規模は長さ約25ｍ、幅約７ｍを測る。平坦面の周辺には、奥ノ芝古墳群、福地城遺跡、南山古墳、清水谷遺跡、天ノ森遺跡、キトラ遺跡、谷畑中世墓地、神木坂古墳群、谷畑古墳などの重要な遺跡が点在している（図２・27・28）。

奥ノ芝古墳群は、調査地の東隣に位置するが、磚積石室として知られる県史跡の奥ノ芝１・２号墳のうち、１号墳は「宅地造成工事の邪魔」として破壊されている。残念ながら、現在は、「復元石室」で往時を偲ぶほかない。

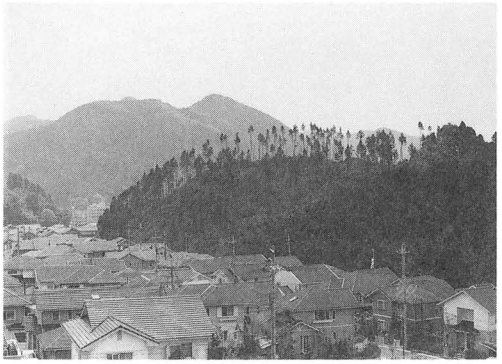


写真６　萩原狐ヅカ遺跡遠景

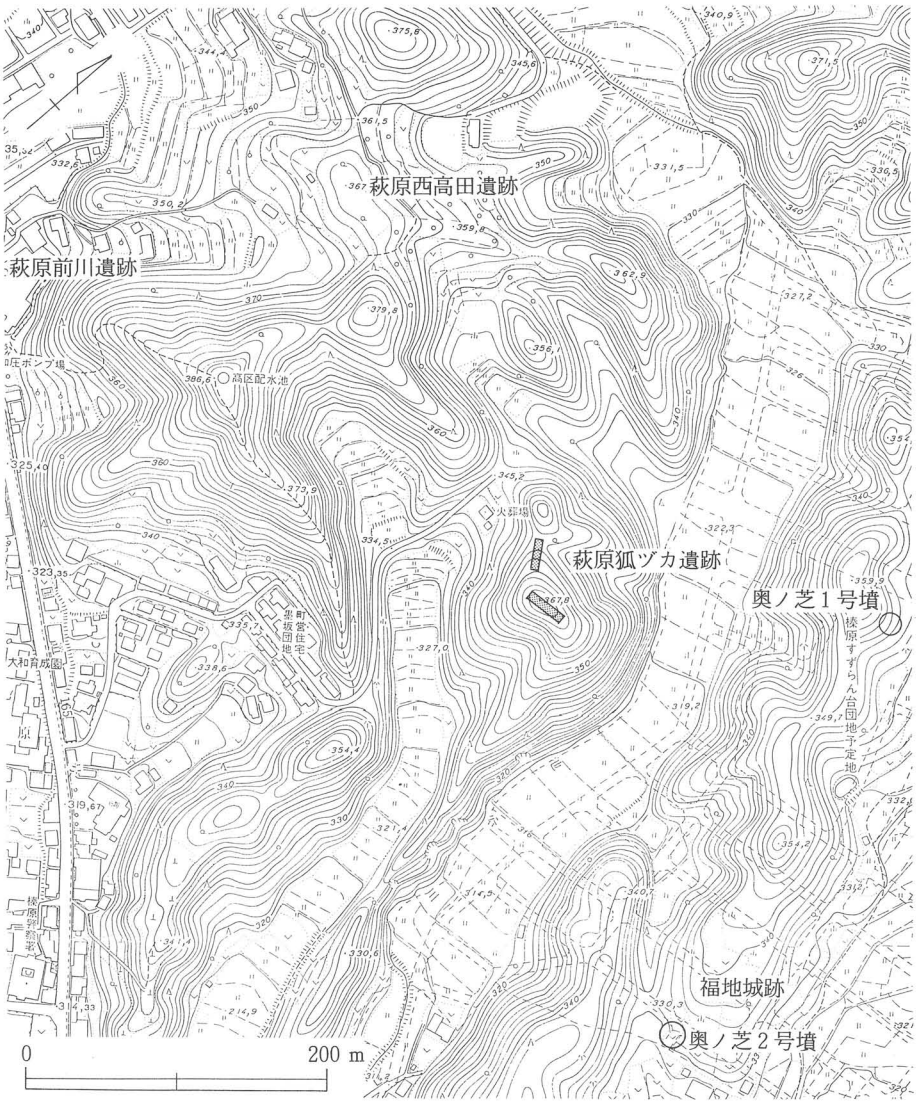


図27　萩原狐ヅカ遺跡位置図

3　遺跡の調査

（1）　調査区・遺構

尾根頂部をＡ区、尾根鞍部をＢ区として各尾根の中央部に必要に応じてトレンチを設定した（図28・29、図版15）。

Ａ区は、腐植土および橙茶色粘質土の表土を取り除くとすぐに地山が現われ、表土中から若干の土師器片が出土しているものの、明確な遺構は認められない。

Ｂ区の腐植土下は、畑地の旧耕作土となっており、この層中から現代の陶磁器片や金属片と混在して近世の土師器片、鉄釘、銭貨（寛永通寶）などが出土している。旧耕作土下は風化花崗岩類の地山面となっているが、明確な遺構は認められない。

（2）　出土遺物

調査区内（Ｂ区）からの出土遺物は、先述のとおり土師器、鉄釘、銭貨などであり、その数量は、通有の整理箱１箱である。土師器は皿が大半を占めるが、細片のため図化しえない。

金属製品

鉄　釘（図30－１～13）

総数13点がＢ区の第２層中より出土している。頭部の形態が明らかなものは（１）、（３）、（４）の３点で、いずれも折り込みによっている。詳細な数値等は表７に示す。

銭　貨（図31－１、２）

（１）は約1/3の鉄銭片で、その直径を2.1cmに復元できる。錆化が著しく、種類等の詳細は明らかにできない。（２）は銅銭片で、寛永通寶の「寶」のみの破片で、背には文字は認められない。

表７　萩原狐ヅカ遺跡出土鉄釘観察表

挿図番号	全長（現存長）	身　　部	頭部の形態	備　　考
30－１	(5.5)	0.6×0.7（角）	折り返し	
30－２	(4.7)	0.7×0.5（角）		
30－３	4.1	0.4×0.4（角）	折り返し	完形
30－４	(2.7)	0.4×0.4（角）	折り返し	ほぼ完形
30－５	(3.4)	0.2×0.3（角）		
30－６	(3.6)	0.3×0.4（角）		
30－７	(2.6)	0.4×0.4（角）		
30－８	(3.2)	0.4×0.5（角）		
30－９	(2.9)	0.4×0.5（角）		
30－10	(2.1)	0.4×0.5（角）		
30－11	(2.4)	0.4×0.5（角）		
30－12	(1.5)	0.3×0.4（角）		
30－13	(1.7)	0.5×0.5（丸）		

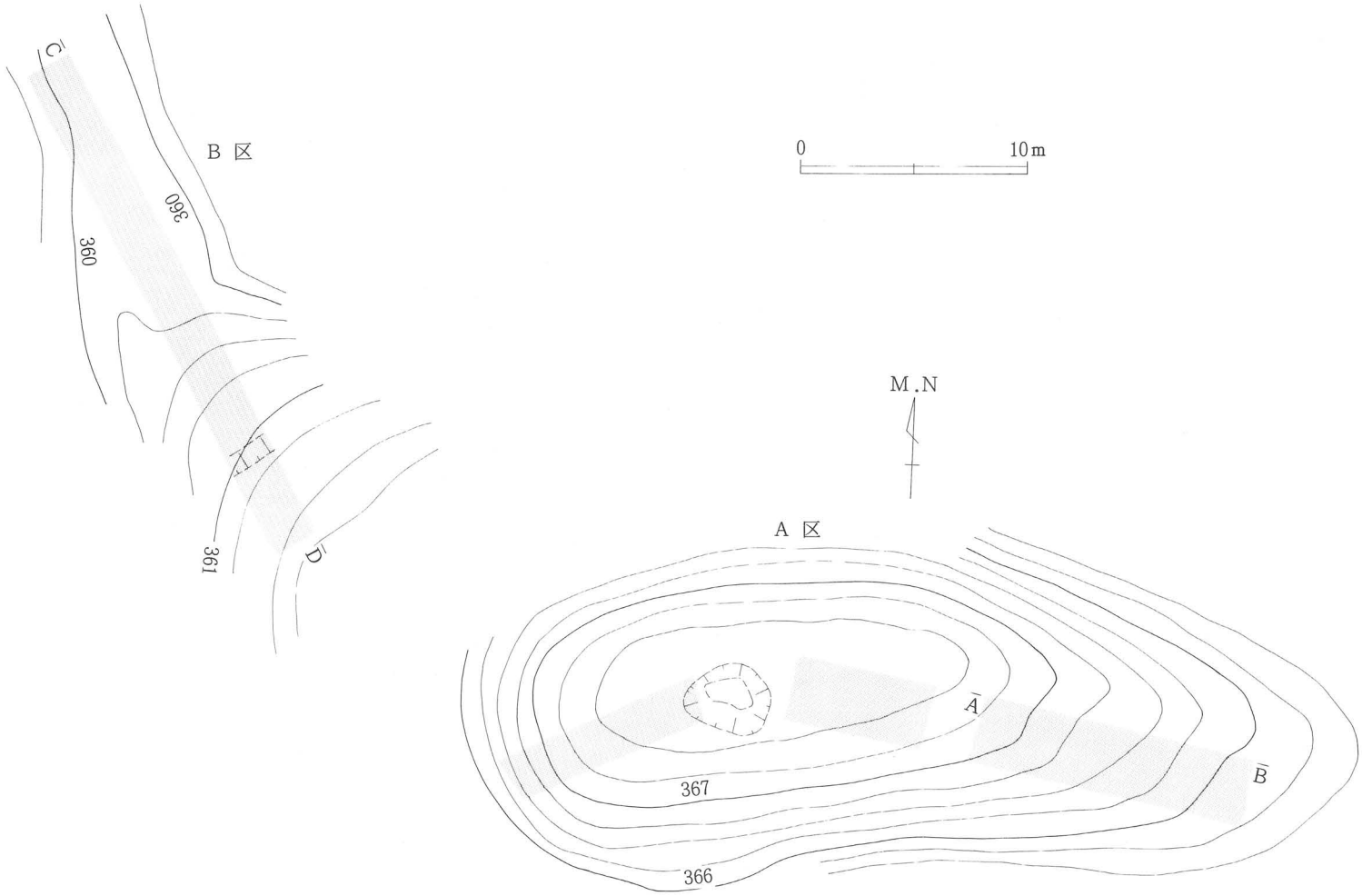
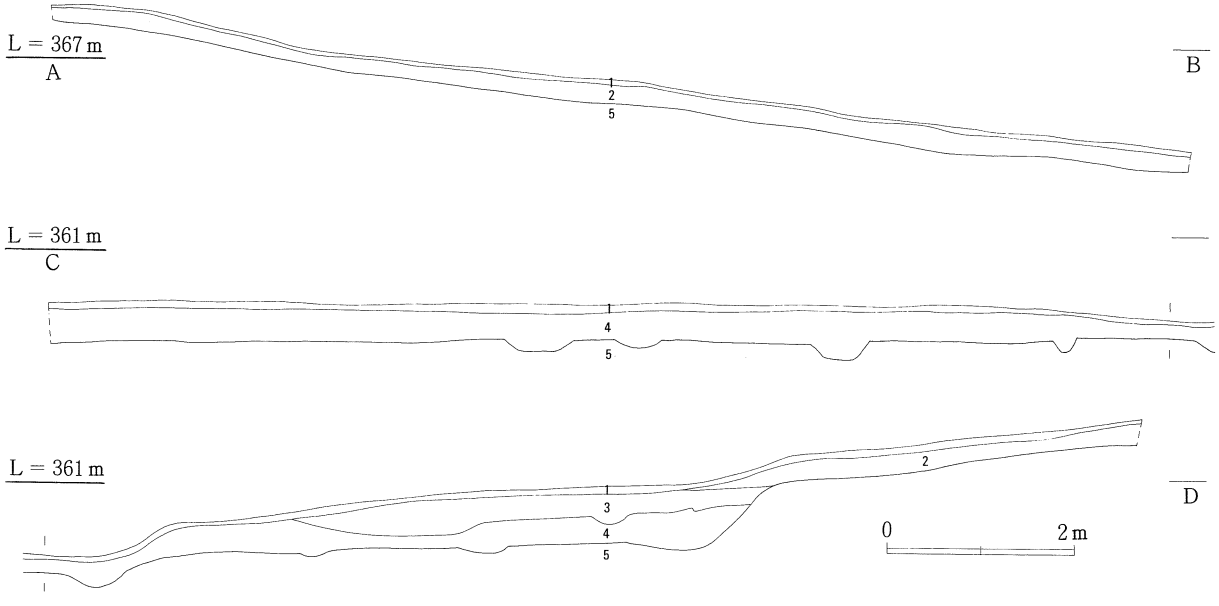


図28　萩原狐ヅカ遺跡地形測量図



土層名
1　腐　　植　　土
2　淡黄茶色砂質土
3　淡　褐　色　土（炭片含む）
4　黄　茶　色　土
5　地　　山（風化花崗岩類）

図29　萩原狐ヅカ遺跡土層断面図

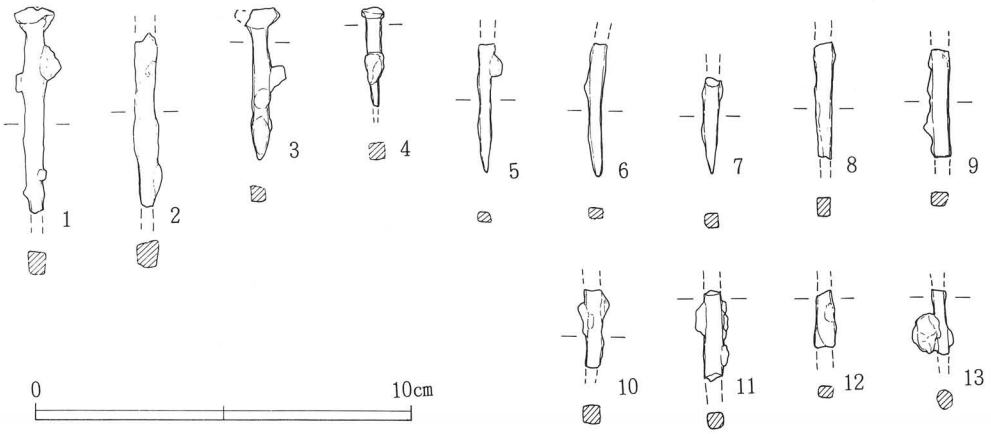


図30　萩原狐ヅカ遺跡出土鉄釘実測図

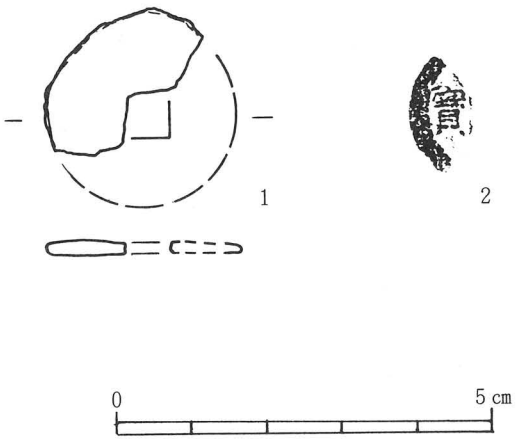


図31　萩原狐ヅカ遺跡出土銭貨実測図・拓影

4 まとめ

遺物の出土状況から、A区には当初から遺構は存在していなかったのに対し、鞍部のB区には近世墳墓が営まれていた可能性が高い。B区は残念ながら畑等の耕作に伴い遺構面が大きく掘削され、遺物だけが耕作土内に包含される結果となったのであろう。周辺の尾根上にも同様の平坦面がいくつか点在することから、同種の遺跡である可能性があり、今後も調査を重ねていく必要がある地域である。

5 抄　　録

遺跡名	萩原狐(はぎはらきつね)ヅカ遺跡（榛原町遺跡番号1－115）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字萩原　元萩原919－1番地
遺跡立地	標高約360～368mの尾根上
遺跡規模	南北約45m、東西：7～33m、面積：約500㎡
種別・時代	平坦面（近世墓？）
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	宅地造成工事（事業者：三晃住宅株式会社ほか）
現地調査期間	1991年7月30日～1991年8月23日
調査面積	約127.6㎡
検出遺構	明確な遺構は認められない
検出遺物	土師器、鉄釘、銭貨（寛永通寶）　整理箱1箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註）柳澤一宏「榛原町遺跡一覧表」『榛原町史』史料　榛原町役場　1991

Ⅶ　下井足カワタ遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

本遺跡は、1986年の踏査段階では古墳時代～中世にかけての遺物散布地（榛原町遺跡番号１－100）として確認[註1)]していたものである。また、本遺跡の東方にも中世の遺物散布地[註2)3)]が存在し、本来は一体のものであった可能性が高い。

1990年にこの遺跡を中心として東西方向の道路が新設される計画が明らかとなったため、関係機関等が協議を行ったところ、まず、遺跡の範囲等を明らかにする確認調査を実施することになった。確認調査は、同年８月８日から８月22日にかけて２箇所のトレンチ調査にて行い、溝・ピット等の遺構、サヌカイト・土師器・須恵器等の遺物を検出し、これらがさらに広がっている可能性も考えられた。また、道路予定地に隣接する地区が個人農地として造成される計画もあったため、道路敷地内と農地造成地内とをそれぞれ発掘調査し、遺跡の状況を把握する必要があった。

事業者である榛原町役場からは1991年７月26日付けで改めて、埋蔵文化財発掘調査通知書、個人から1991年８月８日付けで埋蔵文化財発掘調査届出書がそれぞれ提出され、今回の発掘調査となったものである。現地調査（２次調査）は1991年９月４日から1991年９月30日にかけて実施し、その後、整理作業に移り、1992年３月31日に本事業を終えた。

遺跡名は大字名と小字名から「下井足（しもいだに）カワタ遺跡」とし、本書には、道路敷設用地内での発掘調査概要を中心に収録している。

調査関係者は下記のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
庶務担当課	榛原町役場　同和対策課（課長　樋口保行）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、田中正樹、山本正和、山本文子、本村充保
調査作業員	山本繁夫、池田圭子、棚田幸子、中谷喜代子、松村幸代、柳沢雅子
調査指導	奈良県教育委員会
航空写真撮影	株式会社岡本組
調査協力	萩乃里自治会、福島善一、福島隆雄

(2) 現地調査日誌抄

1990年（平成２年）

８月８日（水）

器材搬入。写真撮影。第１・２トレンチ設定。

８月９日（木）～８月10日（金）

第２トレンチ掘り下げ。

８月16日（木）

第２トレンチ土層断面図作成・平板測量・写真撮影。

８月17日（金）

第１トレンチ精査。溝等の遺構、遺物を検出。

８月18日（土）

第１トレンチ遺構実測・土層断面図作成。

８月20日（月）

第１トレンチ西側拡張。

８月21日（火）

第１トレンチ精査・写真撮影・遺構実測。

８月22日（水）

第１トレンチ平板測量。器材搬出。

1991年（平成３年）

９月４日（水）

２次調査の開始。器材搬入。掘り下げ開始。

９月５日（木）～９月11日（水）

掘り下げ作業、遺構検出作業。

９月12日（木）・９月18日（水）

掘り下げ作業、遺構実測。

９月20日（金）・９月24日（火）

遺構実測、平板測量。

９月25日（水）・９月26日（木）

遺構検出作業、遺構実測、写真撮影

９月30日（月）

航空写真撮影、器材搬出。

写真７　作業風景

図32　下井足カワタ遺跡位置図

図33　下井足カワタ遺跡調査位置図

2　位置と環境

調査地は、榛原の市街地の南辺部にあたり、井足岳から北方にのびる標高約320～330ｍの一尾根先端部に位置する。周辺は様々な開発により以前の景観とは、趣を異にしているものの、北方には榛原の町並、屏風状にならぶ大和富士をはじめとする当地の高峰を望める。

下井足カワタ遺跡と同一尾根上には順に式内社の宇太水分神社、下井足城山古墳群、井足城跡などが位置する。また、周辺では丹切古墳群、下井足遺跡群、谷遺跡をはじめ、多くの遺跡の発掘調査が行われており、この遺跡は芳野川・宇陀川右岸の遺跡密集地の一角を構成している（図２、32)。

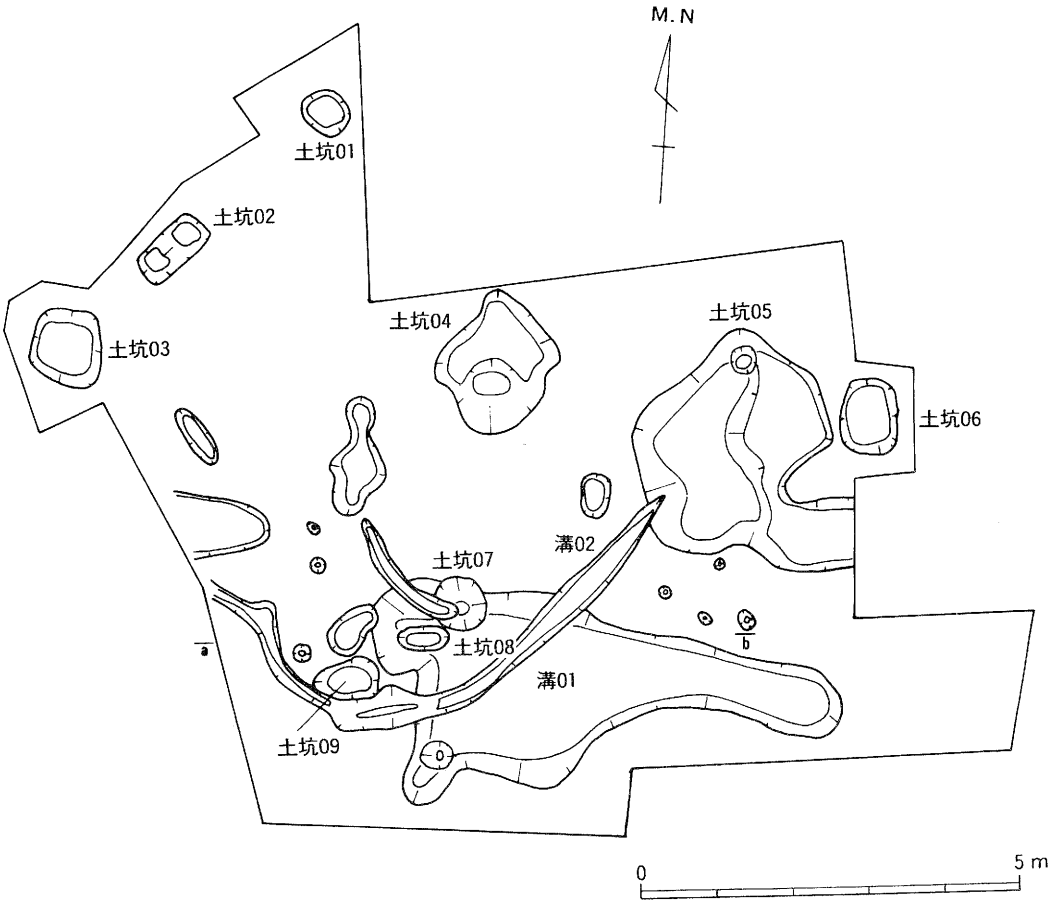


図34　下井足カワタ遺跡第１トレンチ遺構平面図

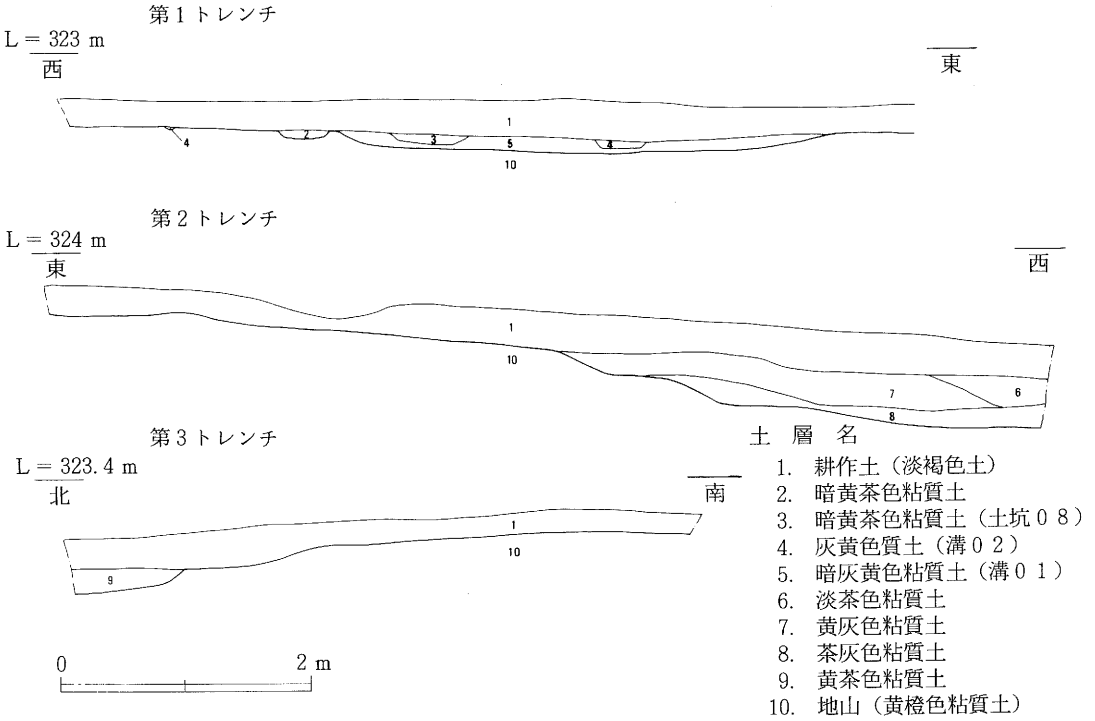


図35　下井足カワタ遺跡土層断面図

表８　下井足カワタ遺跡主要遺構一覧表

遺構名	規　模（cm）		平面形態	出　土　遺　物	埋土	時　代
	径・辺	深さ				
土坑　01	73× 70	87	隅丸方形	土師器	暗茶灰色土	奈良？
土坑　02	110× 55	30	長 方 形	土師器	暗茶色土	奈良？
土坑　03	104×100	52	方　　形	須恵器、土師器	暗茶灰色土	奈良？
土坑　04	183×165	23	不整円形	土師器	灰黄色粘質土	奈良
土坑　05	310×280	19	不整円形	須恵器、土師器	灰黄色粘質土	奈良
土坑　06	97× 78	17	楕 円 形	土師器、鉄釘	褐色粘質土	中世？
土坑　07	85× 80	42	円　　形		淡褐色粘質土	？
土坑　08	70× 34	4	楕 円 形	土師器	暗黄茶色粘質土	中世？
土坑　09	100× 65	9	楕 円 形	土師器	灰褐色粘質土	？
ピット01	18× 17	14	不整円形	土師器	灰黄色粘質土	？
溝　　01	幅 90～260 延長 650	16		サヌカイト、須恵器、土師器	暗灰黄色粘質土	奈良？
溝　　02	幅 12～32 延長 790	4		サヌカイト、土師器	灰黄色粘質土	中世？

3　遺跡の調査

（1）　調査区と基本土層

1次調査時に第1・2トレンチ、2次調査時に第3トレンチを設定している（図33、35、図版18～20）。

第1トレンチ

淡褐色の耕作土（第1層）を掘り下げると、ほどなく黄橙色粘質土の地山面（遺構面）を検出し、地表からこの面までの深さは約20cmと比較的浅い。約24㎡にわたって調査したところ、遺構・遺物を確認したので、一旦、作業を停止し、2次調査に備えることとした。

第2トレンチ

耕作土（第1層）を掘り下げると、東半では、ほどなく黄橙色粘質土の地山面を検出した。西半では淡茶色・黄灰色・茶灰色粘質土が堆積している。

第3トレンチ

淡褐色の耕作土（第1層）を掘り下げると、ほどなく黄橙色粘質土の地山面を検出し、地表からこの面までの深さは約20cmとなっている。

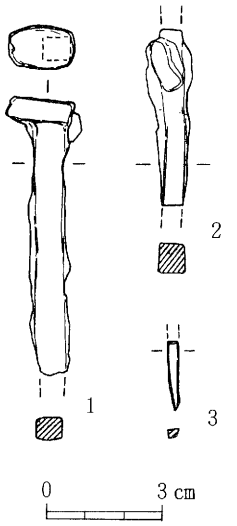


図36　下井足カワタ遺跡第2トレンチ出土鉄釘実測図

（2）　検出遺構

第1トレンチからは、土坑・ピット・溝の一部を検出したので、2次調査を実施している（図34）。詳細は榛原町文化財調査概要8[註4)]に記しているので、本書では主要遺構一覧表（表8）のみに留める。

第3トレンチ北端からは、黄茶色粘質土を埋土とする深さ約20cmの落ち込みの一部を検出した時期は明らかでない。

（3）　出土遺物

第2トレンチの耕作土内から鉄釘数点が出土している。これらのうち、3点を図示し（図36）、数値等は表9にまとめている。

表9　下井足カワタ遺跡第2トレンチ出土鉄釘観察表

（単位：cm）

挿図番号	全長（現存長）	身　　部	頭部の形態	備　　考
36－1	（8）	6×7（方）	長方形（1.2×2.5）	
36－2	（4.7）	8×8（方）		一部にタテ方向の木質
36－3	（1.9）	3×2.5（方）		

4 まとめ

後世の耕作等により遺構の大半が削平され、遺構の検出状況は、良好とはいえない。3箇所の調査区のうち、第1トレンチから比較的多くの遺構・遺物を検出することができた。このうち土坑05からは、7世紀後半～8世紀前半頃の須恵器片、土師器片などがややまとまって出土している。

耕作土中よりサヌカイト片、須恵器、土師器などが出土しており、下井足カワタ遺跡は弥生時代、古墳時代、奈良時代、中世の居住域であった可能性が高い。

5 抄　　録

遺跡名	下井足（しもいだに）カワタ遺跡（榛原町遺跡番号1－100）
調査地	奈良県宇陀郡榛原町大字下井足155・156番地
遺跡立地	標高約320～330mの尾根上
遺跡規模	南北約50m、東西：70m、面積：約3500㎡
種別	弥生時代～中世の遺物散布地
調査名	下井足カワタ遺跡発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	道路新設工事（事業者：榛原町）
現地調査期間	1991年8月8日会1990年8月22日（1次調査） 1991年9月4日～1991年9月30日（2次調査）
調査面積	約110.9㎡（1990年発掘調査分含む）
検出遺構	土坑、溝、ピット
検出遺物	サヌカイト、須恵器、土師器、鉄釘　　整理箱1箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1）柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要2　榛原町教育委員会　1987
註2）菅谷文則他『丹切古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊　奈良県教育委員会　1975
註3）白石太一郎他『奈良県遺跡地図』第2分冊　奈良県教育委員会　1971
註4）柳澤一宏『榛原町内遺跡発掘調査概要』1991年度　榛原町文化財調査概要8　榛原町教育委員会　1992

Ⅷ　戒場遺跡発掘調査概要

1　調査の契機と経過

本遺跡は、榛原町遺跡番号[註1)]3－1・2、奈良県遺跡番号[註2)]103－9・10として登載している2箇所の遺物散布地からなり、これまでに縄文時代と中世の遺物が採集されている。

この遺物散布地を含む水田地帯約2.2haにおいて農地造成工事が実施されることとなったため、今回の発掘調査となったものである。

発掘調査は事務手続きを経たのち、現地調査は1991年10月23日に着手し、同年12月6日に終了した。なお、遺跡名は2箇所の遺物散地を総称して、大字名から「戒場（かいば）遺跡」とした。

2　遺跡の調査

（1）　検出遺構

遺跡の範囲を確認するため、工事予定地内に6箇所のトレンチを設定した。第3トレンチでは、12世紀初頭の落ち込み遺構、12世紀中葉の溝、12世紀後葉の掘立柱建物遺構等を検出している（図版21・22）。

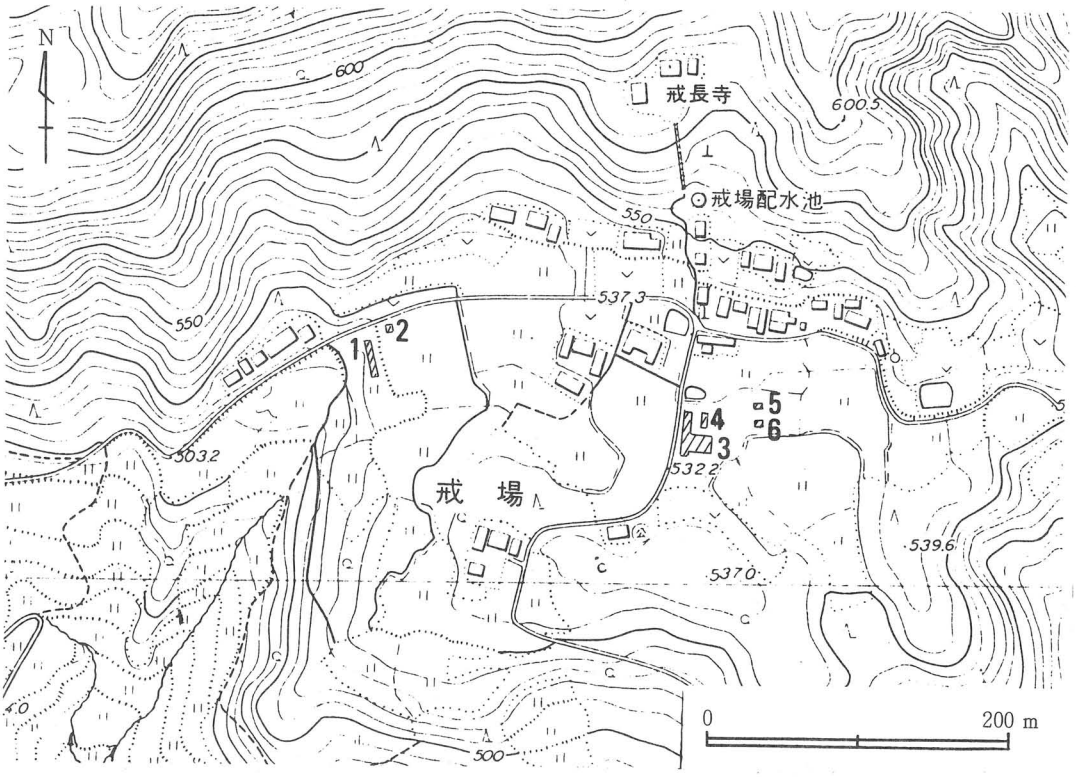


図37　戒場遺跡調査位置図（数字はトレンチ番号）

（2）　出土遺物

第3トレンチを中心として、須恵器（甕）、瓦器（椀・皿）、土師器（皿・土釜）、青磁（椀）、サヌカイトが出土し、その量は整理箱3箱に相当する。

3　ま　と　め

平安時代後期の創建と伝える戒長寺の南方に広がる戒場遺跡からは、この寺に伴う可能性がある遺構を検出した。詳細は『榛原町文化財調査概要8』[註3)]に掲載しているので参照されたい。

4　抄　　録

遺　跡　名	戒場（かいば）遺跡（榛原町遺跡番号3－1・2）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字戒場268－1、269－1、371、372－1、372－2、435－1、435－2番地
遺跡立地	標高約520～550mの山塊南斜面
遺跡規模	南北約250m、東西約300m、面積：約75,000㎡
種別・時代	縄文時代・平安時代～中世の遺物散布地 12世紀代の建物跡等（寺院跡？）
調　査　名	戒場遺跡遺跡発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	農地造成工事（事業者：榛原町役場産業課）
現地調査期間	1991年10月23日～1991年12月6日
調査面積	約360㎡
検出遺構	掘立柱建物跡、土坑、ピット、溝、落ち込み遺構
検出遺物	須恵器（甕）、瓦器（椀、皿）、土師器（皿、土釜）、青磁（椀）、サヌカイト、整理箱3箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註1）柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要2　榛原町教育委員会　1987
註2）白石太一郎他『奈良県遺跡地図』第2分冊　奈良県教育委員会　1971
註3）柳澤一宏『榛原町内遺跡発掘調査概要報告書』1991年度　榛原町文化財調査概要8　榛原町教育委員会　1992

Ⅸ　下井足城山古墳群発掘調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

本古墳群は、以前から下井足遺跡群の北端に位置する古墳として奈良県遺跡地図[註1)]（番号15－B－56ほか）、榛原町遺跡地図[註2)]（番号２－60ほか）に登載しているところである。

古墳群が立地する尾根を東西に横断している町道が拡幅工事されることとなり、その事業地内に古墳１基が含まれるため、事業者である榛原町役場建設課より1991年１月25日付けで埋蔵文化財発掘通知書が提出された。その後、関係機関が調査の実施方法等の協議を行い、発掘調査は榛原町教育委員会が担当することとなった。事務手続き等を経たのち、現地調査を1991年５月21日から同年８月13日にかけて実施し、1992年３月31日に本事業を終えた。古墳名は大字名及び小字名から「下井足城山古墳群」とし、当初からその存在が明らかであった古墳を１号墳、今回、新たに確認した古墳を調査順に２号墳、３号墳と呼称している。調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
庶務担当課	榛原町役場　建設課（課長　高橋博和）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、山本美恵子、本村充保
調査作業員	池田圭子、高西綾子、棚田幸子、中谷喜代子、梶本弘子、藤村典子、柳澤雅子
調査指導	奈良県教育委員会、奈良県立橿原考古学研究所
航空写真撮影	株式会社岡本組
調査協力	下井足自治会、東　潮、楠元哲夫、佐藤良二、辻本宗久、朴　美子、山下隆次、多田文雄、丸山文嗣

（2）　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

５月21日（火）
伐採作業。測量杭設置。

５月22日（水）
写真撮影。地形測量。

５月23日（木）
写真撮影。器材搬入。

５月24日（金）
慰霊祭。地形測量。１号墳掘り下げ開始。

５月28日（火）～５月30日（木）
１号墳表土・第２層掘り下げ作業。

６月４日（火）～６月７日（金）
１号墳第２層掘り下げ作業・裾部地山検出作業。

６月11日（木）～６月14日（金）
１号墳裾部地山検出作業・周溝検出作業。南端ピット群検出。

6月17日（月）～6月19日（水）
1号墳墳頂部精査・周溝検出作業。
6月21日（金）・6月25日（火）
1号墳周溝掘り下げ作業。
6月26日（水）
1号墳北方で「コの字状」の溝検出（のちの2号墳）。
6月27日（木）
1号墳周溝掘り下げ作業・土師器椀出土。
6月28日（金）
1号墳周溝内精査・墳丘盛土測量。
7月2日（火）
1号墳墳頂部精査。2号墳周溝掘り下げ作業・土器出土。
7月3日（水）
2号墳周溝内土器群写真撮影・実測。2号墳埋葬施設検出。
7月4日（金）
2号墳周溝内精査。
7月8日（月）
1号墳埋葬施設検出。2号墳埋葬施設掘り下げ作業。
7月9日（火）
1号墳墳頂部土層断面図作成。2号墳埋葬施設土層断面図作成。
7月10日（水）
1号墳埋葬施設掘り下げ作業。
7月11日（木）
1号墳埋葬施設掘り下げ作業。3号墳周溝検出。
7月12日（金）
1号墳埋葬施設掘り下げ作業。3号墳周溝掘り下げ作業。
7月15日（月）
1号墳埋葬施設掘り下げ作業。
7月17日（水）
1号墳埋葬施設掘り下げ作業・鉄製品出土。
2号墳埋葬施設掘り下げ作業。
7月19日（金）
航空写真撮影。全景写真撮影。1・2号墳遺物出土状況写真撮影。1・2号墳埋葬施設実測作業。
7月20日（土）
7月22日（月）～7月24日（水）
1号墳墳丘盛土掘り下げ作業。
7月25日（木）
1号墳墳丘盛土掘り下げ作業。1号墳墓壙埋土掘り下げ作業。
7月26日（金）
全景写真撮影。
7月30日（火）
1号墳墓壙実測作業。2号墳周溝実測作業。
7月31日（水）
3号墳周溝実測作業。土坑群実測作業。
8月1日（木）
1号墳土層断面図作成。
8月2日（金）
1号墳地山測量作業。土坑群写真撮影。器材搬出。
8月12日（月）・8月13日（火）
調査対象外古墳地形測量。

写真8　現地調査のひととき

2　位置と環境

下井足城山古墳群は、榛原町の市街地の南方、下井足地区に位置する。井足岳から北方へのびる標高335～358ｍの尾根上に立地し、広義の下井足遺跡群に含まれる。尾根は南東部分で谷によって途切れ、独立丘陵状を呈している。周辺では丹切古墳群、下井足古墳群、愛宕山古墳、井足城跡などの遺跡が分布する。下井足城山古墳が位置する尾根の北端には式内社でもある宇太水分神社が鎮座する。古くは、菟田野町の宇太水分神社を「上水分宮」、この神社を「下水分宮」とも称している。

調査地からの眺望は西方に良く、大王山遺跡や宇陀川・芳野川の氾濫原を望める。北方は榛原町の市街地、大和高原との境界をなす山々が広がり、東方には丹切古墳群の尾根が迫る。

3　下井足城山古墳群の概要

本古墳群は先述のとおり、下井足遺跡群の一部に含まれ、奈良県・榛原町遺跡地図には３基の古墳を登載している。今回の発掘調査により新たに２基の古墳を検出し、測量調査・分布調査によっても新たに１基の古墳を確認し、あわせて６基の古墳で構成されることが明らかとなった（図38、別添図１）。各古墳の概要は表10のとおりである。

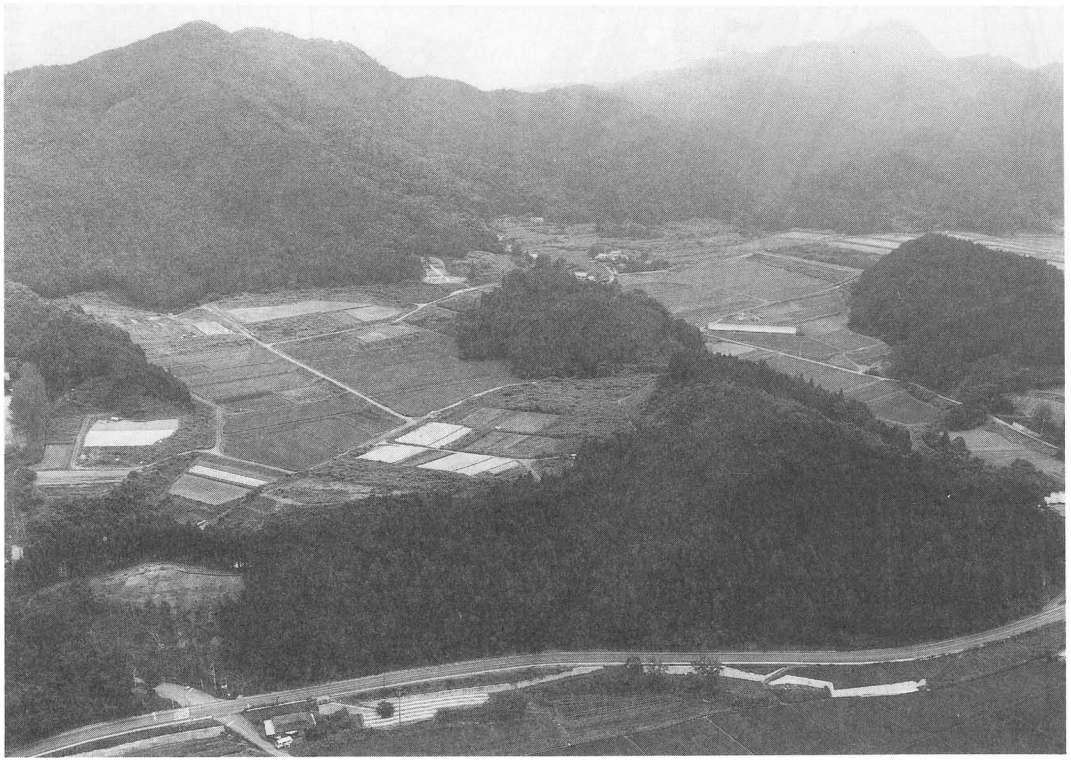
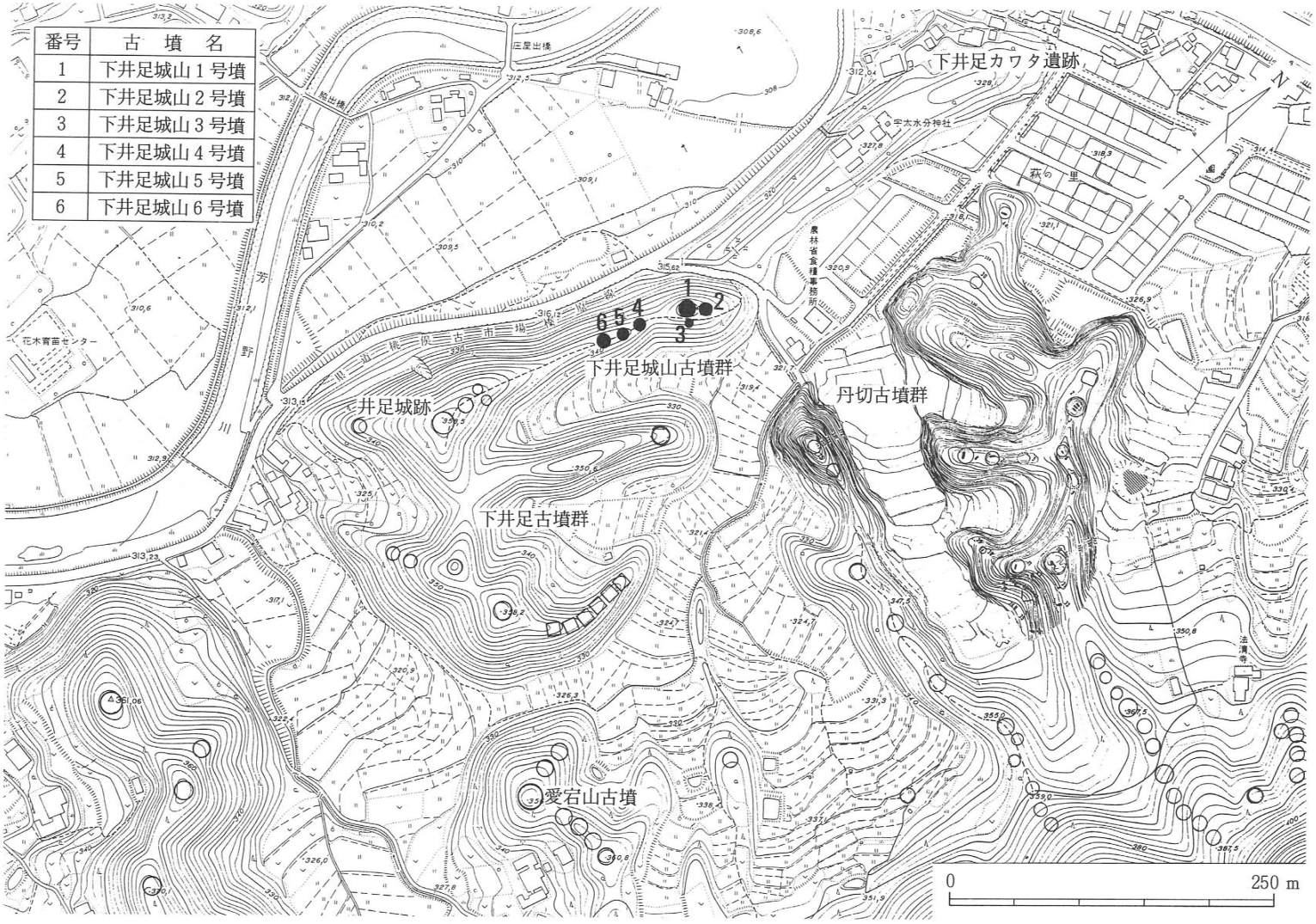


写真９　下井足遺跡群（下井足城山古墳群）



番号	古　墳　名
1	下井足城山１号墳
2	下井足城山２号墳
3	下井足城山３号墳
4	下井足城山４号墳
5	下井足城山５号墳
6	下井足城山６号墳

図38　下井足城山古墳群周辺遺跡分布図

表10　下井足城山古墳群一覧表

番号（図39に対応）	奈良県遺跡地図番号	榛原町遺跡地図番号	名称	規模等	埋葬施設	出土品	備考
1	15－B－56	2－60	下井足城山1号墳	円墳、径14m、高さ1～2m、周溝	割竹形木棺	土師器(甕・椀)、鉄刀子、鉄鎌、サヌカイト	1991年発掘調査、消滅
2			下井足城山2号墳	円墳、径5～7m、高さ1m、周溝	土壙墓	須恵器(杯・壺)、土師器(甕)、鉄刀子、サヌカイト	1991年発掘調査、消滅
3			下井足城山3号墳	円墳、推定径8～10m、周溝	(未確認)	土師器、サヌカイト、榛原石	1991年、一部発掘調査
4	15－B－57	2－61	下井足城山4号墳	円墳、南北13m、東西径10m、高さ1.5m			
5			下井足城山5号墳	円墳、南北径11m、東西径10m、高さ1m			
6	15－B－58	2－62	下井足城山6号墳	円墳、南北径17m、東西径13m、高さ1.5m			

写真10　下井足城山4号墳

4　下井足城山１号墳の調査

（１）　位置と現状

写真11　下井足城山１号墳墳頂部小祠

１号墳は、井足城跡から北方へのびる標高339～341ｍの尾根稜線上の高所に位置し、南方に分布する他の古墳より比較的大きく見える。古墳北方は尾根を東西に横断する町道により崖となっており、宇太水分神社の鎮座する尾根とは隔絶されている。

調査地一帯は杉や檜の山林となっており、１号墳の墳頂部には盗掘坑が穿たれ、その傍らには、１号墳の東裾から出土した板状の「榛原石」で造られた小祠がある（写真11）。

（２）　墳丘と周溝

調査前の墳丘（別添図１、図版26）

調査前の地形測量結果から墳丘裾は、北側で340～340.25ｍ、西側で340ｍ、南側で340.25ｍの等高線付近と考えられる。一方、東側は幾らか流失しているようであるが、339.25ｍの等高線付近が推定でき、径約14ｍ、高さ約１～２ｍの円墳となる。

墳丘と周溝（図39、図版27）

古墳の周りには幅1.1～1.7ｍ、深さ30～60㎝の周溝が円形にめぐり、南北径14ｍ、高さ１～1.5ｍの規模の円墳となる。周溝も含めると南北径16.5ｍとなる。尾根稜線を穿つ南側の周溝部分は他よりも深い。周溝はこの南部分で終結し、東斜面にはのびない。東側部分では後述の３号墳の築造の際、削平され詳細は明らかでない。現状での周溝は「Ｃ」字状にめぐり、西側部分では周溝外縁の一部が流失している。周溝埋土は淡褐色土、一部では黄茶色土、黄褐色土となっている。なお、墳丘には葺石、埴輪等の使用は認められない。

周溝底の土坑（図40、図版33）

南側の周溝底には平面形態が楕円形を呈する土坑（土坑01）が穿たれ、この規模は、長径80㎝、短径42㎝、深さ27㎝である。土坑上面からは土師器椀１点が正位で出土している（図45、図版41－１）。埋土は周溝埋土と類似した淡褐色土である。

墳丘の築成状況（図41・42、図版28・32）

墳丘の築成にあたっては、尾根稜線の高所を南北径14ｍ、東西径13ｍ、高さ0.75～１ｍの円墳状に地山整形することからはじめられる。そして、暗黄茶色土をはじめ、黄茶色砂質土・暗黄茶色砂質土等の盛土を20～40㎝の厚さで施し、墳丘を形成している。

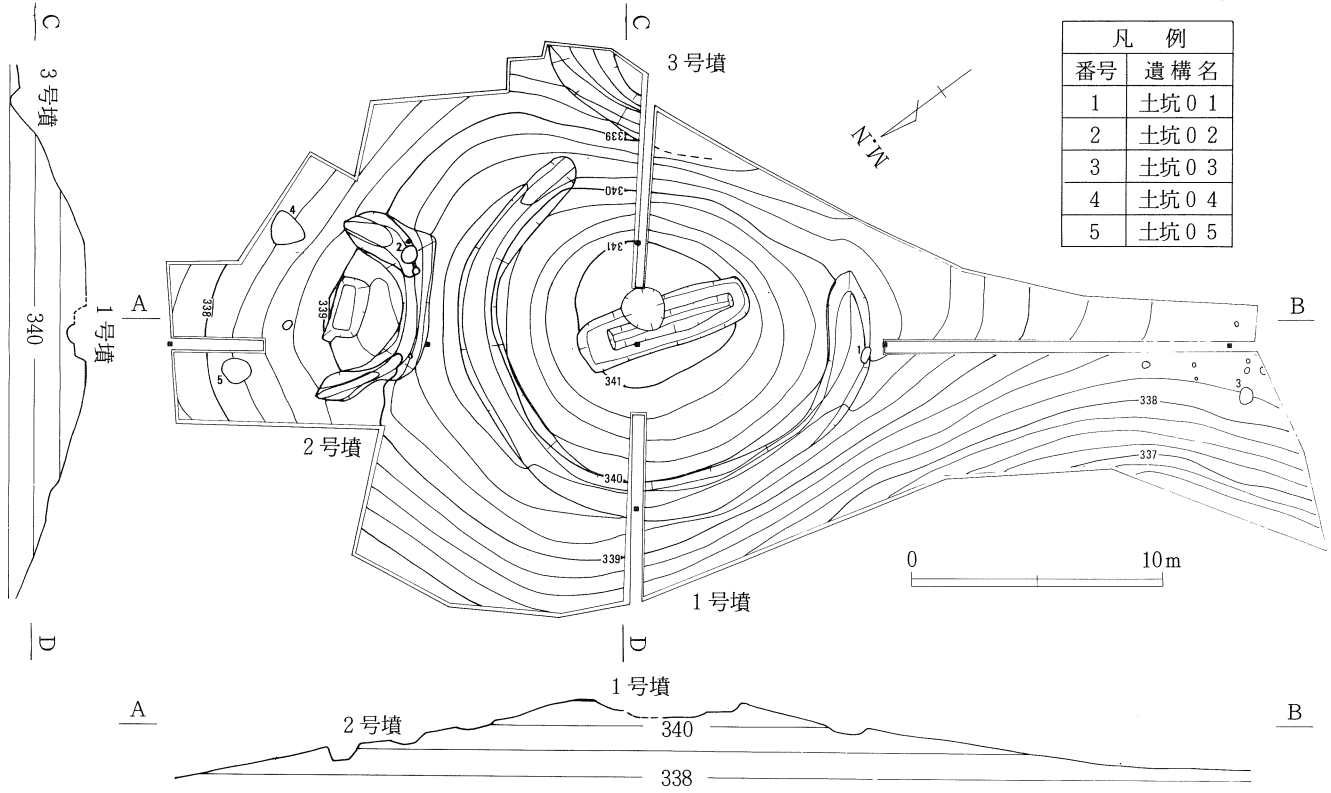


図39　下井足城山１・２・３号墳地測量図（調査後）

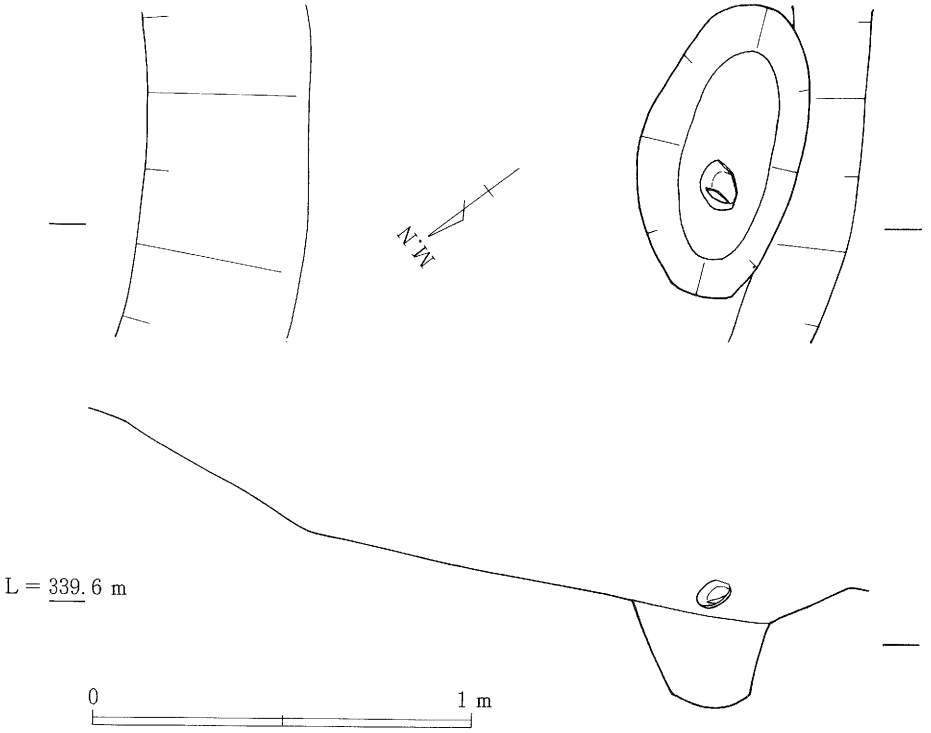


図40　下井足城山１号墳周溝内土坑01実測図

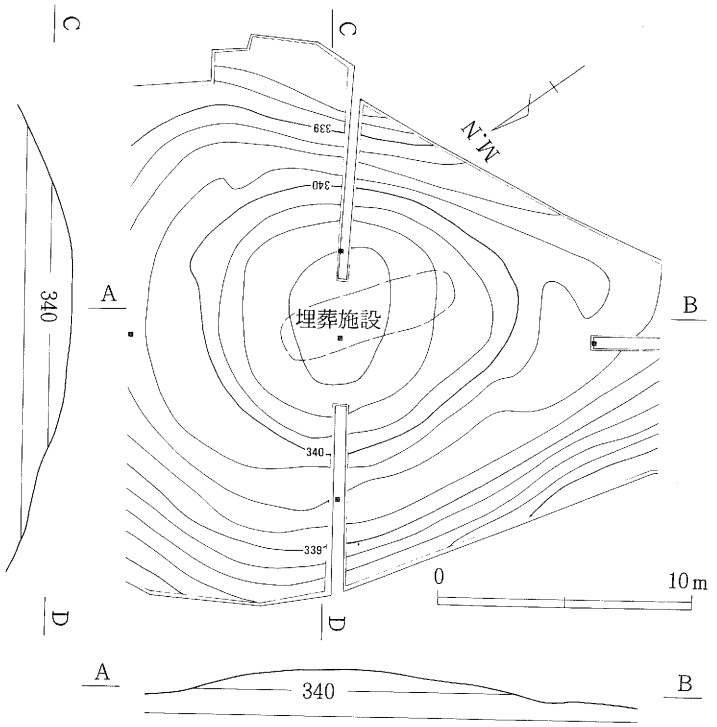
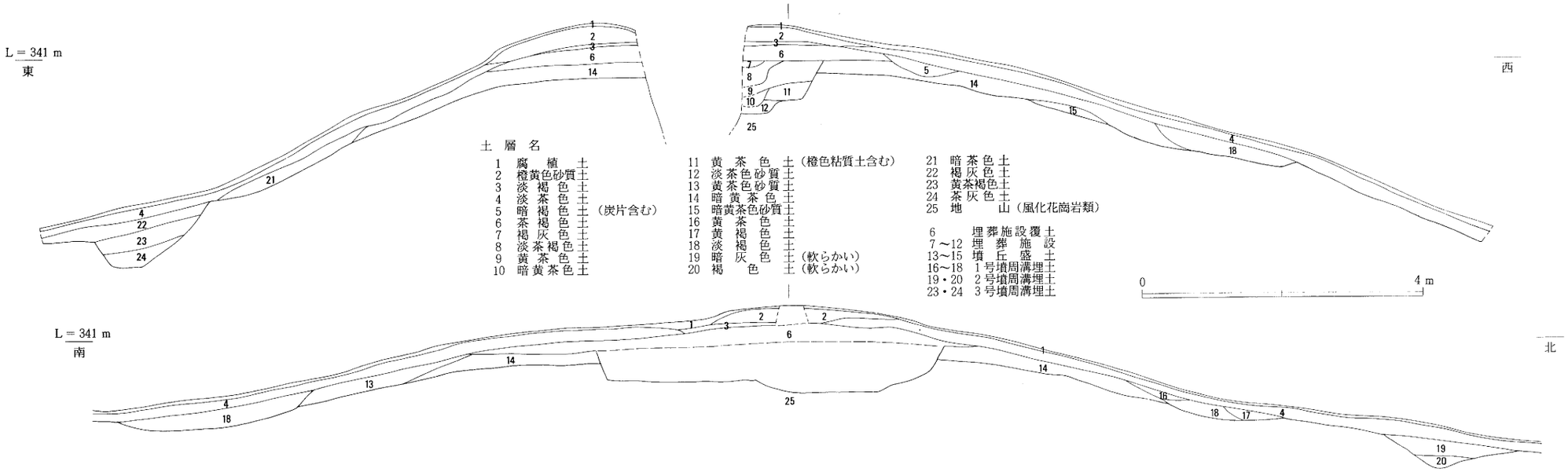


図41　下井足城山１号墳地山地形測量図



土　層　名

1　腐　　植　　土
2　橙黄色砂質土
3　淡　褐　色　土
4　淡　茶　色　土
5　暗　褐　色　土　（炭片含む）
6　茶　褐　色　土
7　褐　灰　色　土
8　淡茶褐色土
9　黄　茶　色　土
10　暗黄茶色土
11　黄　茶　色　土（橙色粘質土含む）
12　淡茶色砂質土
13　黄茶色砂質土
14　暗　黄　茶　色　土
15　暗黄茶色砂質土
16　黄　茶　色　土
17　黄　褐　色　土
18　淡　褐　色　土
19　暗　灰　色　土（軟らかい）
20　褐　　色　土（軟らかい）
21　暗　茶　色　土
22　褐　灰　色　土
23　黄茶褐色土
24　茶　灰　色　土
25　地　　山（風化花崗岩類）

6　　埋葬施設覆土
7～12　埋　葬　施　設
13～15　墳　丘　盛　土
16～18　1号墳周溝埋土
19・20　2号墳周溝埋土
23・24　3号墳周溝埋土

図42　下井足城山１号墳土層断面実測図

（3） 埋葬施設

墓　壙（図43・44、図版30）

墳丘盛土がなされたのち、墳頂部の中央に盛土と地山を穿って二段にわたって墓壙が形成される。墓壙主軸は南北方向にもち、平面形態は隅丸長方形を呈している。上段は検出面で長さ688㎝、幅196～204㎝、深さ約30～50㎝をはかる。棺の形状にあわせて穿たれた二段目の墓壙は長さ580㎝、幅70～80㎝、深さ12～21㎝の規模をはかる。墓壙底は中央部分が南北両小口より約５～６㎝深く、この両小口は丸みをおびる。なお、墓壙輪郭検出時にこの中央部分において、長さ約315㎝、幅約75㎝の規模の細長い暗褐色土の広がりを確認している。

割竹形木棺（図43、図版29・31）。

墓壙内に割竹形木棺を安置している。棺は既に朽ちており、詳細な棺構造は明らかでない。棺の規模は長さ約500㎝に復元でき、北小口での幅78㎝、南小口での幅62㎝（復元幅約80㎝）をはかる。棺底は、ほぼ水平である。

木棺（棺底）と墓壙との間には、淡茶色砂質土を入れて棺の安定を図っているが、その隙間は２～10㎝となっている。なお、棺の内外には赤色顔料の塗布や粘土の使用等は認められなかった。

（4） 遺物の出土状況

埋葬施設内の遺物出土状況（図43、図版29）

埋葬施設内からは北小口部分で鉄刀子１点と直刃の鉄鎌１点（図46、図版41－３・４）が出土している。鉄刀子は棺底から約15㎝上方で検出しており、棺上遺物と考えられる。鉄鎌は、調査時の不注意で正確な出土状況を把握できないが、鉄刀子の付近からの出土である。また、墓壙埋土中および上面から土師器砕片が数点（図47）が出土している。

周溝内の遺物出土状況

先述のとおり土坑01上面から土師器椀が出土している。この他、土坑東方の周溝内よりサヌカイト剥片１点（図版41―５）、西側の周溝層から土師器片が出土している。

墳丘盛土内の遺物出土状況

墳頂部南端の墳丘盛土中からサヌカイト剥片１点（図版41―６）が出土している。

表土内の遺物出土状況

墳丘表土（第２層）中の各所から土師器片および中世土器（土師器、瓦器、磁器）が出土しているが、元の位置を保っているものは認められない。また、１号墳北東の調査区端からは「元豊通寶」１点（図48、図版41―７）が出土している。

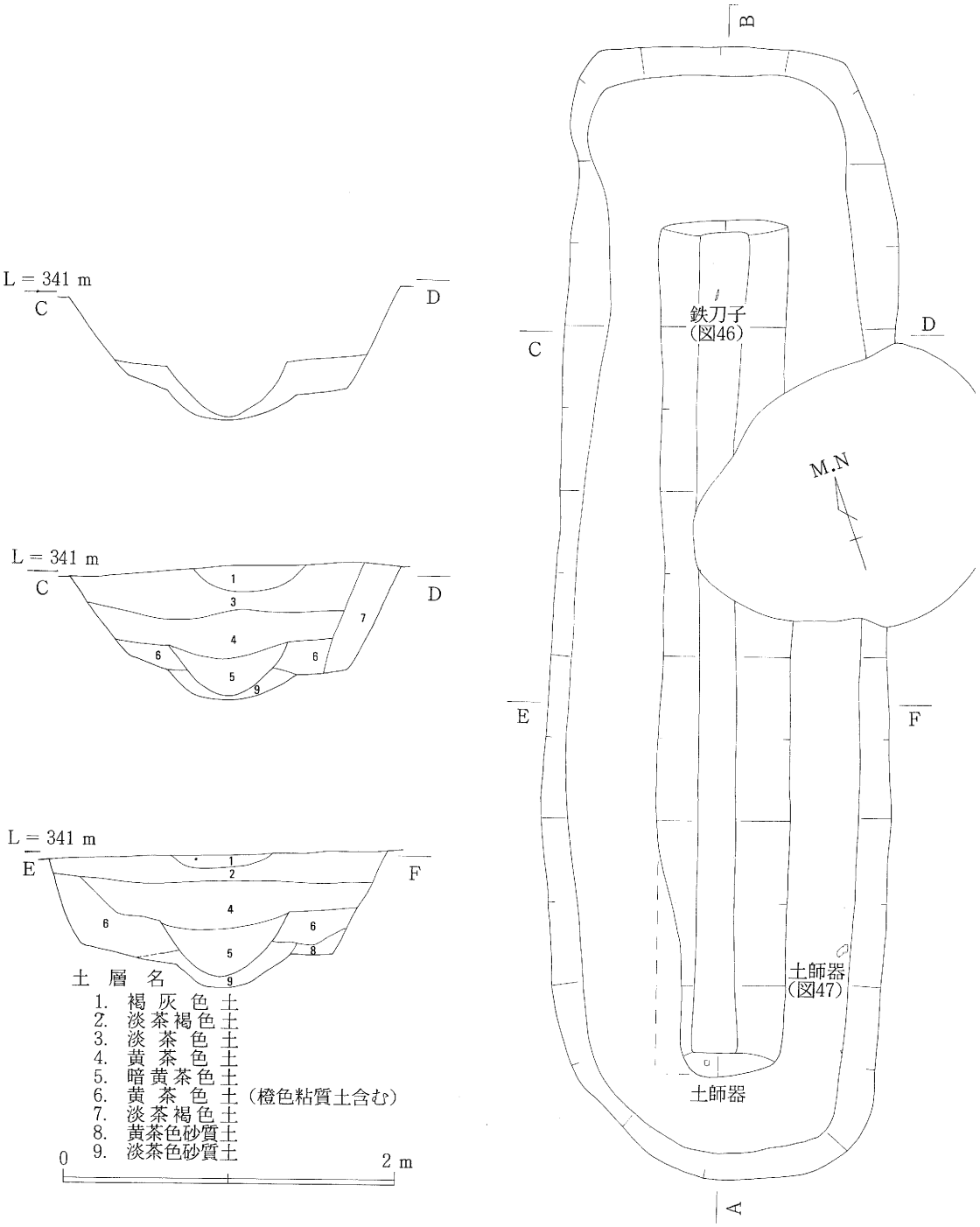


図43　下井足城山１号墳埋葬施設実測図

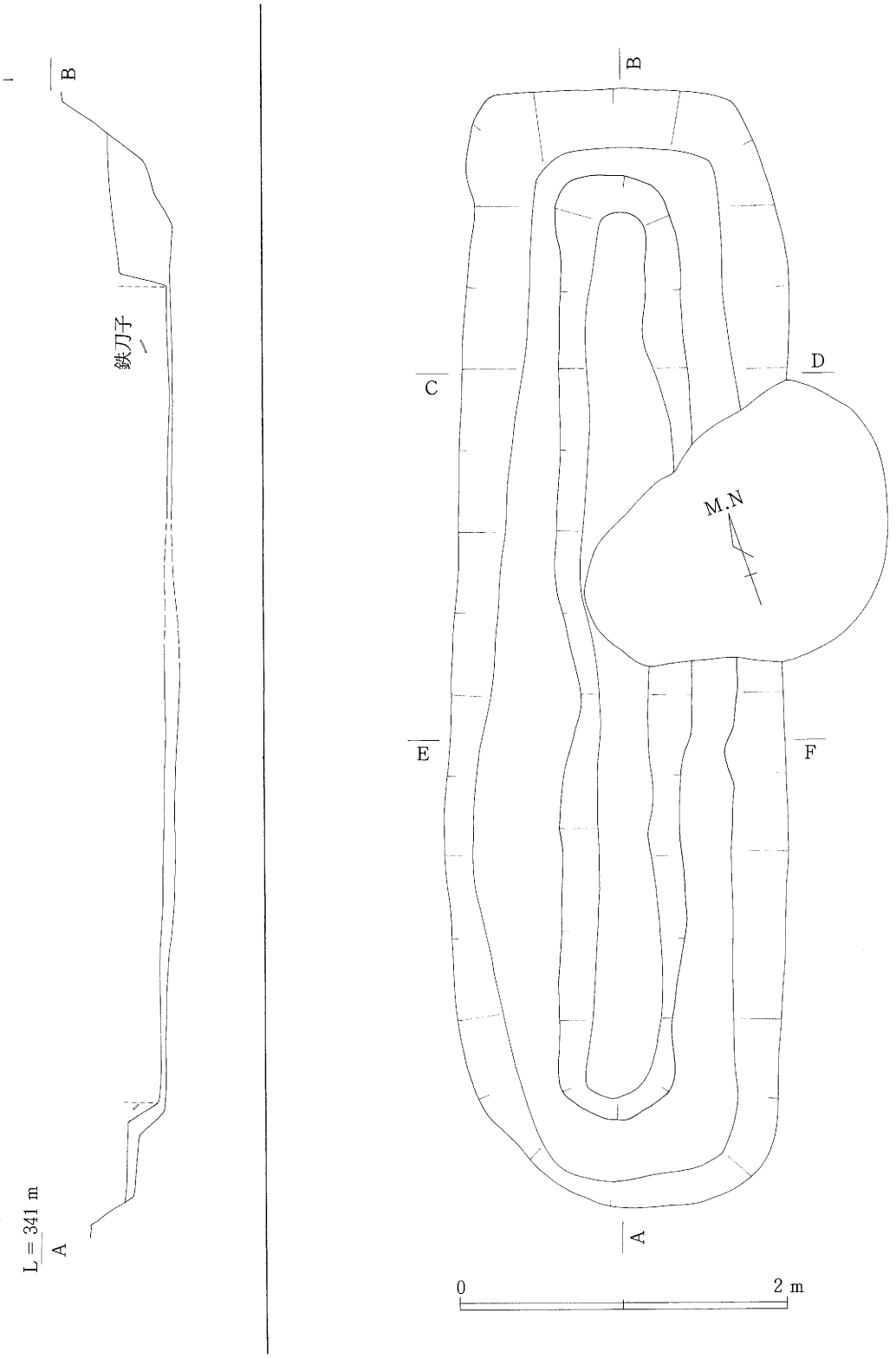


図44　下井足城山１号墳墓壙実測図

（5）　出土遺物

周溝内土坑01出土遺物

土師器　椀（図45、図版41－1）

法量は口径12.6㎝、器高3.8㎝である。体部は内彎し、口縁端部は尖り気味におさめる。内面はナデ、外面には横方向のヘラ削りを施す。色調は明赤褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。土坑上面からの出土である。

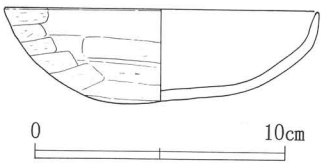


図45　下井足城山１号墳周溝内土坑01出土土師器実測図

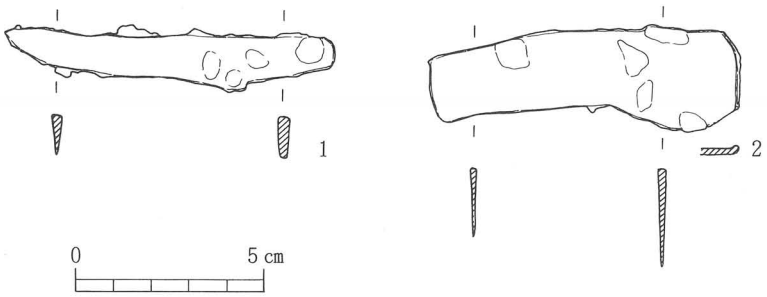


図46　下井足城山１号墳埋葬施設出土鉄製品実測図

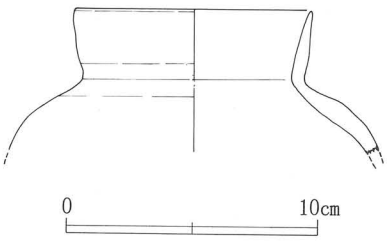


図47　下井足城山１号墳埋葬施設出土土師器実測図

図48　下井足城山１号墳裾部出土銭貨拓影

割竹形木棺出土遺物

鉄刀子（図46―１、図版41―３）

割竹形木棺北小口部分で出土したものである。全長8.8㎝、刃部長6.4㎝、茎部長6.4㎝をはかる完形品である。関は片関となっており、関に近い刃部には研ぎ減りが認められる。刃部中央での幅は１㎝、棟厚は0.2～0.3㎝をはかる。関部付近での茎部幅1.2㎝、柄尻部幅0.7㎝、厚さ0.2～0.3㎝をはかる。茎部には木質は認められない。

鉄　鎌（図46―２、図版41―４）

完形品の直刃鎌で、全長8.3㎝、刃部幅1.8～2.7㎝、基部幅2.2㎝、背部厚0.2㎝である。基部は折り返して柄の着装に備えるが、木質の遺存は認められない。先端は「コ」の字状を呈し、背部はやや丸みをおびる。割竹形木棺北小口部分の鉄刀子周辺からの出土である。

墓壙内出土遺物

土師器　壺（図47、図版41―２）

墓壙南東隅近くの埋土中からの出土である。口縁部から体部の一部にかけての破片のため、その全容は明らかにできない。法量は復元口径9.4㎝、復元頸部径8.8㎝、残存高5.5㎝である。口縁部は直線的に外方にのび、口縁端部は尖り気味におさめる。体部は内彎し、肥厚している。色調は暗赤褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好である。

周溝内出土遺物

サヌカイト剥片（図版41―５）

平面形は方形を呈し、縦3.3㎝、横3.5㎝、厚さ１㎝をはかる。２次加工は認められない。

墳丘盛土内出土遺物

サヌカイト剥片（図版41―６）

平面形は三角形を呈し、縦６㎝、横5.3㎝、最大厚1.2㎝をはかる。２次加工は認められない。

表土内出土遺物

銭　貨（図48、図版41―７）

1078年を初鋳年とする渡来銅銭「元豊通寶」である。直径2.4㎝、穿は一辺0.7㎝をはかる。背面は無文である。

（６）　小　　結

１号墳の埋葬施設は、やや長めの割竹形木棺であるが、棺内、棺側からの遺物は認められず棺上遺物と考えられる鉄刀子・鉄鎌が出土したにすぎない。また、墓壙埋土中より土師器片が若干出土しているが、その形態が明らかにできたものは僅かにすぎない。これらの数少ない遺物からではあるが、１号墳の築造時期は５世紀前葉と考えられる。なお、詳細については後述する。

5　下井足城山２号墳の調査

（１）　位置と現状

２号墳は、１号墳北隣の標高339～340ｍの尾根稜線上の北斜面に立地する。２号墳近くには、焚火によると思われる径約２ｍの穴が穿たれているのみで、盗掘坑は認められない。１号墳と同様、現状は杉や檜の山林である。

（２）　墳丘と周溝

調査前の墳丘（別添図１）

調査前の地形測量・地形観察では、明確な墳丘は認められず、北への緩傾斜のみであった。また、遺物や石材等も認められなかったため、当初、古墳の存在は予想していなかった。

墳丘と周溝（図39、図版34）

表土を除去後、精査したところ、半円状にめぐる溝と、長方形の土壙の輪郭を確認したため、古墳の存在が判明した。周溝は地山を穿って形成されており、傾斜面にあることから北端部分の流失が著しい。地形的な要因から、周溝は埋葬施設の周囲を半円状にめぐり、周溝の規模は幅120～220㎝、深さ40～60㎝をはかる。周溝の断面形態はＵ字状を呈し、周溝底は丸い。埋土は２層に大別でき、上層は軟らかい暗灰色土、下層は軟らかい褐色土となっている。この周溝から、古墳の規模は東西径７ｍ、推定南北径５ｍ、高さ１ｍをはかる円墳となり、周溝も含めると東西径９ｍ、推定南北径７ｍとなる。

表土除去後、すぐに地山を検出したため、盛土の有無は不明であるが、おそらく、埋葬施設を覆う程度の盛土が存在していたと考えられる。

周溝内の土坑・ピット（図49、図版34・36・37）

周溝南東隅部分の外側斜面に１基の土坑（土坑02）と２基のピット、南西隅部分の外側斜面に１基のピットが穿たれている。土坑02は長径80㎝、短径75㎝、深さ20～35㎝の不整円形土坑である。土坑上面からは、須恵器杯蓋２点と土師器壺（図51、図版41―８～10）が出土している。土坑埋土は褐色土である。３基のピットは径25～32㎝、深さ14～40㎝をはかり、褐色土の埋土中から遺物は出土していない。

（３）　埋葬施設（図50、図版34）

主軸を東西方向にもつ長さ227㎝、幅115～125㎝、深さ56～61㎝の隅丸長方形の土壙が地山を穿って形成されている。土壙の北東隅には長さ５㎝、幅35～45㎝、深さ約20㎝の方形段が取り付く。棺痕跡の検出につとめたが、橙茶色土・茶色土・暗茶灰色土等が混在しており、その痕跡は認められなかった。このことから、この埋葬施設は土壙墓と考えられる。埋葬に際しては、土壙底に厚さ１

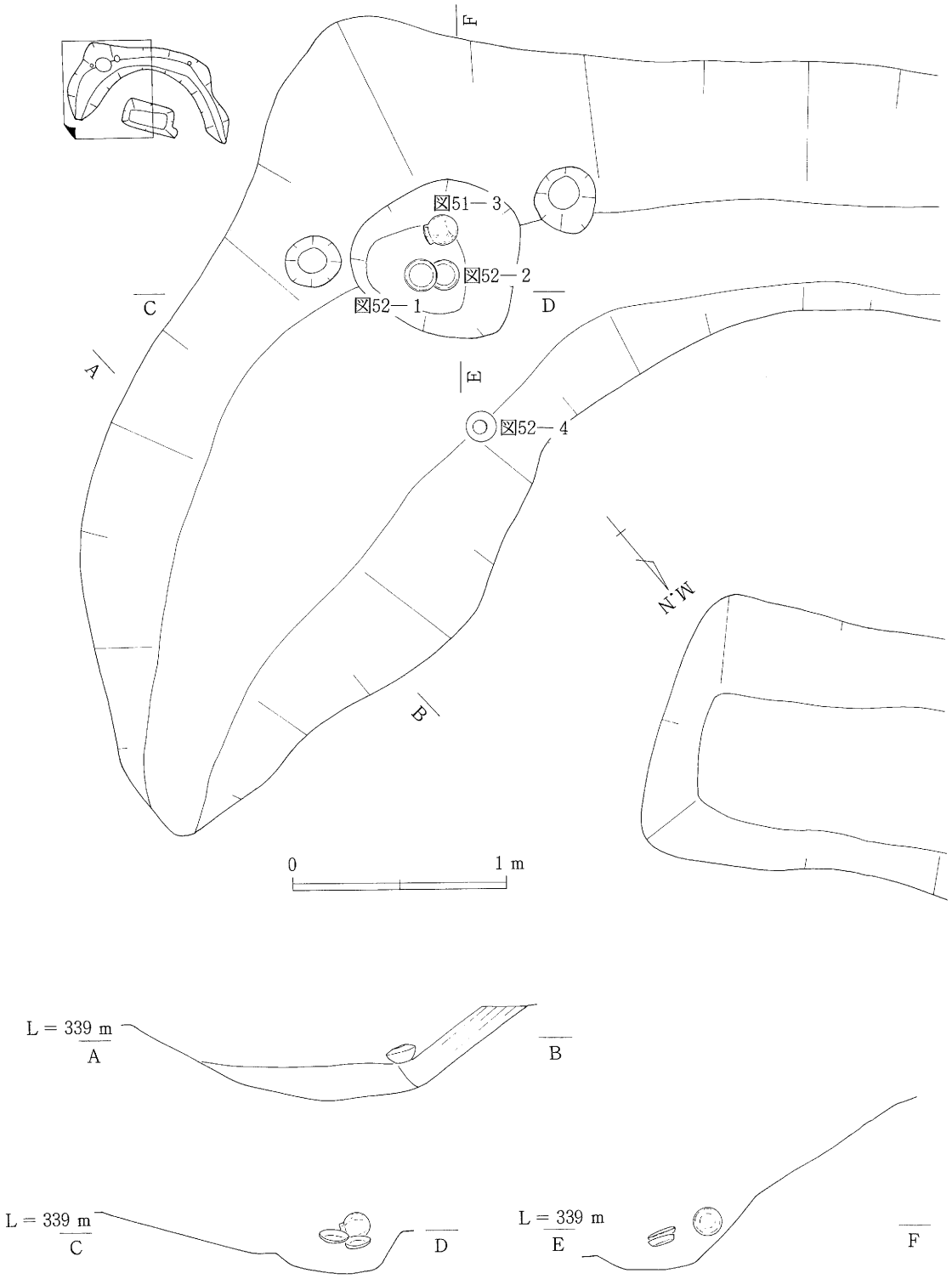


図49　下井足城山２号墳周溝内土坑02実測図

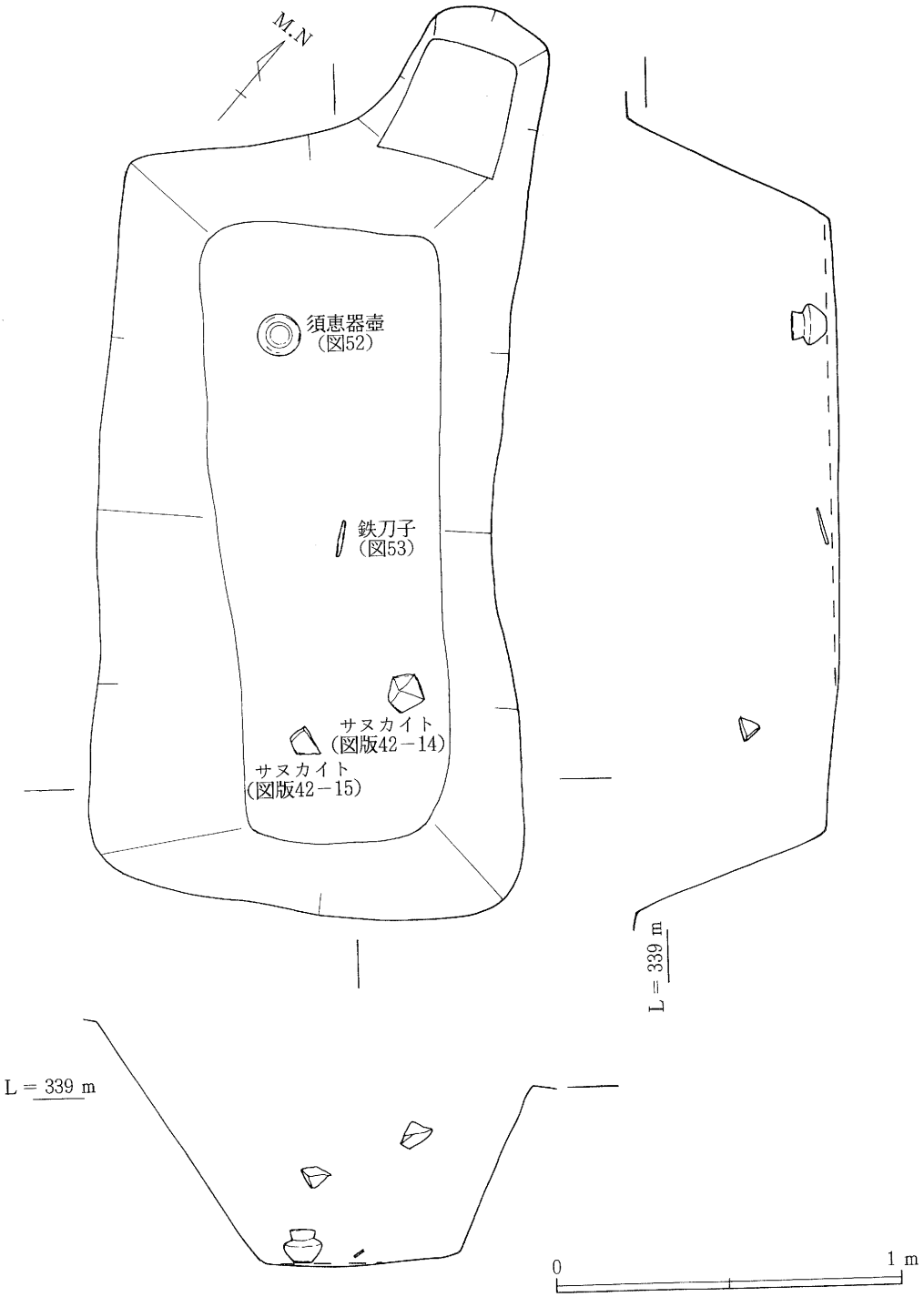


図50　下井足城山２号墳埋葬施設実測図

～3㎝にわたって淡茶色の整地土を置いている。

（4） 遺物の出土状況

周溝内の遺物出土状況（図49、図版36・37）

土坑02の上層から先述のとおり須恵器杯蓋2点、土師器壺1点（図51―1～3、図版41―8～10）が出土している。須恵器杯蓋はいずれも逆位、土師器壺は口縁部を東に向けた横位となっている。

また、土坑北隣の古墳寄りの周溝底では須恵器短頸壺1点（図51―4、図版41―11）が正位で出土している。

埋葬施設内の遺物出土状況（図50、図版35）

土壙の主軸よりやや北側で須恵器壺1点（図52、図版42―12）が正位で出土している。中央部分よりやや北寄りには、切先を東に向け、刃部を内側にした鉄刀子1点（図53、図版42―13）が出土している。鉄刀子は、やや浮いた状況となっており、西から東へと落ち込む格好となっている。

また、土壙埋土中よりサヌカイト原石1点（図版42―14）、サヌカイト熱破砕礫1点（図版42―15）が出土している。

（5） 出土遺物

土坑02出土遺物

須恵器　杯蓋（図51―1・2、図版41―8・9）

(1)は口径15㎝、器高4.6㎝をはかる完形品である。口縁端部には縦0.6㎝、横1.1㎝の古い打ち欠きが認められる。天井部は丸みをおび、天井部と口縁部とをわける稜線も丸い。口縁端部はやや尖り気味におさめ、僅かに内傾する面をもつ。天井部外面の½上半は回転ヘラ削り調整、その他は回転ナデ調整を施す。色調は灰色ないしオリーブ灰色を呈し、胎土は精良、焼成は堅緻である。ロクロ回転は右方向である。色調は灰色ないしオリーブ灰色、胎土は精良、焼成は堅緻である。なお、天井部外面には長さ10㎝の「―」のヘラ記号が認められる。

(2)は口径14.4㎝、器高4.3㎝の完形品である。天井部は扁平で、天井部と口縁部とをわける稜線は認められず丸い。口縁端部は丸くおさめ、僅かに内傾する面をもつ。天井部外面の⅓上半は回転ヘラ削り調整、その他は回転ナデ調整を施す。天井部内面には複数の同心円叩き文が認められる。色調は灰色、胎土は精良、焼成は堅緻である。ロクロ回転は右方向である。

土師器　壺（図51―3、図版41―10）

口径9.9㎝、頸部径10㎝、胴部最大径12.8㎝、器高12.2㎝をはかる直口壺である。口縁部は真っすぐ上方へのび、口縁端部は丸くおさめる。体部はいびつな球形を呈し、底部は丸底である。外面の胴部上半から口縁部にかけて縦方向のハケ目調整、体部下半は横方向のハケ目調整を施す。なお、外面全体にわたって煤の付着が認められる。口縁部内面は横方向のハケ目調整、体部内面にはナデ

を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土は精良、焼成は良好ではあるが、全体に軟質である。

周溝内出土遺物

須恵器　壺（図51―４、図版41―11）

体部最大径11㎝、頸部径８㎝、残存高7.9㎝をはかる。口縁部は打ち欠かれ、その詳細は明らかにできない。体部最大径は胴部の⅓上半にあり、丸い肩部を形成する。底部は丸みをおび、肥厚する。体部外面下半には回転ヘラ削り調整、体部外面上半は回転ナデ調整・カキ目調整を施す。体部内面は回転ナデ調整、底部内面には仕上げナデが認められる。ロクロ回転は右方向である。色調は

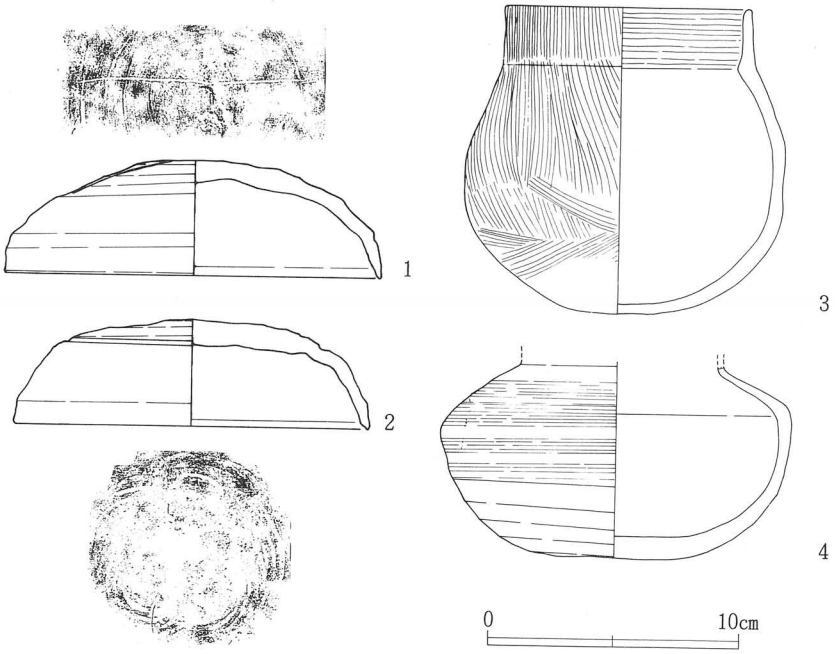


図51　下井足城山２号墳周溝内出土土器実測図

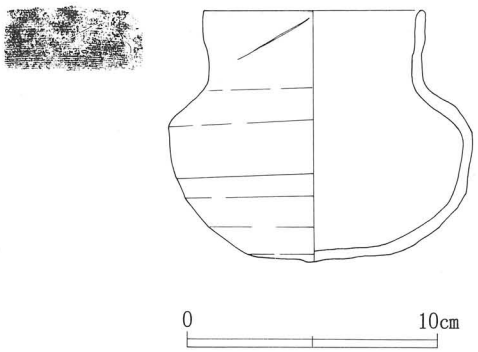


図52　下井足城山２号墳埋葬施設出土須恵器実測図

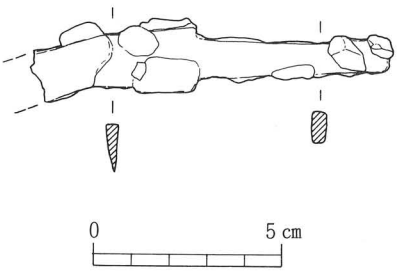


図53　下井足城山２号墳埋葬施設出土鉄製品実測図

灰白色、胎土は精良、焼成は悪く軟質である。

埋葬施設内出土遺物

須恵器　直口壺（図52、図版42—12）

法量は口径8.9㎝、頸部径8.8㎝、体部最大径12.1㎝、器高10.1㎝の完形品である。口縁部はやや外方にのび口縁端部は丸い。体部の最大径は胴部の⅓上半にあり、やや稜をなす。体部外面下半には回転ヘラ削り調整、その他は内外面とも回転ナデ調整を施す。底部は回転ヘラ削り調整によって平底に調整されている。口縁部外面には斜め方向に長さ4.2㎝の「—」ヘラ記号が認められる。色調は灰白色を呈し、胎土は精良、焼成は堅緻である。ロクロ回転は右方向である。埋葬施設内西方からの出土である。

鉄刀子（図53、図版42—13）

刃部先端が欠損し、残存長は9.7㎝である。刃部中央での幅は1.3㎝、棟厚は0.4㎝をはかる。関は両関となっており、茎部は長さ5.3㎝、幅1.1〜0.9㎝、厚さ0.4㎝の大きさである。茎部には木質は認められない。刃部は錆化のため、緩く「へ」の字状に曲がる。埋葬施設内中央部からの出土である。

サヌカイト原石（図版42—14）

各面に粗面を残すサヌカイト原石である。縦10.7㎝、横9.3㎝、最大厚6.2㎝、重量740ｇである。埋葬施設埋土内からの出土である。

サヌカイト熱破砕礫（図版42－15）

一面に粗面を残すほかは、各面とも主要剥離面を留める熱破砕礫である。縦8.1㎝、横７㎝、最大厚6.2㎝、重量370ｇである。埋葬施設埋土内からの出土である。

（6）　小　　結

古墳の築造時期については、先述の土器によって、これを明らかにすることができる。周溝内から出土した須恵器杯蓋は、天井部のカーブのみで、天井部と口縁部とをわける明確な稜線は認められない。これらは、田辺編年[註3)]のＴＫ—43形式、中村編年[註4)]のⅡ形式第４段階に相当し、６世紀後半の年代が考えられる。

6　下井足城山３号墳の調査

（１）　位置と現状

３号墳は、１号墳東裾の標高337～339ｍの尾根東斜面に位置する。１号墳裾には里道がとおり、この道をもって東西の土地境界としている。３号墳はこの里道周辺に埋まっている。

（２）　墳丘と周溝

調査前の墳丘（別添図１）

調査前の地形測量・地形観察では、２号墳と同様、明確な墳丘は認められず、東への緩傾斜のみであった。１号墳裾部付近の一部で等高線の乱れが認められたものの、里道に伴う攪乱と考えていたところである。当所からは、１号墳の項でも述べたように板状の榛原石が出土していることから、箱形石棺のような埋葬施設の存在を予想していたところである。

墳丘と周溝（図39・42・54、図版38）

周溝は北方隅部分を検出したに過ぎず、全体の1/5程度であろうか。明確な規模は明らかにできないが、径８～10ｍ程度の円墳と推定される。周溝の規模は幅1.1～2.5ｍ、深さ0.4～0.9ｍをはかり、周溝の断面形態はＵ字状ないし逆台形状を呈する。埋土は２層に大別でき、上層が黄茶褐色土、下層が茶灰色土となっている。周溝の底から外側斜面にかけて板石状または角柱状に割られた８石の榛原石が散在しており、４石がまとまって出土している部分が過去に掘り出された地点である。

表土除去後、すぐに地山を検出したため、盛土の有無は不明であるが、おそらく、埋葬施設を覆う程度の盛土が存在していたと考えられる。

（３）　埋葬施設

先述のとおり、周溝の一部を検出したに過ぎず、埋葬施設は工事範囲外にあるため追求していない。埋葬施設の詳細は明らかでないが、主軸が尾根等高線と平行する土壙墓ないし木棺墓と推定される。

（４）　遺物の出土状況

腐植土下の褐灰色土から土製品１点（図55、図版42－16）、サヌカイト製削器１点（図56、図版42－17）、土師器細片が出土している。また、周溝埋土中からは土師器片が出土している。

（５）　出土遺物

不明土製品（図55、図版42—16）

明赤褐色を呈する形象埴輪状の土製品である。形態は魚尾状を呈し、両面には端から中央部へ向

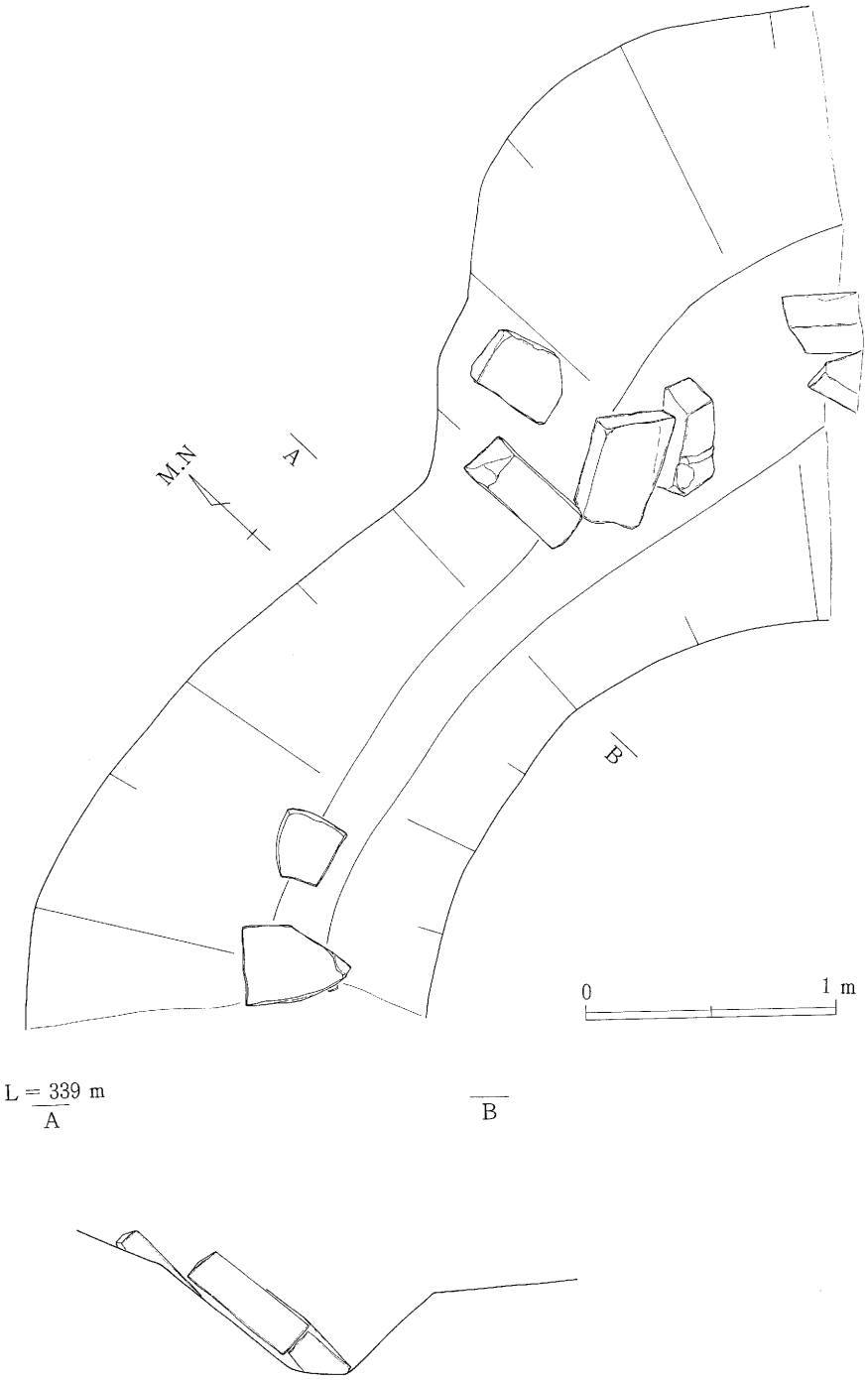


図54　下井足城山３号墳周溝実測図

けて斜めの粘土帯が付されている。残存長6㎝、最大幅4.9㎝、最大厚2.1㎝である。褐灰色土からの出土である。

サヌカイト製削器（図56、図版42—17）

横長状の剥片を素材とし、断面形態は三角形を呈する。腹面下辺部に調整加工を施し、緩やかな弧状の刃部を形成している。主要剥離面には調整は認められない。全長5.5㎝、最大幅2.2㎝、最大厚0.9㎝である。褐灰色土からの出土である。

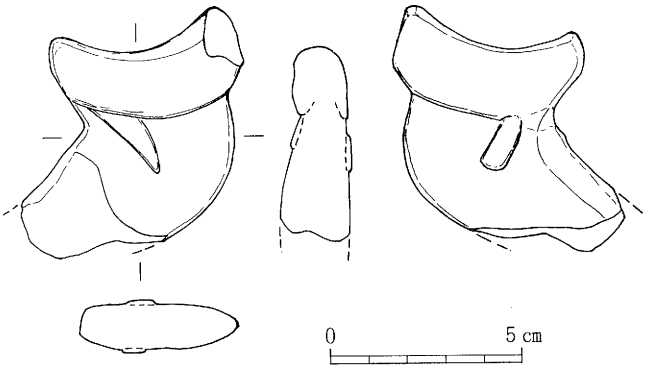


図55　下井足城山3号墳出土土製品実測図

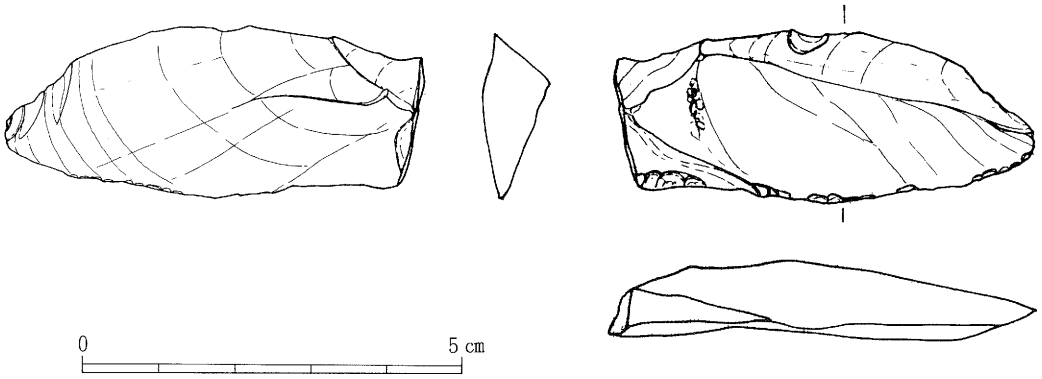


図56　下井足城山3号墳出土削器実測図

（6）　小　　結

3号墳の周溝の一部を検出したのみで、この大半が調査範囲外となるため、明確な規模は明らかでないが、径8～10mの円墳と推定される。古墳の時期を明らかにできる遺物は認められないが、立地状況から2号墳と同様、6世紀後葉頃と推定できる。埋葬施設、築造時期等は将来の課題としたい。

7　下井足城山古墳群その他の遺構

土坑03・ピット群（図56、図版39）

下井足城山１号墳南西の４号墳にほど近い緩やかな尾根鞍部に７基のピットと１基の土坑（土坑03）が位置する。ピットは径25～30㎝、深さ約10～20㎝の規模である。ピット内から出土遺物は認められない。各ピットの埋土は淡茶色土、暗褐色土、茶褐色土等である。

土坑03の平面形態は円形を呈し、規模は径80㎝、深さ70～80㎝である。土坑埋土は炭細片を含む淡茶灰色土で、この上面からは焼土塊が出土しているのみで、時期を明確にできる遺物は認められない。これらは４号墳に伴う可能性もあるが、これを明らかにできない。

土坑04（図57、図版40）

土坑04は下井足城山２号墳下（東方）の標高338.25ｍに位置する不整円形土坑である。規模は径140～150㎝、深さ約５～20㎝である。土坑内西方の山側には径60～80㎝、深さ15～51㎝の円形落ち込みが認められる。やや粘質の褐色の埋土内からは土師器細片が出土しているが、時期を明らかにできない。

土坑05（図57、図版40）

土坑05は下井足城山２号墳下（北方）の標高338.25ｍに位置する楕円形土坑である。規模は長径140㎝、短径100㎝、深さ約10～33㎝である。褐色の埋土内からは遺物の出土は認められず、時期を明らかにできない。

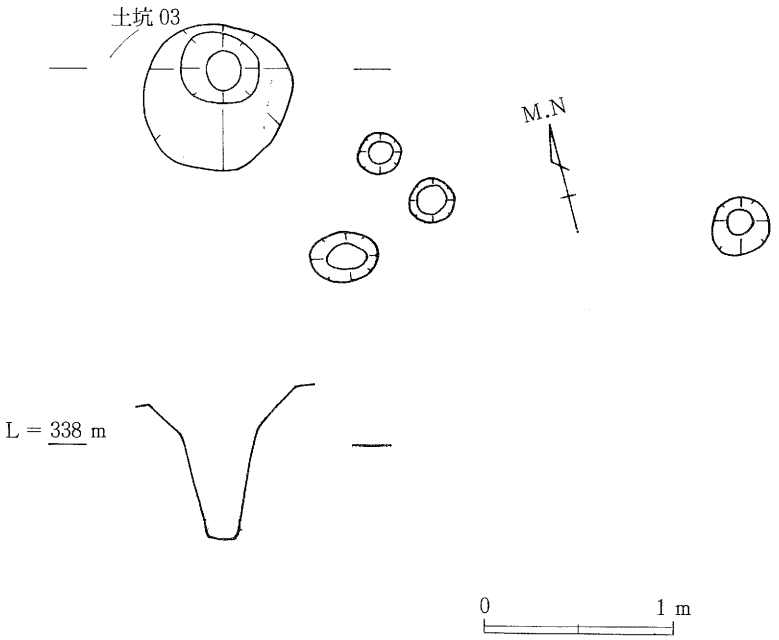


図57　下井足城山古墳群土坑03・ピット群実測図

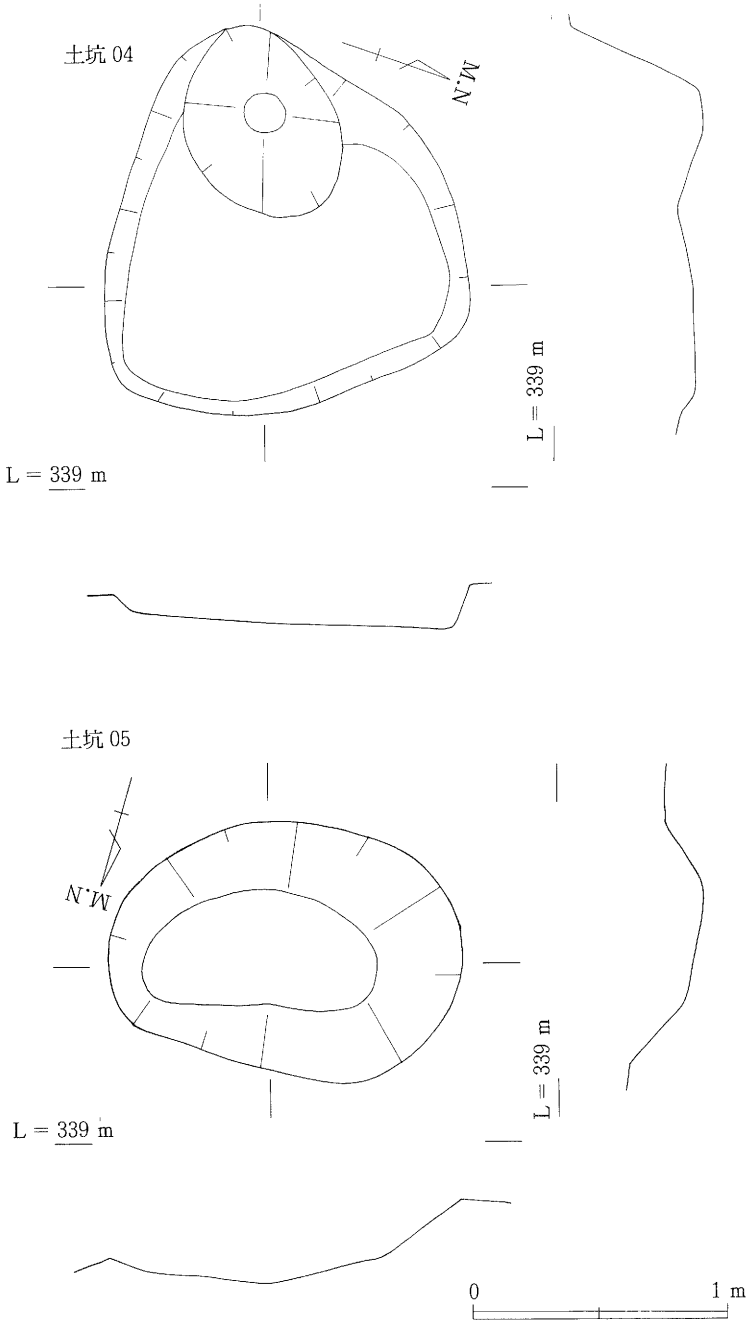


図58　下井足城山古墳群土坑04・05実測図

8 まとめ

下井足城山1号墳の埋葬施設はやや長めの割竹形木棺にもかかわらず鉄刀子、鉄鎌（直刃鎌）、土師器片と僅かが出土したにすぎない。直刃鎌は、一般に5世紀中葉までの古墳に副葬[註5)]されており、宇陀地方の古墳においてもその傾向を窺い知ることができる。1号墳出土の直刃鎌はその先端が「コ」の字状を呈し、この形態からその類例は、4世紀後葉の奈良市マエ塚古墳[註6)]・天理市上殿古墳[註7)]、5世紀前葉の都祁村三陵墓西塚古墳[註8)]に求めることができる。また、墓壙内出土の土師器壺も鉄鎌と同様の年代が与えられるものである。

下井足古墳群は、これまでの発掘調査により、4世紀～5世紀の古墳が確認されており、下井足城山古墳群は下井足古墳群の一支群をなすことから、同時期の古墳の存在を予想していたところである。下井足古墳群の大半が未調査であり、詳細は明らかでないが、下井足1号墳や井足城跡内の未調査古墳（榛原町遺跡地図番号2－66・奈良県遺跡地図番号15－B－62)は、ともに径約約30mと比較的規模が大きい円墳で、この古墳群における盟主級の古墳と推定され、その築造時期は5世紀初頭から5世紀前葉と考えられる。鏡・玉類・刀剣類・農耕具類等を副葬する古墳の被葬者を当地域でのA級、刀剣類・農耕具類を副葬する古墳の被葬者をB級とするならば、下井足城山1号墳の被葬者はその副葬品の内容からC級程度に位置づけられ、5世紀前葉頃の重層的構造を垣間見ることができる。

5世紀中葉以降には下井足古墳群から周辺へと造墓活動地域が移動したと考えられ、横穴式石室が普及した6世紀後半ともなると、その中心は丹切古墳群[註9)]となっている。下井足城山2号墳の被葬者は、丹切古墳群での造墓活動最盛期にもかかわらず、丹切古墳群には加わることなく、また、横穴式石室を埋葬施設としていない。丹切古墳群の被葬者たちとは別の系譜・地位にある人物であったのであろうか。

1号墳の墳丘盛土・周溝内、2号墳の墓壙内、3号墳上面など調査地の各所からサヌカイト剥片・原石・熱破砕礫・削器などが出土しているが、榛原町の西半分の大半は花崗岩類の丘陵[註10)]で占められ、サヌカイトの露頭は認められないことから、これらは二上山方面から搬入された可能性が高い。古墳築造前には縄文時代から弥生時代にかけての生活域があったものと考えられるが、古墳築造で削平されたためか、これらの遺構は認められない。

9 抄　　録

遺　跡　名	下井足城山古墳群（榛原町遺跡番号２―60ほか） （１号墳・２号墳・３号墳）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字下井足625－１番地（小字名　城山）
遺跡立地	標高約338～358ｍの尾根上
遺跡規模	南北：約300ｍ、東西：約50ｍ、面積：約15,000㎡
種　別	古墳
調　査　名	下井足城山古墳群発掘調査事業
調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘、調査担当者　柳澤一宏）
調査原因	町道拡幅工事（事業者：榛原町役場建設課）
現地調査期間	1991年５月21日～1991年８月13日（未調査古墳の測量調査を含む）
発掘調査面積	約535㎡
検出遺構	１号墳：円墳（径14ｍ、高さ１～２ｍ、周溝、割竹形木棺） ２号墳：円墳（径５～７ｍ、高さ１ｍ、周溝、土壙墓） ３号墳：円墳（推定径８～10ｍ、周溝） 土坑、ピット
検出遺物	サヌカイト、須恵器、土師器、鉄製品、瓦器、銭貨ほか　整理箱１箱
資料等の保管	榛原町教育委員会（文化財整理室）

註１）　白石太一郎他『奈良県遺跡地図』第２分冊　奈良県教育委員会　1971
註２）　柳澤一宏『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要２　榛原町教育委員会　1987
註３）　田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966
註４）　中村　浩『陶邑』Ⅲ　大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会　1978
註５）　都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第13巻第３号　考古学研究会　1967
註６）　小島俊次『マエ塚古墳』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第24冊　奈良県教育委員会　1969
註７）　伊達宗泰「和爾上殿古墳」　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第23冊　奈良県教育委員会　1966
註８）　『奈良県総合文化調査調査報告－都祁野地区－』　奈良県教育委員会　1952
註９）　菅谷文則ほか『宇陀・丹切古墳群』　奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第30冊
　　奈良県教育委員会　1975
註10）　『土地分類基本調査　桜井』　奈良県企画部　1982
　　『土地分類基本調査　吉野山』　奈良県企画部　1985

X　行者山古墳群測量調査概要

1　調査の契機と経過

（1）　調査の契機と経過

口宇陀地域に多くの前方後円墳が分布することが近年の分布調査・発掘調査等によって確認され、その数は増加傾向にある。また、各所において測量調査も実施され、地域首長墓の系譜等も明らかにされつつある。ここに報告する榛原町笠間に所在する前方後円墳を含む古墳群についても測量調査の必要性をかねてより考えていたところである。1991年12月21日～26日、1992年１月12日・20日の６日間にわたって奈良県立橿原考古学研究所、宇陀古墳文化研究会の協力を得て、古墳群の測量調査・写真撮影を実施したので、その概要を報告する。

この前方後円墳は、国営農地造成工事に伴う事前踏査で1979年に確認されたもので、現在は奈良県遺跡番号15―Ａ―249[註1)]、榛原町遺跡番号２―285[註2)]として登載している。なお、他の古墳は1971年の踏査によってその存在が知られているところである。地元・笠間地区では、この古墳を含めた尾根を「行者山」と呼称していることから、この古墳群の名称を「行者山（ぎょうじやま）古墳群」とした。

調査関係者等は次のとおりである。

調査主体	榛原町教育委員会（教育長　山尾正弘）
調査担当課	榛原町教育委員会　社会教育課（課長　尾上博美）
調査担当者	榛原町教育委員会　社会教育課　技師　柳澤一宏
調査補助員	井上好美、森塚和彦、本村充保、山本美恵子
調査作業員	尾崎秀子、加留勘次郎、加留千鶴子、田中君子、堤　賢治、堤　愛子、林　忠男、原田音治郎、森田重子、南　倉蔵、南　静子
調査協力	奈良県立橿原考古学研究所、宇陀古墳文化研究会、楠元哲夫、朴　美子、辻本宗久、笠間自治会、三浦四郎、桜実神社、南　元弘、吉岡庄五郎

（2）　現地調査日誌抄

1991年（平成３年）

12月21日（土）

草刈り、雑木除去作業。測量杭設置。

12月23日（月）

草刈り、雑木除去作業。測量杭設置。

12月24日（火）

草刈り、雑木除去作業。測量杭設置。

12月26日（木）

１号墳測量。

１月12日（日）

１号墳、２号墳測量。

１月20日（月）

３号墳測量。

2　位置と環境

行者山古墳群は、大宇陀町と榛原町との境界となっている標高約400～446ｍの丘陵から北へのびる標高約360～365ｍの尾根先端部の宇陀郡榛原町大字笠間554、555、556番地（小字名中西）に立地する。南の丘陵からのびてくる尾根は、痩せ尾根となっているが、これらの古墳が位置する先端部分は独立丘陵状を呈している。笠間川上流域の右岸にあり、尾根は東流するこの川によって形成された東西方向の狭谷に突出し、尾根の東西両側には笠間川本流に面する小谷地形が形成されている。現状は山林、雑木林となっているが、かつては、その眺望は良好であったであろう。眼下には笠間川、笠間集落を望み、北方は初瀬谷とを分ける標高約408～525ｍの丘陵を見上げる。西方は笠間谷を閉じるが、東方は宇陀川に向けて谷が開け、榛原の市街地を遠望できる。周辺には、幾つかの前方後円墳が確認されており、南東約650ｍの尾根稜線上には三ツ子塚古墳[註3)]、東方約1,300ｍの尾根稜線上にはダケ古墳[註3)]、東方約800ｍの笠間谷内には澤ノ坊２号墳[註4)]と比較的まとまって位置している。また、行者山古墳群の東方にひろがる石榴垣内遺跡[註5)]は、発掘調査により古墳時代～奈良時代・中世の集落跡であることが明らかとなっている（図２・59、図版43）。

3　測量結果

これまでの分布調査では、行者山古墳群は前方後円墳１基、円墳１基、古墳状隆起１基で構成されていると考えていたが、今回の測量調査によって古墳状隆起が円墳であることが明らかとなったため、南から順に前方後円墳を行者山１号墳、この北側の円墳を行者山２号墳、先端の円墳を行者山３号墳としている。

行者山１号墳（別添図２、図版44・45）

墳丘の主軸はＮ―42°―Ｅの方向にもち、前方部を北東にむけた前方後円墳であるが、地形的制約からほぼ南北にのびる尾根の方向とは一致していない。

墳頂部は大きく削平され平坦となっており、前方部、後円部とも標高364.5～365ｍとなっている。削平時の墳頂部の土砂は、後円部南西斜面に棄てられているようである。後円部中央よりやや北西寄りのところには天保元年銘の大神宮灯籠１基が建立されており、墳頂部の削平がこの頃に行われたとも考えられる。

墳丘東裾部は後世の開墾により、その一部が改変されており、くびれ部から前方部にかけての墳丘裾の旧形は明らかでないが、その他は良好に観察できる。後円部裾は363ｍ付近、くびれ部から前方部裾は363.5ｍ付近、前方部端は364.25ｍ付近の等高線となり、後円部北西側にはテラス状の緩斜面が認められる。このような状況から、本古墳の規模は全長28ｍ、後円部径16ｍ、同高２ｍ以上、前方部長12ｍ、同幅12ｍ、同高1.5ｍ以上となる。なお、尾根稜線からの前方部高は0.75ｍ以上である。前方部端の平面形態は、流失のためか、やや丸みをもち、両端の稜線も鋭角に突出する

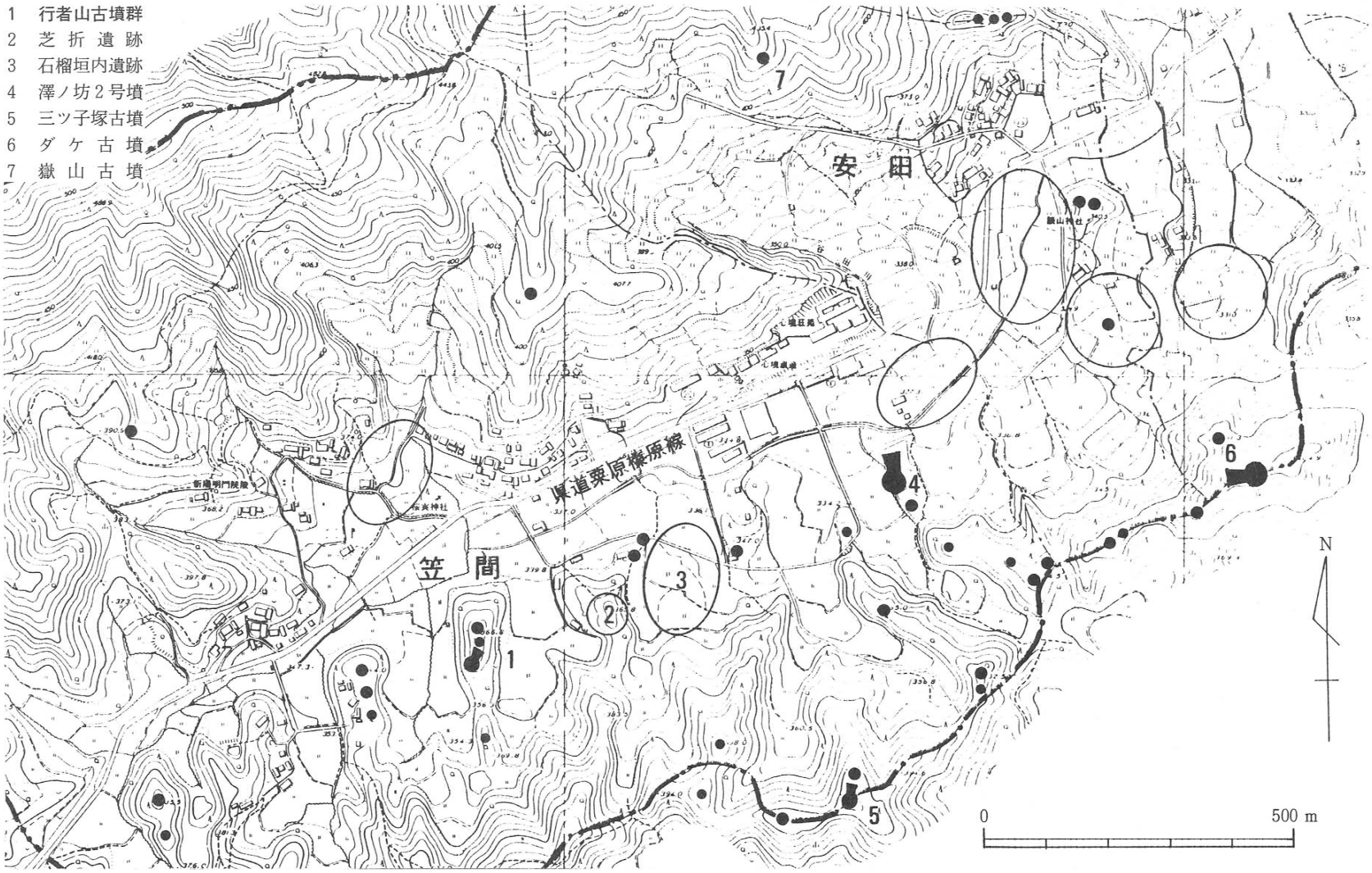


図59 行者山古墳群周辺遺跡分布図

のではなく、隅丸形を呈する。測量図および地形観察から、前方部前面裾には掘り割りが穿たれていると考えられる。先述のとおり、墳頂部は削平されており、本来の墳丘高は明らかにできないが、後円部は前方部より約0.5m～1m程度高かったと推定できる。墳丘には段築は認められず、埴輪、葺石等の外部表象も見られない。また、須恵器、鉄製品等の遺物も採集していない。

行者山2号墳（別添図2、図版45）

2号墳は1号墳の北方約30mに位置する円墳である。測量結果から墳丘裾は南側で364m、西側で364.5m、東側で362.5mの等高線付近と考えられる。墳丘規模は南北径14m、東西径12m、高さ1～2mをはかる。埋葬施設は木棺直葬と推定される。

行者山3号墳（別添図2、図版45）

尾根先端の最高所に築造されている円墳で、2号墳の北隣に立地する。測量結果から墳丘裾は南側で364.5m、西側で364.75m、北側で364.25m、東側で364.75mの等高線付近と考えられ、墳丘規模は南北径19m、東西径20m、高さ1.5～2mとなる。墳頂部は径約12mの平坦部となっており、その中央には径約2～2.5mの盗掘坑が穿たれている。墳頂部は後世に幾らかの削平を受けている可能性が考えられる。

古墳南斜面は南北約7m、東西約5m、深さ約1.5mにわたって掘り込まれており、簡易な石組を施した祠状の施設がある。これらの石材は横穴式石室に伴うものとも考えられているが、現状では、その詳細を明らかにできない。石組内には数十年前に安置したと言われている役行者像があり、この山が行者山と呼ばれる所以である。

4 まとめ

行者山1号墳の詳細な築造年代は、遺物の出土が認められないため明らかにできないが、墳丘の形態からは5世紀後葉から6世紀前葉に位置付けることができよう。埋葬施設は削平され、存在していない可能性もあるが、木棺直葬と考えられる。行者山2・3号墳も詳らかな築造年代は明らかでないが、1号墳と同様の年代と考えられ、埋葬施設も木棺直葬であろう。

笠間谷では、発掘調査・分布調査等により、新たな古墳が確認されつつあり、今後もその数は増加していくであろう。現段階においても、これらの成果により、小地域での前方後円墳を中心とする古墳の系譜を辿ることも可能となってきている。この流域では、地域首長墓として4世紀後葉から5世紀前葉に澤ノ坊2号墳が出現し、その後、笠間谷の小地域首長墓として、6世紀前葉までに行者山1号墳が築造される。その後、丘陵稜線上には三ツ子塚古墳が築造され、6世紀第2四半期の宇陀地域の首長墓のひとつであるダケ古墳をもって、この地域での前方後円墳の築造を終えている。行者山1号墳と三ツ子塚古墳・ダケ古墳とを同一系譜上に位置付けるには、やや検討を要するが、行者山古墳群の被葬者は宇陀地域の首長層を支えた小地域首長とその一族たちであろう。

5 抄　　録

遺　跡　名	行者山(ぎょうじやま)古墳群（1・2・3号墳）（榛原町遺跡番号2―283～285）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字笠間555、556、558番地（小字名　中西）
遺跡立地	標高約360～365mの尾根稜線上
種　別	古墳3
調査主体	榛原町教育委員会
調査原因	測量調査
現地測量期間	1991年12月21日～26日、1992年1月12日・20日
遺　構	1号墳：前方後円墳（全長28m、現存高1.5～2m）
	2号墳：円　　墳（直径12m、高さ1～2m）
	3号墳：円　　墳（直径20m、高さ1.5～2m）
資料等の保管	榛原町教育委員会

註1）　石野博信他『奈良県遺跡地図』第2分冊改訂　奈良県教育委員会　1984
註2）　柳澤一宏『榛原町内遺跡分布調査概報』　榛原町文化財調査概要2　榛原町教育委員会　1987
註3）　伊達宗泰編『大宇陀町所在前方後円墳実測調査報告書』　大宇陀町教育委員会　1991
註4）　東　潮「笠間」『大和を掘る―1990年度発掘調査速報展―』　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館　1991
註5）　奈良県立橿原考古学研究所『笠間遺跡群（石榴垣内遺跡）発掘調査の成果』　1991

付載１　榛原町八滝採集の須恵器

１　はじめに

榛原町八滝は、「壬申の乱」の将軍のひとりである文祢麻呂墓があることで知られている。この墳墓が発見されたのは、江戸時代後半（1831年）のことで、炭の中から出土した墓誌・銅箱・金銅壺・ガラス壺は地元の竜泉寺に保管されたという。その後、出土品は帝室博物館の収蔵され、今に至っている。このほか、先の八滝長坂遺跡、八滝家ノ前遺跡などの遺物散布地が点在している。

1986年３月、高井遺跡の発掘調査中に作業関係者から「八滝の工事地で土器が出土した。」との話を聞き、さっそく現地に赴いた。出土地は竜泉寺の西方約60ｍの尾根の南斜面で、すでに工事は終了し、新しい畑地となっていた。工事関係者によると、「工事前も幾つかの畑地となっており、古墳のような盛り上がり等は認められなかった。」とのことである。ここに紹介する須恵器は、畑地造成工事の際、出土したものを工事関係者によって工事地の片隅に集められていたもので、明確な出土状況・その他の出土遺物については明らかでない。なお、出土地は旧形を留めていないものの、「榛原町遺跡番号４－20」として登載している[註1)]（図22）。

２　採集須恵器

採集した須恵器は、提瓶１個体分の破片である。破面が新しく、工事に伴い下半部が破砕されたようである。内外面とも横ナデ調整された口縁部は、やや内湾し、口縁端部は丸くおさめる。体部外面にはカキ目調整が施され、体側部の両側には形骸化したボタン状の円形把手が貼付されている。体部前面の中央は体部製作時の粘土板をあてた状況がうかがえる。また、体部と口縁部との接合痕も明瞭に認められる。法量は口径5.2㎝、復元体部径13.7㎝、現存高11.5㎝、復元器高約17㎝を測る（図60）。

３　ま　と　め

採集須恵器は、田辺編年[註2)]のＴＫ－209型式、中村編年[註3)]のⅡ型式第５段階に相当し、６世紀末葉から７世紀初頭の年代が考えられる。遺物の出土状況、遺跡の旧形など詳細は明らかでなく、遺跡の性格を特定できないが、古墳または住居跡の可能性が考えられる。石材の出土が認められないことから、古墳とすれば、木棺直葬墳と思われるが、出土地周辺での古墳群は確認していない。本稿は、資料紹介のみに留め、今後の調査に期したい。なお、資料は榛原町教育委員会において保管している。

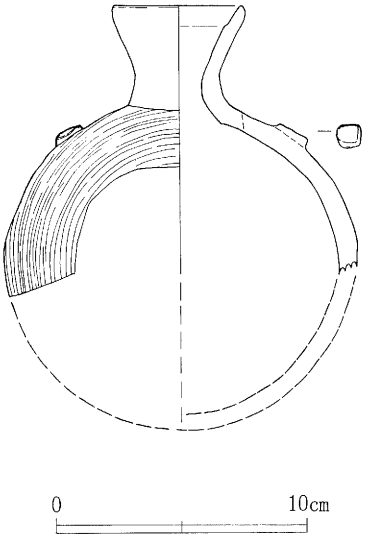


図60　榛原町八滝採集須恵器実測図

註１）柳沢一宏『榛原町遺跡分布調査概要』　榛原町文化財調査概要２　榛原町教育委員会　1987

遺跡一覧表では、下記のとおり記載している。

榛原町遺跡番号	遺跡名	所在地	種別	時代	遺跡概要	遺物	備考
4－20		榛原町八滝	古墳？	古墳		須恵器	消滅

註２）田辺昭三『陶邑古窯址群』Ⅰ　平安学園考古学クラブ　1966

註３）中村　浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑』Ⅲ（大阪府文化財調査報告書第30輯）　大阪府教育委員会　1978

付載２　伝　山部赤人墓五輪塔実測調査概要

１　はじめに

榛原町の北東の山中に万葉歌人のひとりである山部赤人の墳墓と伝えるところがあり、『大和名所図会[註1)]』や『大和志[註2)]』などにも記されている。町の名所ともなっている当地は、東海自然歩道が整備され、案内板等が乱立の様相も呈している。

伝承地は、額井岳中腹の南東に派生する標高約495ｍの痩せ尾根稜線上の奈良県宇陀郡榛原町大字山辺三693番地（小字名キリヤマ）に立地し、そこには１基の五輪塔が建てられている。五輪塔は写真等で紹介されている[註3)]ものの、実測図が作成されていないため、実測調査を行い、その概要を報告するものである。なお、当地は、榛原町遺跡地図[註4)]（番号３－４）にも登載している。伝承地の北東約800ｍには戒場遺跡や戒長寺が位置し、谷を隔ててこれらを遠望できる（図２）。

２　調査概要

一辺約2.3～2.4ｍ、高さ0.4～0.8ｍの榛原石の乱石積の方形基壇の中央部に五輪塔が造立され、五輪塔は、基壇と同じく地元に産するいわゆる榛原石をもって形成されている。通有の五輪塔と比較すれば、粗雑で鑿痕が随所に残る粗い面仕上げである。地・水・火・風・空輪がともに揃っており、総高は153㎝をはかる（図61、写真12・13）。

地輪は平面形態がほぼ正方形で、その規模は一辺54～56㎝、高さ39㎝となっている。一部の側面が欠損している。

水輪は樽形を呈し、上面径35㎝、下面径30㎝、高さ51㎝をはかる。最大径はほぼ中央部にあり、52㎝となっている。一部が欠損するものの、ほぼ当初の形状を保っている。

火輪は方錐形を呈し、稜線は全体に丸みを帯びる。屋根反りの曲線は認められず、軒面は、ほぼ垂直である。軒先部分が２箇所で大きく欠損しているが、軒下端幅57㎝、軒上端幅37㎝、中央軒厚13㎝、高さ27㎝をはかる。各所に縦方向の浅い溝状の鑿痕が明瞭に認められる。

空風輪は一石からなり、扁平な球形を呈する。中央部には幅３～５㎝、深さ２～３㎝の溝が斜めに刻まれ、これによって空・風輪を形成している。空輪最大径41㎝、風輪最大径40㎝、高さ36㎝をはかる。

３　ま　と　め

地・水・火・風・空輪のいずれにも梵字、年号等の刻銘は認められず、具体的な造立年代は明らかにできない。この五輪塔は全体に丸みを帯び、空風輪は比較的大きく特異ともいえる全体像を形成している。他に類例を求められないが、五輪塔が定型化する以前の様式を留めているとも考えられる。造立年代は鎌倉時代[註5)]と推定されているが、この様相からやや遡る平安時代末葉の可能性も考

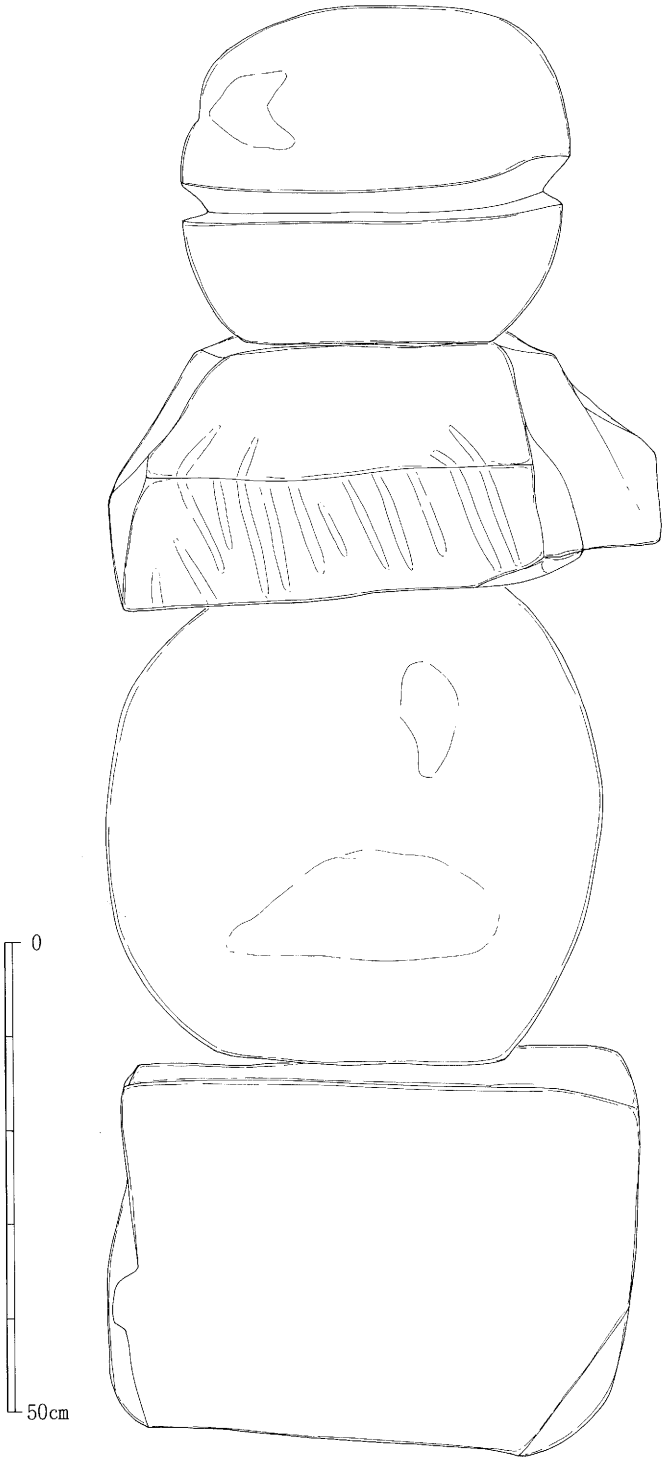


図61　伝　山部赤人墓五輪塔実測図

写真12　伝　山部赤人墓五輪塔(1)

写真13　伝　山部赤人墓五輪塔(2)

えられる。この五輪塔と戒長寺とは何らかの関係が求められるのであろうか。

奈良時代の埋葬地・埋葬方法等を考えると、当地が山部赤人の墳墓とは考えられないが、鎌倉時代以降、ここを赤人墓とする何らかの理由があり、戒長寺との関係も推定できる。現在も、地元では「山部赤人墓」としての顕彰がなされている。

4 抄　　録

遺　跡　名	伝　山部赤人墓（榛原町遺跡番号３－４）
調　査　地	奈良県宇陀郡榛原町大字山辺三693番地（小字名　キリヤマ）
遺跡立地	標高約495ｍの尾根稜線上
種　別	墳墓？
調査主体	榛原町教育委員会
調査原因	実測調査
現地実測日	1991年10月28日
概　要	鎌倉時代前期の五輪塔（高さ153㎝）
資料等の保管	榛原町教育委員会

註１）『大和名所図会』　1791
註２）『大和志』　1726
註３）『榛原町文化財図録』　榛原町教育委員会　1978など
註４）『榛原町遺跡分布調査概報』　榛原町教育委員会　1987
註５）一般に鎌倉時代前期と考えられている。註３）に同じ。

参考文献

川勝政太郎『新版　石造美術』　誠文堂新光社　1981

図　　版

図版一　萩原西高田遺跡・萩原前川遺跡・萩原狐ヅカ遺跡

航空写真（1981年撮影）

図版二　萩原西高田遺跡・萩原前川遺跡・萩原狐ヅカ遺跡

航空写真（1981年撮影）

図版三　萩原西高田遺跡

調査前（東から）

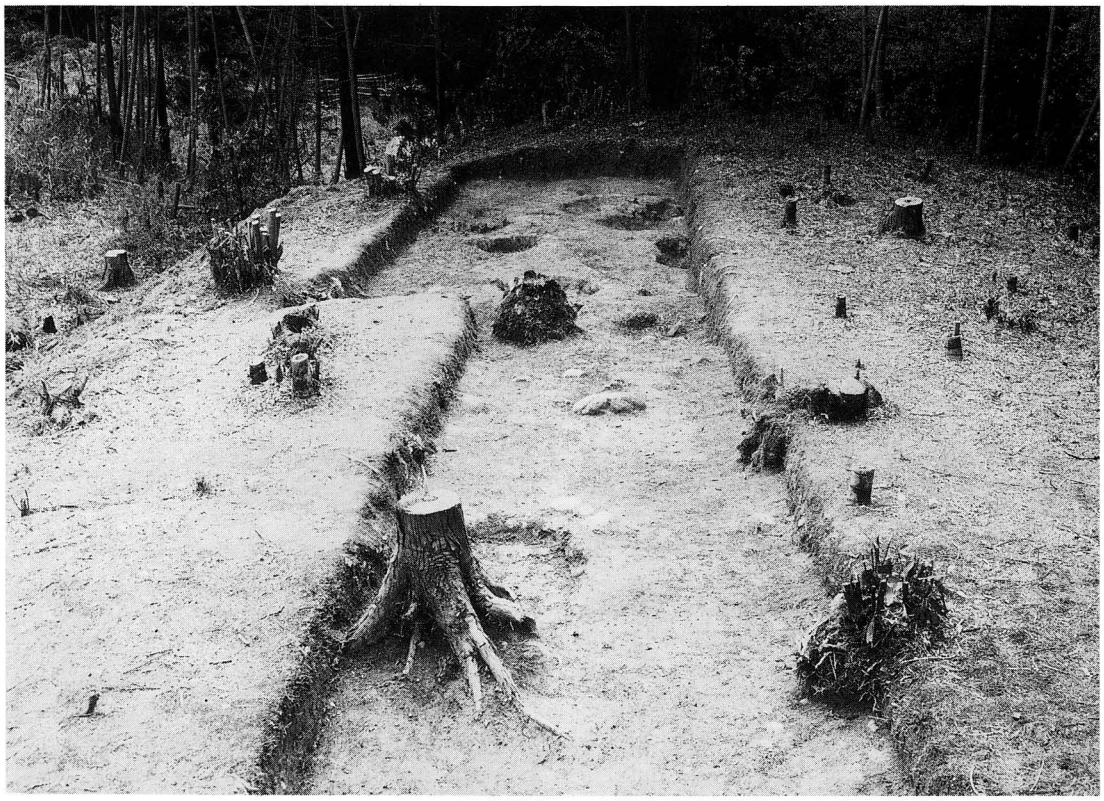
調査前（東から）

図版四　萩原西高田遺跡

北群（南から）

北群（西から）

図版五　萩原西高田遺跡

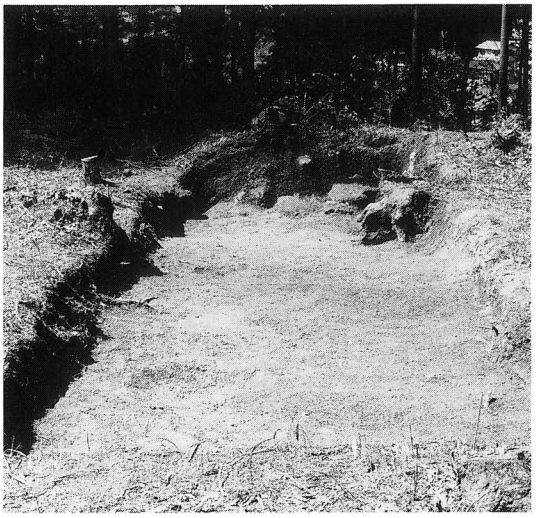


南群（北から）

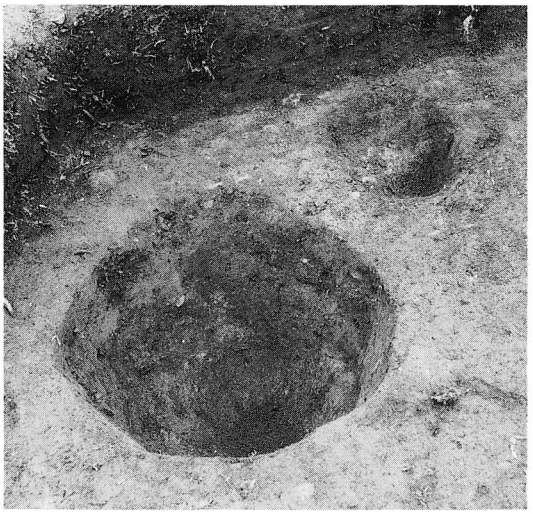
南群（南から）

図版六　萩原西高田遺跡

中央部（南から）



中央部（東から）



ＳＫ－０１・０２（西から）

ＳＫ－０１遺物出土状況（東から）

ＳＫ－０３・０４（西から）

ＳＫ－０５（北から）

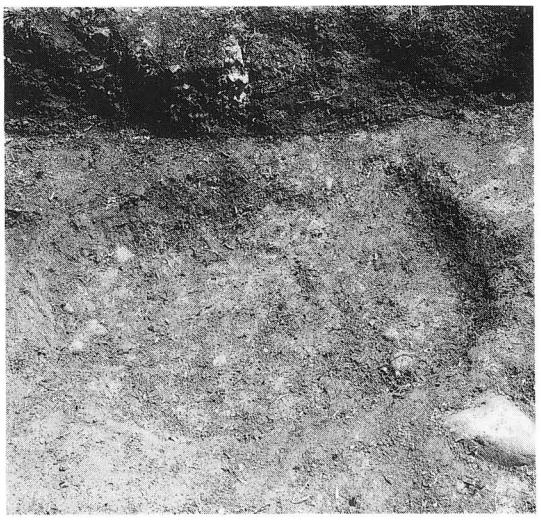
ＳＫ－０６（北から）

ＳＫ－０７（北から）

ＳＫ－０８（西から）

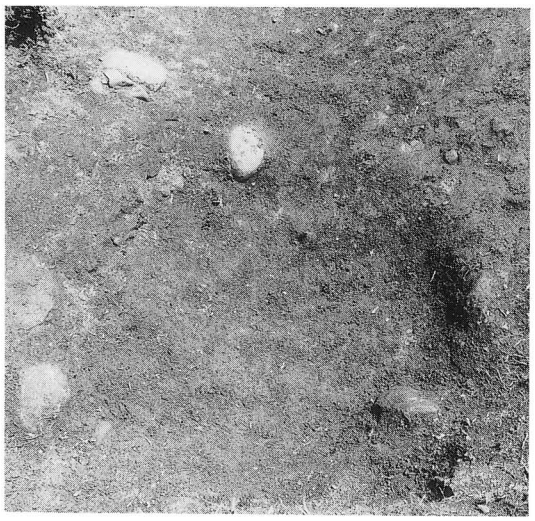
ＳＫ－０９（北から）

ＳＫ－１０（北から）



ＳＫ－１１（西から）

図版八　萩原西高田遺跡



ＳＫ－１２（西から）

ＳＫ－１３（西から）

ＳＫ－１４（西から）

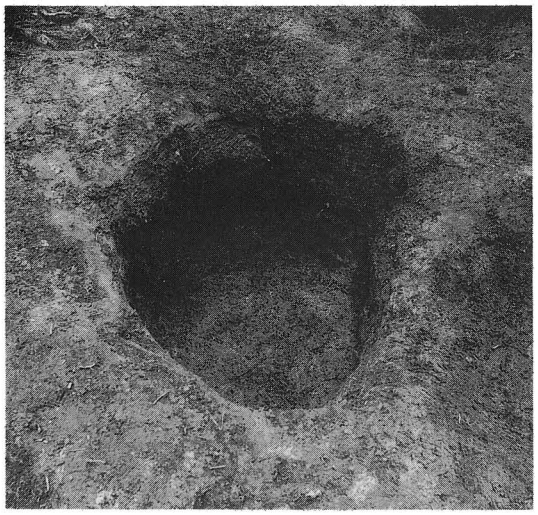
ＳＫ－１５（東から）

ＳＫ－１６（南から）

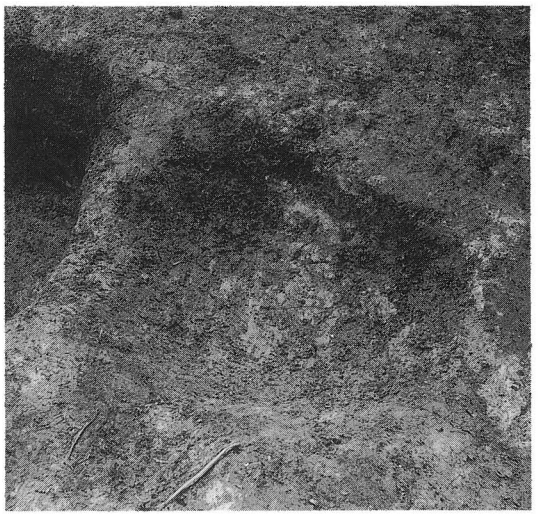
ＳＫ－１７（南から）

ＳＫ－１８（西から）

ＳＫ－１９（西から）



ＳＫ－２０（西から）



ＳＫ－２１（西から）

ＳＫ－２２（西から）

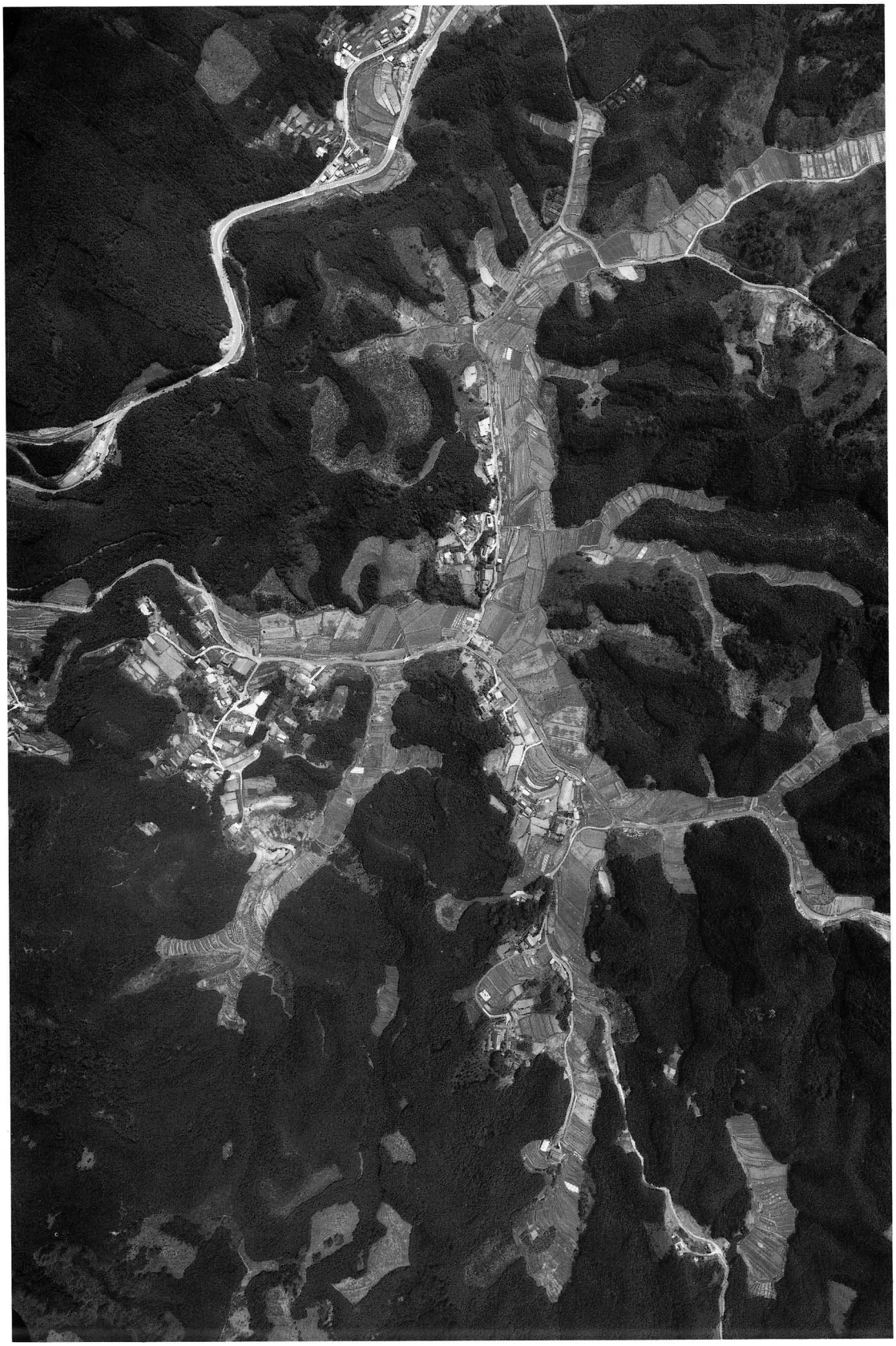
作業風景

図版一〇　萩原前川遺跡

調査前（南から）

調査後（南から）

図版一一　八滝長坂遺跡



航空写真（1981年撮影）